

凡例

此書に載する養方の原始め余の父石井治右衛門安政年中より養蠶養方改良に熱心し養方種々に経験して舊習を一洗し新に良方を覺り蠶は種々の病を發しさず其原因を發見し病の治療法且豫防等を定め多年研究して連年豐作打續きければ近隣の不作者より養方教示に依頼され應じて教示なす處皆上作を得る又諸方より違作者依頼に來る父諸人は助成を盡し地里の遠近を煩らはざ奔走して教示なしければ多年凶作打續き困難なしたる者悉く豐作す此由世間へ傳弘して年々依頼者増加なす父一人にては奔走して教示なし難き故母も教示に出て數ヶ處へ教育す又追々擴張して二人まで教へ盡されざるにつき余明治八年より父母の助教



凡二  
に出又三名にてりもとゞむざる様になり余の兄與右衛門全九年より獨行にて數十戸へ教示す余全十年より獨行にて數ヶ處へ教示す家内四名其他弟子を遣ひ數ヶ所に分れ(一人持ハ四十戸)各々競争して教示を受し地方は産地を始め相模國は津久井郡愛甲郡高座郡武藏國は南多摩郡甲斐國は北都留郡此三ヶ國五郡の不作者へ數千名教示なす此多年實地經驗と該宜しきを擧て一つの小冊に綴り婦女子の見易きために畫圖を顯はし文意は俗語に演て童蒙よ諭す蠶業此書に據らば一家を富すの益あり養方進歩の教導なら

明治二十六年十月十三日

石井永次郎識

新撰 實用 養蠶獨案内

目錄

附 言 ..... 一

(一) 桑と三種仕立べき事 ..... 二

(二) 椹時附方並に養育の事 ..... 二

    并に接木仕方の圖入 ..... 二

(三) 桑の木へ病附たるをれとす事 ..... 四

(四) 良桑葉の眞形三十七種の寫生 ..... 一五

    并に桑の名義數種の事 ..... 一五

(一五) 桑苗ある形採り方の事 ..... 二四

    并に仕方圖入 ..... 二四

(六) ぶつめき苗採方の事……………二六

並に仕方圖入

(七) 地景と地味に應じて桑を仕立方の事……………二八

(八) 根刈桑仕立方の事……………二九

并に仕立方圖入

(九) 高木桑仕立方の事……………三二

并に仕立方圖入

(十) 桑木へ肥培に用べき品々の事……………三四

并に仕立方圖入

(十一) 蠶室建築の事……………三六

并に建方圖入

(十二) 養蠶を家屋と人員と適當の量と定むるを肝要と

すべき事……………三九

(十三) 養蠶諸道具の事……………四一

并に諸道具圖入

(十四) 蠶種求めめたの事……………五二

(十五) 蠶種購求して扱方の事……………五三

(十六) 蠶種を寒水に浸すべき事……………五四

并に仕方圖入

(十七) 蠶種貯へ置し處より取出して發生期に至る迄の

保護方の事……………五八

并に保護の圖入

(十八) 寒暖計にて蠶陽氣を計る事……………六三

(十九) 蠶掃落し仕方の事……………六四



并に椀探圖同捨る圖掃落仕方圖網にて蠶尻と  
去る圖入

(二十) 桑葉刻方の事..... 六六

并に刻方圖入

(廿一) 蠶眠善惡見様の事..... 七六

并に眠方圖入

(廿二) 蠶病の景形原因治療法の事..... 七八

并に蠶病の圖入

(廿三) 獅子蠶眠起の事..... 九二

并に中桑改良の事

(廿四) 鷹蠶眠起の事..... 九五

(廿五) 船蠶眠起の事..... 九七

并に桑笠改良の事

(廿六) 庭蠶眠起の事..... 九八

(廿七) 熟蠶適度を見る事..... 一〇〇

並に熟蠶揚方圖入

(廿八) 蠶を簇に登せて繭造り終る迄の注意の事..... 一〇五

(廿九) 繭かき落して扱方の事..... 一〇七

並に簇はなして風を入る事

(三十) 蠶卵種産せ方の事..... 一一二

並に蠶卵産せ方の圖入

(卅一) 蛾の卵を産附たての扱方の事..... 一一三

(卅二) 蠶卵種高下の事..... 一一九

(卅三) 養蠶検査表..... 一一九



(卅四) 夏蠶養育方の事……………一三六

(卅五) 夏蠶七千頭試験表……………一三九

(卅六) 秋蠶の異名並に四化生の事……………一四四

(卅七) 風穴へ貯へ置たる春蠶卵を秋分養育の事……………一四五

(卅八) 同試験表……………一四七

(卅九) 生絲製造の事……………一五四

    並に採り方圖入……………一六一

(四十) 真綿かけ方の事……………一六一

    並に仕方圖入……………一六一

(四十一) 蠶性質健不健の事……………一六一

目錄終

新撰實用養蠶獨案内

附言

石井永次郎著

第一章

一 養蠶の術に進まんと欲する者は先舊習を一洗し年々歳々氣候の順逆に隨て養育なす事專一なり蠶業を譬へば軍人の戰に望みて由斷なす時は勝利を失ふ如く蠶業にも由斷ハ大敵なり寸時の由斷と雖ども飼蚕に害の顯ると實に大いなり世に違作なすは皆由斷敵に滅され勝利を失ふは養方の術に據らざるなり誠の養方術を以て養育なす時は何程不順の氣候たりとも恐れず又温和の氣候なりとも由斷すべからず片時も粗漏なく養ふ時は由斷敵を滅ぼして勝利を得べく養方の術に據されは何程

辛苦して養育なすも水の泡と消ゆるなり

第二章

一蚕業を盛にせんと欲する一家の頭首は養方の術を定めて家内の婦女に教へて男子の手を餘り費さず耕作の餘力に務めて行ふ時は富貴百倍なるべし養方を婦女に任せ其術は頭首司どりて養方種々の差圖をなすべし

第三章

一新に蚕業を始めんと欲する者も養方の術を能く見聞して始めべきなり如何となれば養方心得ず桑を仕立さへずれば蠶業專ばら行へるものと知て桑を仕立蠶業を始め年々違作續きて大いに損毛なしたる處諸所にあり實に余が見認たる處は東京府下北豊島郡と埼玉縣との境に大川あり此川の邊りの人々其川邊へ桑を植へ蠶業を專行はんとて桑を澤山植込て蠶を養ひ

始めたる處連年違作なして大いに損毛なしたるゆゑ此地は養蠶不適當の地なりとて桑の木を切捨始め此由余の兄聞及び全國第一たる蠶業を止るハ實に残念の至りなりとて該地へ明治廿年四月行て其年蠶飼探みる處意外の良繭を得たり其年夏秋と都合三度經驗なせし處最も適當の地なり故に余の兄此地を開廣せんとて其地に住居して該翌年根葉村戸田村両村の諸人へ養方を教示し且自宅にても行なひし處内外とも上作を得たり(此年の夏秋の養蠶試験表は末へ綴込)二ヶ年とも上作得たれば桑を切捨たる者は大いに悔なり全二十一年秋又該川邊へ數万本桑苗植込たり養方の術を心得て其業に趣むかざれば適當の地にては遂は該業を止める事出來ず譬へ凶作續くとも奮勵して養方を研究すれば自然其術を覺える事なきにしもあらざ



一蠶桑の業を始んと欲する者先其業を樂にして利を好むべし  
 らば業を怠らざれば益を得べく且住居なら處の地景と蠶室の  
 善惡に隨て養育なすべし利を先にして始めより多く養ふ時は  
 利を失ふ事世上に多あり業を好んで追々多く養ふ時は利を失  
 ふ事能はず

第五章

一蠶の卵れのづから化て種紙より掃落して毛蠶の節眞黒に釜尻  
 を見る如く厚飼にして置ければ蠶後に性惡する故に薄く蠶の  
 尻頭あたらしさる様に薄く平らにして空氣流動せる室を見立能  
 き所を得べし桑のふり様むらなく心を用ひ鹿末にせば實意を  
 盡して養育すべし毛蠶の時は我が赤子を取扱ふ如く初眠まで  
 が肝心の場なり若し養法よろしからず桑のふりやうむらあり

またハ一日の中に二三度位桑を與へ置ければ蠶性惡なりて後  
 に大小不揃になる也蠶は素より正なき靈虫なれば黒蠶の時よ  
 り後に至る迄己が居るゝ席をさらず桑も我が前に來らざれば  
 喰せず故に始終心を用ひて能く平らに桑を配るべし若し桑の  
 配り様平らかならず厚飼になす時は其中には心速き蠶もあり  
 されは強きも上になり桑を喰ふ故に下なる弱きは暫く動く事  
 能はず強きも外に移るを待て桑を喰んとすればさきの蠶も喰  
 ひ盡して桑の葉しんのみ残りて喰ふところなき故弱き蠶は自  
 然病性發し是性惡なる根本なり

第六章

蠶業は養ふ人の運によりて年に吉凶ありと言ふ説をしんぶる  
 者未だ世間多かりし余情々按ずるに吉凶は卵種の善惡と養方  
 の術によるなり何國にては不作したりまた上作を得たり中に



年々凶作うちつゞく人もあり世の説に云へば皆運の悪敷人なり運にまかせ天然自然上作を得るものなれを養育の術に及ばず余年々凶作打續き困難に及者へ三四年つゞ養育の術を教へければ夫より年々歳々豊作す只一人而已にあらざ數千人を教へける所皆上作を爲是全く卵種の善惡と我が養法の術によるべく也尤も年の氣候により豊凶の違ひあれども養法功者なれば勝劣有べからざ譬は耕作の術も同じ豊年ハ運よき人も運あしき人も共に上作を得るまた凶年には一同不作なると雖共其中に手入次第にて實いりの多少差別あり然は天に少しも隔なく盡力にある事顯然たり此理をしらざる人は猥に神佛を祈り故へなき種元を恨み隣の寶をかぞへ人を妬みかこち杯する人あり神佛は其功德の大いなるに報い奉らん事を思ひて誠敬を盡し祭祀を致し其身養方疎かなれば何程良種を撰みても豊熟すべからず能く術と功者の人に尋且養蠶書よ眼をさらし工夫をこらして飼方に疎畧あくんばたとひ世間一同凶作の年なりとも相應の作を得る事明らかなり

第七章

一夫れ蠶桑の業は氣候の順逆にしたるつて養ふ事肝要なり然は養蠶中に南風をけしき事多くあり此時蠶黒散せる人世間まゝあり是は我が養方の手拔なり蠶は氣候に隨て生長なす故暑さ強き時は桑葉をたやさず與へ居尻を度々去り厚く養いければ冷しき時の倍も生長せる故少し手拔なき様注意して養ふべし南風烈き節は西南の戸を閉東北の戸を開き此時夜に入て同氣候の節ハ晝夜の差別なく養ふべし雨天の節は桑の露をよく乾し與へ此時は戸を閉火を燒蠶室を適度に加減すべし薪木ハ松桑の類宜しすべて惡敷にほいせる木焼べからず雨天打續き



俄かに晴天となる事まゝあり此時油断すべからず晴天になれば日光のはいらざる窓戸を開き空流通せしむべく此時窓をひらかざれば屋根の乾くにしたがひに湯のゆゑんの如くなるもの室内にこもり大に害あり毎日常暑時は戸障子を開風をいれべしたまへ風を入る時を蠶風に恐れ集ることあれとも暑氣節は毎日風をいれければ蠶風におそるゝ事なかれ

第八章

一 養蠶中山間の地にては朝きりのねりることあり此時戸をひらく前に火を焼き煙り室中へ満たるを見て戸を開きければけむり吹出す時はきり内に入る事なし

第九章

一 されば蠶を養はんを欲せば蠶發生十五六日前に蠶室を掃淨め人々心を正しくして蠶神を祭りて其幸ひを祈るべし且養蠶の

術ごとく終りて後にも蠶神に報ひを奉して祭るべし

第十章

一 養蠶中を別て心正しく堅固にして何に事も氣にかけず勢よく養ふべし不淨者來りしとて心配なとせる時はかへて不淨のさわりうくることあり不淨まけとて蠶赤色になる事あり又は半身赤くなり或は俄に消死することあり我が勢い盛の時はさわりなし若性悪したる時を蠶室を淨め且は極上を少し桑葉に吹きききとみ與へる事よろし

第十一章

一 蠶發生一箇月前に蠶に用る諸道具を出して悉く清潔に掃除して濕氣なきやうに乾燥し置へし又舂糠も蠶に用ゆへき丈は舂ぬかの下へむらざる篩に入能ふるひ水にて洗少し濕氣あき様にして置べし新菴を用ゆる時は寒中流川或は桶に水をくみ其

中へ二三日漬置灰をぬき引揚げて日に干ことくく能かわかし都て諸道具敷物新たなれば枯し用ゆべし

第十二章

二養蠶中凡長さ貳分斗横一分斗の黒羽虫蠶の席へ來り多く蠶を吸ひ殺す事あり甚しきに至りては此虫のため大に蠶に損失する事疎畧の養方に多くあり(此虫を羽虫とも言又黒虫とも言桑虫共言)此虫多く來る時は舊習にては蠶室の傍へ川魚海魚の鱗なとを藁の苞に入置惡虫を集めしか余此虫を段々經驗せし處此虫は都て臭き匂を好み彼の苞へ諸々よりあつまり來る此苞を蠶の傍へ置時は却て隣家より招く事あるべし此虫を苞に集め殺すより豫防する事肝要なり此虫豫防なすには先蠶の居尻度々去るときは彼の虫來る事なけれ蠶尻多く厚くして置時は臭みをもよふす是を彼の虫好み來りて桑へ害をなす室中清潔よなすときは更に惡虫來る事なけれ

此虫原因を調べる處年々凶作打續きし家へ彼虫多く生出する故何れの者が此の虫になりしかと試に不作繭より蛆じと言ふ虫生出し此虫繭より生出して一二日目に死に終りしかとぞんじければ彼のうじ未だ死せず小豆の粒の形になり翌年化して羽虫となり此虫蠶へ害をなさけると見認め彼の虫に能似たる虫木の葉のくされ或は諸々のごみの中より出ずるは蠶に害する事なけれ

(一) 桑を三種仕立べき事

先桑を仕立るには何に程良桑と雖も一種仕立べからず養蠶家名々の分量に應じて早稻と奥手と中手と此三種を三つ割にして我が養ふべき蠶の分量を考へて桑を植ゆべきなりされば蠶養いはじめに奥手のみにては葉少なき故大いに損ありまた蠶四度の眠



起の桑附には最初兎手を與へ次に中手を與へ壯蠶に至りければ弱き桑にては蠶の腹に滿ずよつて壯蠶には早稻を與ふへし此三種は要用の桑にて極良桑を撰み仕立べきなり

(二) 樵時附方并に養育の事

夫れ桑樹は養蠶の本よして良桑を仕立る事肝要なり桑の木は葉大きくして圓き能茂り葉のれもてに光澤あり木の色白く生立よき桑最上なり先上桑を仕立る法はよき桑を見定め夏至(五月)の頃桑黒くよく熟したるを撰み種よ採るべし桑は木の本なりより末へなりを種にとりて桑の實の兩端を少しづつ切捨て正中を桶にいれ水にて能洗にむり水を捨て底に沈み去を種にとり灰にかきませ細き砂をも交合して土地乾きよき上畑に土を穿麥時如くに薄く蒔直に土を少しふりかけ糞をあたし土を軽くおし附置とさく肥培をいたせば芽の生長をやし

但し實壹升に馬の踏わら灰二升に砂二升此の三種を交合して蒔附るなり

樵時付てより三十日斗りにして最初生出しを皆引捨跡に後れて生出しをほとよく殘し置是に度々肥培を入れべし土の乾かざる様にして草を除くべし此年十月頃には凡三尺斗りに成長すへし根廻りに糊糠を覆て温に養ふべし一段遅く生立て根の色白なるが上桑なりこの良桑を翌年春彼岸の頃根を切はなし植換る時極良桑を接ぎ植置ときは生長はやし良桑をふやす事極はやき仕方なり桑ハ鹿桑三本植るより良桑二本植て三本へ與へべき肥を二本木に用ゆる時は繁茂夥し地せまにして徳用なり

但し惡桑をさきり捨良桑を接事養蠶家にては實に肝要なりふるきだいに接時は精氣能き方へ接べし接穂にも裏表あるべし東よ向し枝は東に向て接ぎ西に向ふ西に向け是まて有し形に

接べし何れの國々にも上手多數有べければ其人に隨て學ぶべし

(三) 桑の木へ病付たるを治す事

桑の若き時は葉に青く小き虫つき桑の新葉まく事あり是を念入  
悉く取去るべし捨置ば桑に痛みつくものなり春に至り葉茂たる  
時葉に赤色なる病つく事あり此桑蠶に用べからず尤も此病は肥  
培の不足より出来る様に考へられ又桑しらみと言ふ白き虫多く  
つく事あり是を其まゝ捨置時は桑枯る事あり雨天の節能かきと  
るべしまた春葉のひらめざる前桑楚へに尺とり虫とか又びや  
う虫とか言ふ此虫多くつき桑の芽を喰ひ盡し葉ひらかざる事あ  
り念入とり捨てべし高木なれば細き棒へもちをからみさしとる  
べし都て桑へ病つく土地には桑の根へ煤の類或は蕎麥壳等灰け  
あるものを用ゆべし春八十八夜前後蠶の生出せる頃氣候不順之

節大霜降り桑の薄芽大いよ損じ葉開かざる事間々有其時日陰の  
所は自然と霜解桑の精氣もとへ渡りし時分朝日をうける故桑の  
芽強く痛まず亦朝早く日請の土地は未だ精氣の渡らざるうち昇  
日とうくる故俄に照付若芽ゆだるが如く痛むなり其時朝早く起  
き桑に嚴く水をうちかればいたみすくなしまた桑の根を深く  
掘て人糞を直にいれることよゆし然る時は痛みし桑四五日目に  
新芽を出し此年の蠶に用立べし

(四) 良桑葉の眞形三十七種の寫生并に桑の名義數種の事

夫れ桑の名義數百種あることを諸人の能く知所なれど種類によ  
りて大いに得失ある故良桑の内三十七種は眞葉の有形を小圖に  
寫し餘は名義と桑名の履歴且善惡を記載す

一鶴

田(是は六郎ともいふ又高助とも言中手桑にて最も極上等の良桑なり



一十 文 字 是は八日市ともいふ霜不知或は霜くより蓮花など、數名あり楚少しく淡黄の色

一鼠 返 し 是は四ツ目ともいふ木の色と青白赤の三種あり實に葉多く生ずる故鼠も登る事能とざる程に繁茂せる故に鼠返しと唱ふ與手良桑なり

一伊達 赤 木 是は伊達郡より産する故伊達赤木又唯赤木ともいふ楚赤木故に赤木桑と名付唱ふなり

一奥州コホレ桑 是は良桑なれども春芽さす頃風吹てもこほれ又少しさわりてもこほれる故こはれ桑と名付唱ふこほれにも數品あり

一枝 タレ 桑 是は繁茂せるにしたがい楚柳の如くしたれる故唱ふ

一吉 野 桑 是は津久井郡吉野驛より産する故地名を唱ふ此桑は中手にて極めて良種なり

一黒 牛 芳 是は楚黒くして牛芳の形に等し此桑と大早稻にて良種あり是を開發地へ植る時は至て成長とやし

一白 牛 芳 是も楚白くして牛芳の形に似たる故名付此桑早稻にして良種なり此桑都て新地へ植る時と繁茂早し

一小倉 早 稻 是と津久井郡小倉村といふ處より産する故村名を唱ふ此桑尤も大早稻にして極めて良桑なり

一空 早 桑 是と木村桑三子さし早桑よりしと新宿早桑等數名あり尤も良桑の種類なり

一島 の 内 是は中手桑にて良種といふべきあり

一小 幡 是は伊達郡に小幡村と云ふ處より産す與手桑にて伊達郡信夫郡安積郡の製種家は殊に賞美せしよしなり

一椿 葉 是は椿の葉のごとく青光ある桑故に其名を呼べり

わんくく  
根川桑  
植込  
る 圖

畝間六尺  
株距離三  
尺



第壹圖



第貳圖

植<sup>タテ</sup>年<sup>ノ</sup>立<sup>タ</sup>る<sup>ニ</sup>楚<sup>ノ</sup>新<sup>ニ</sup>たる<sup>ニ</sup>圖<sup>ヲ</sup>



第三圖

二年目の  
春の彼岸  
の中楚切  
の櫓たる  
圖



二年目の  
楚立  
のたる  
圖





第四圖

三年目  
の春楚  
切採り  
たる圖

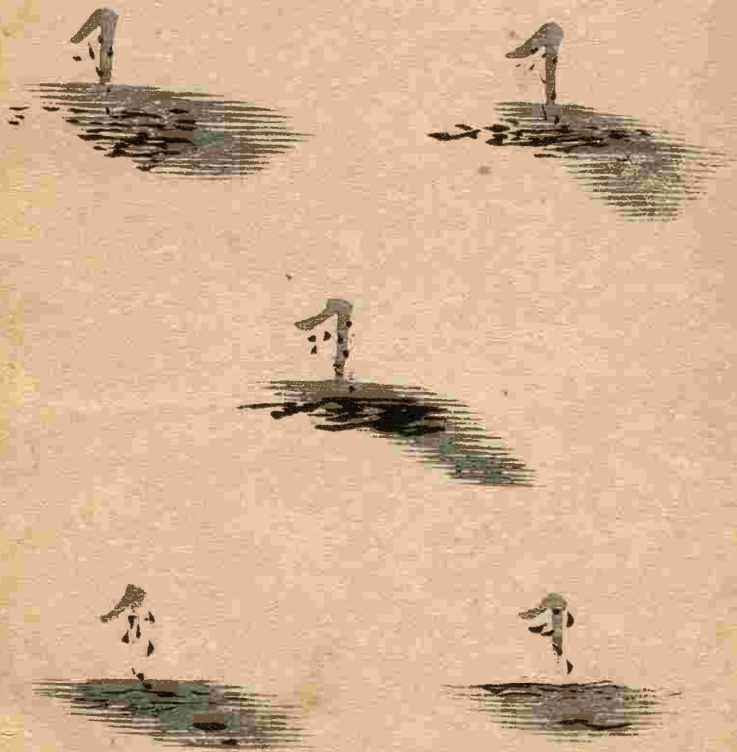


三年目  
楚立ち  
る圖



第五圖

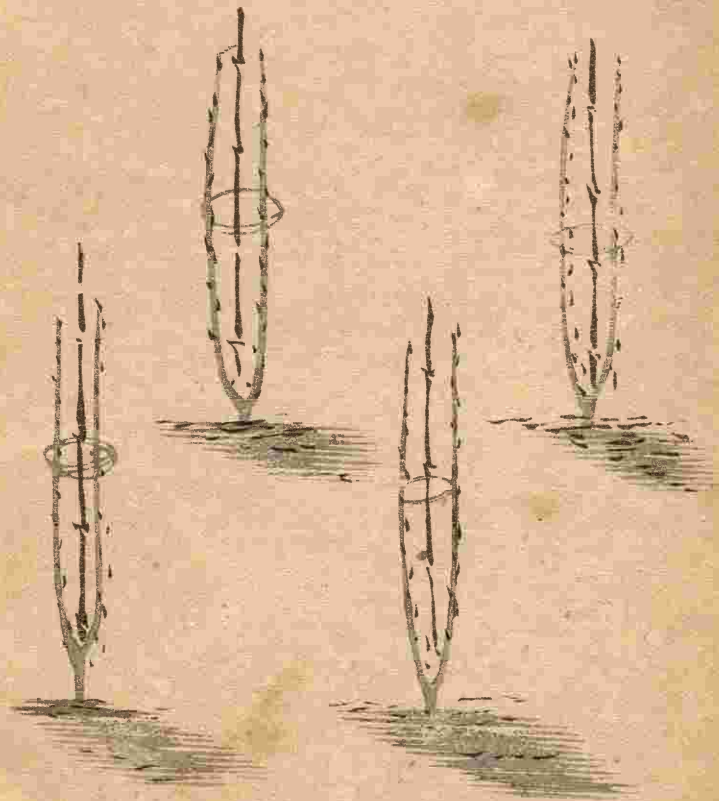
高木桑植  
込たる圖  
畝間六尺  
株間六尺  
五の目小  
ふるやう  
植るあり





第六圖

植込たる  
年の新  
立たる  
圖

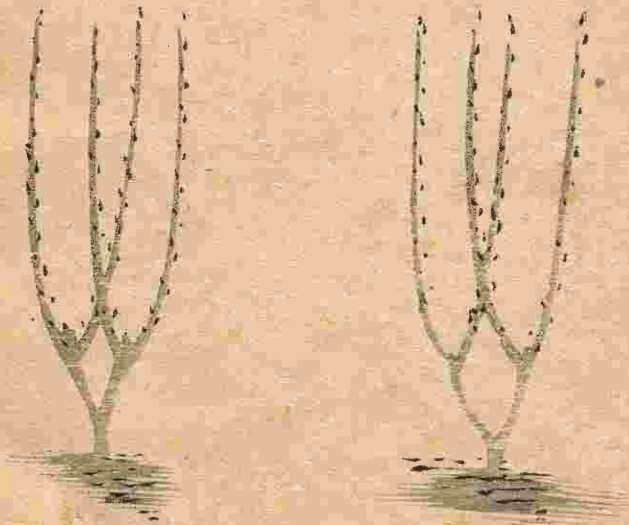


第七圖

二年目の  
春彼岸中  
小楚切り  
捨たる圖



二年目  
の楚立  
たる圖

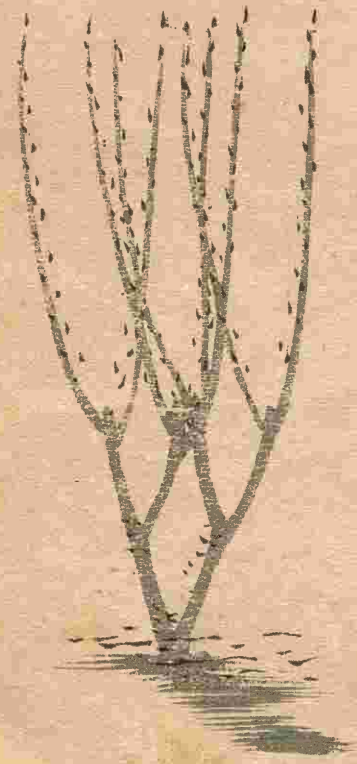




三年目の  
春彼岸中  
楚切捨た  
る圖



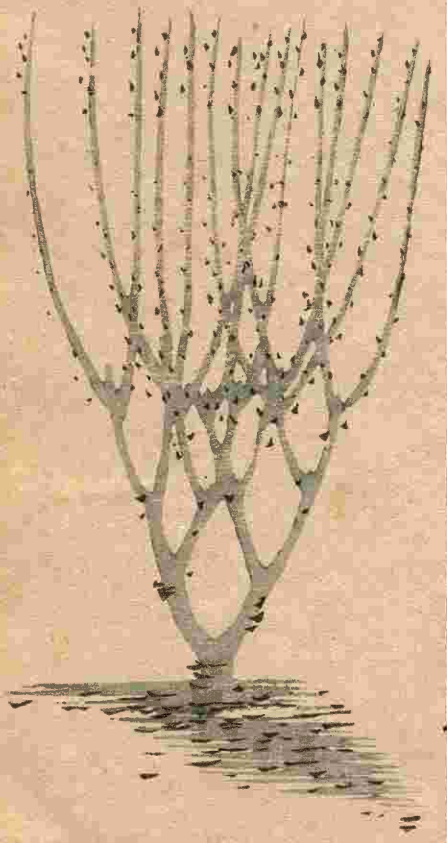
三年目  
の楚立  
たる圖



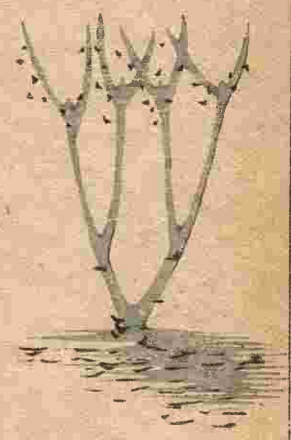
第八圖

第九圖

四年目  
の楚立  
たる岡



四年目  
の春楚  
切採  
たる岡





植込て二年目  
の新芽立た  
る図

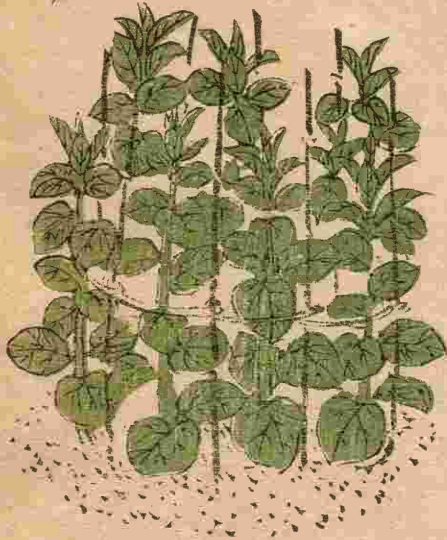
第一



第十圖

生長

おした  
る図 第三



交  
苗を  
おさる  
圖

第二



第拾壹圖

採  
苗  
掘  
り  
圖

第  
四

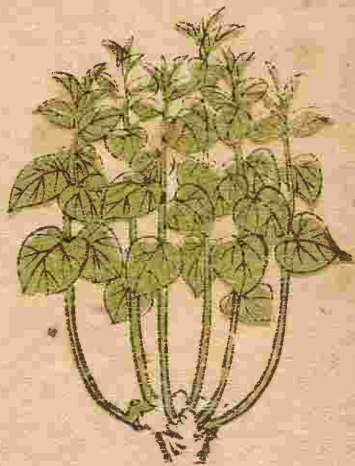
第  
五





第拾貳圖

第一



第二  
苗  
大石圖



第二



第拾三圖

苗掘り採  
りおきた  
る圖



第三

第四



かた苗圖

此かた苗不<sub>レ</sub>あまにハ  
壹木植<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>よろ<sub>レ</sub>かり  
ぞる細<sub>レ</sub>き苗を圖<sub>レ</sub>の如  
く春岸の頃かた苗置  
肥を度々用<sub>レ</sub>ゆま<sub>レ</sub>其  
年九月下旬頃迄にハ  
筈四五尺にものびる  
あり。一年かた苗置<sub>ハ</sub>  
一年苗の上等よりハ  
植込て生長早<sub>レ</sub>故  
に細<sub>レ</sub>苗にても大<sub>レ</sub>根  
かた<sub>レ</sub>かくべきもの

第拾四圖



志らく苗ふせ方圖

此若く苗  
ふせ方ハ根  
か出さん  
思ふ処へ鋸  
に切  
疵をつけ  
せるあり  
疵つけると  
処より根を  
生也

第拾五圖





志もく苗掘採るる圖

第六拾第圖



桑子接木圖

第七拾圖





桑の樹の根より

桑の樹の根より  
一尺五六寸雜  
根をお込の根  
根を掘へる



第拾九圖

抗志引拔  
九石穴八  
肥培  
石圖





第一圖 國富  
世界一

桑葉子尺  
整一尺二寸九分  
横一尺三寸六分



豊後桑

ぶんごのさく

縦壹尺三寸

横壹尺七寸

第二圖





第三圖



國富

堅壹尺三寸  
橫壹尺六寸

石  
桑

堅  
九寸  
八分

第  
四  
圖





第五圖



大天約葉  
伊太利  
豎壹尺  
橫壹尺

第六圖



富貴葉  
堅壹尺  
橫九寸五分



第七圖

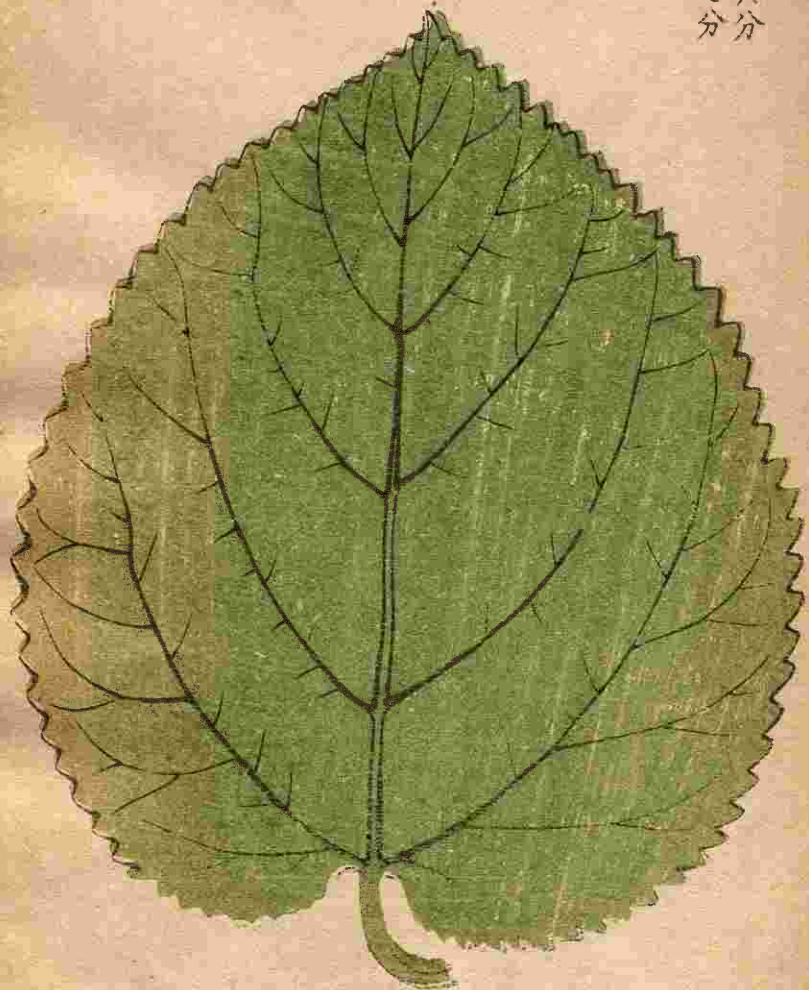


金徹きんてつ  
一  
横よこ八寸  
竖たて壹尺寸

大巴蕉

豎 壹尺六分  
橫 八寸七分

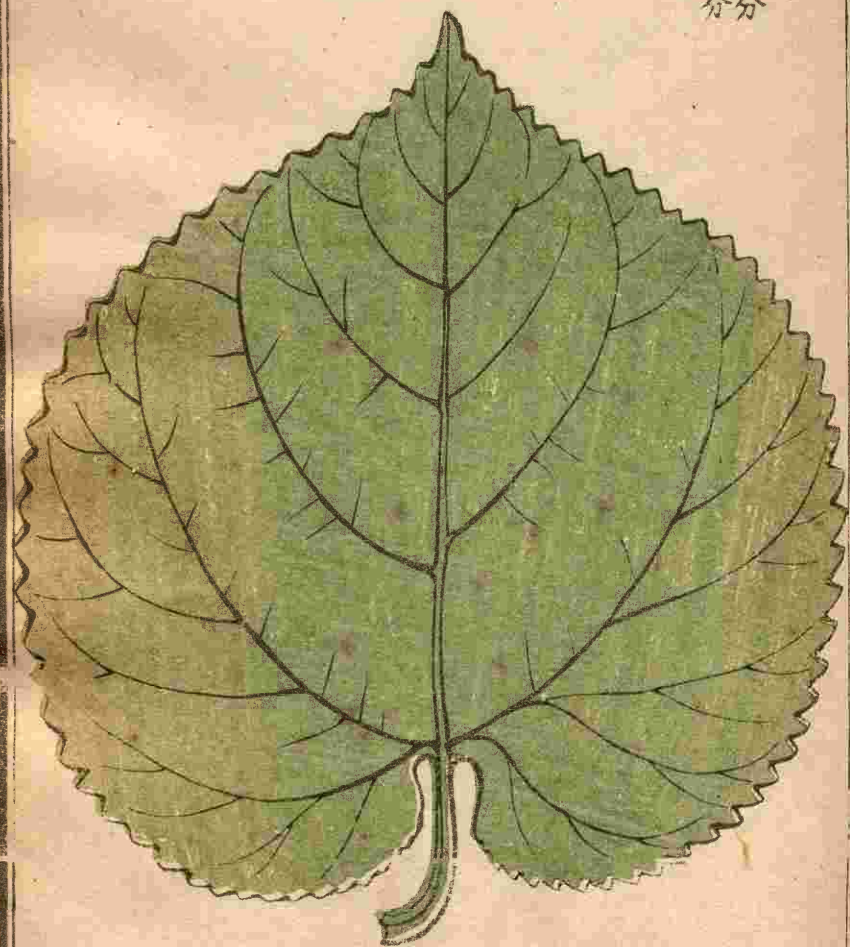
第八圖





第九圖

德烟  
橫 九寸六分  
豎 九寸二分



川尻

堅九寸六分  
橫八寸五分

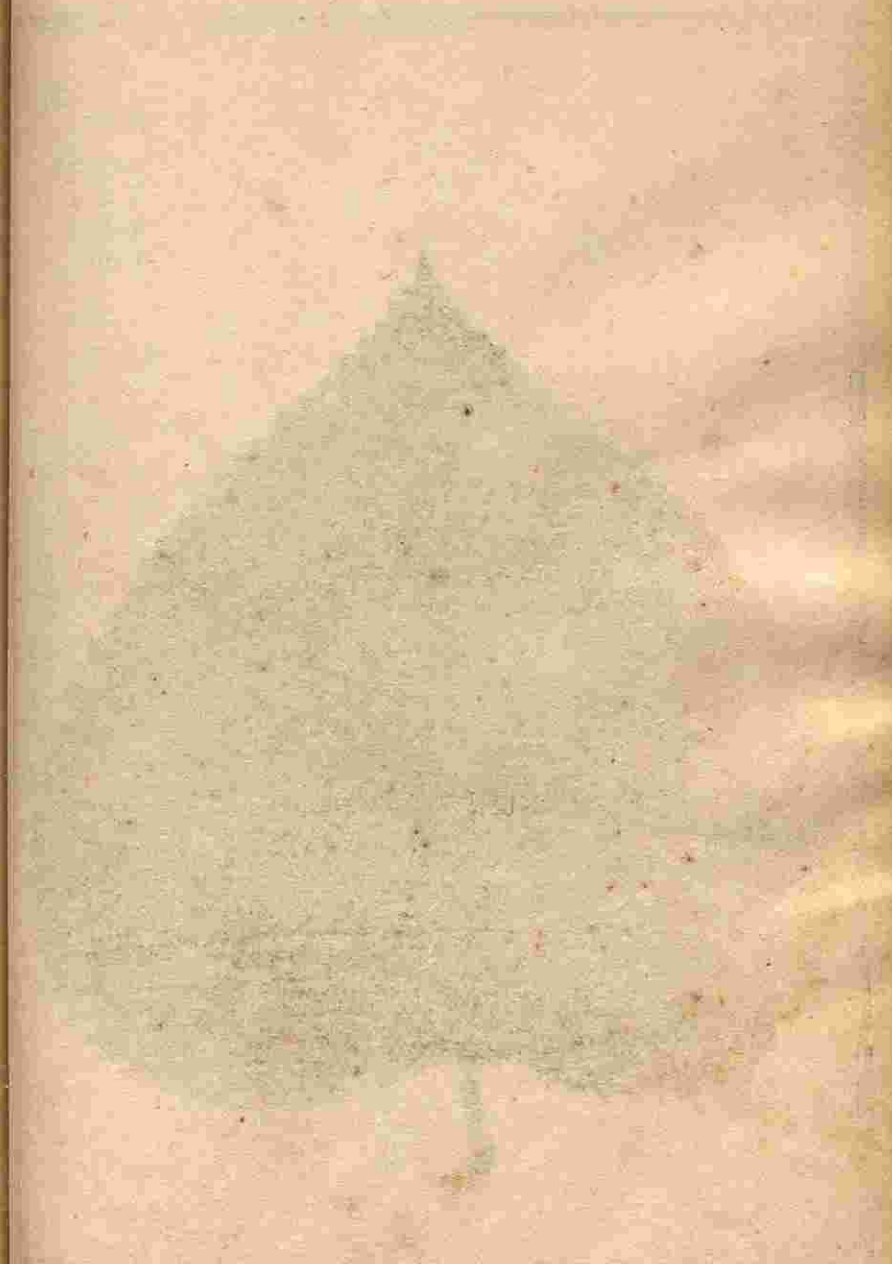
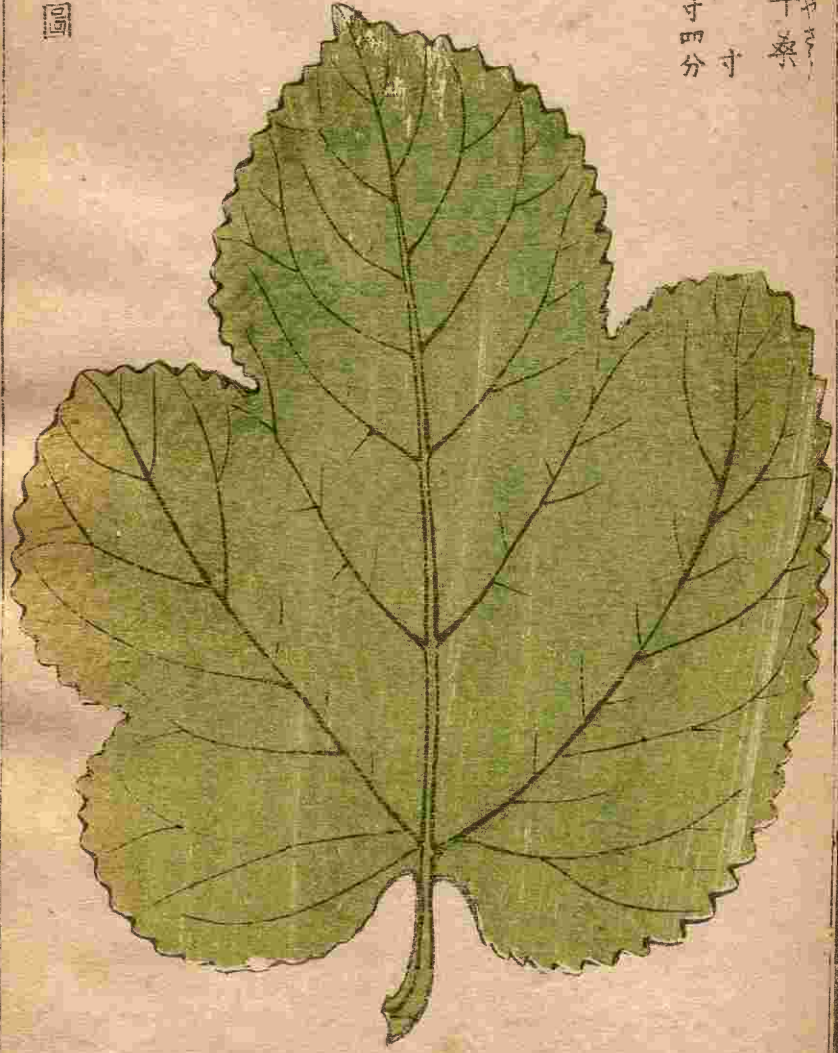
第拾圖





多湖早桑  
堅九寸  
橫八寸四分

第拾壹圖



第拾貳圖

九葉伊利亞  
横七寸  
豎八寸





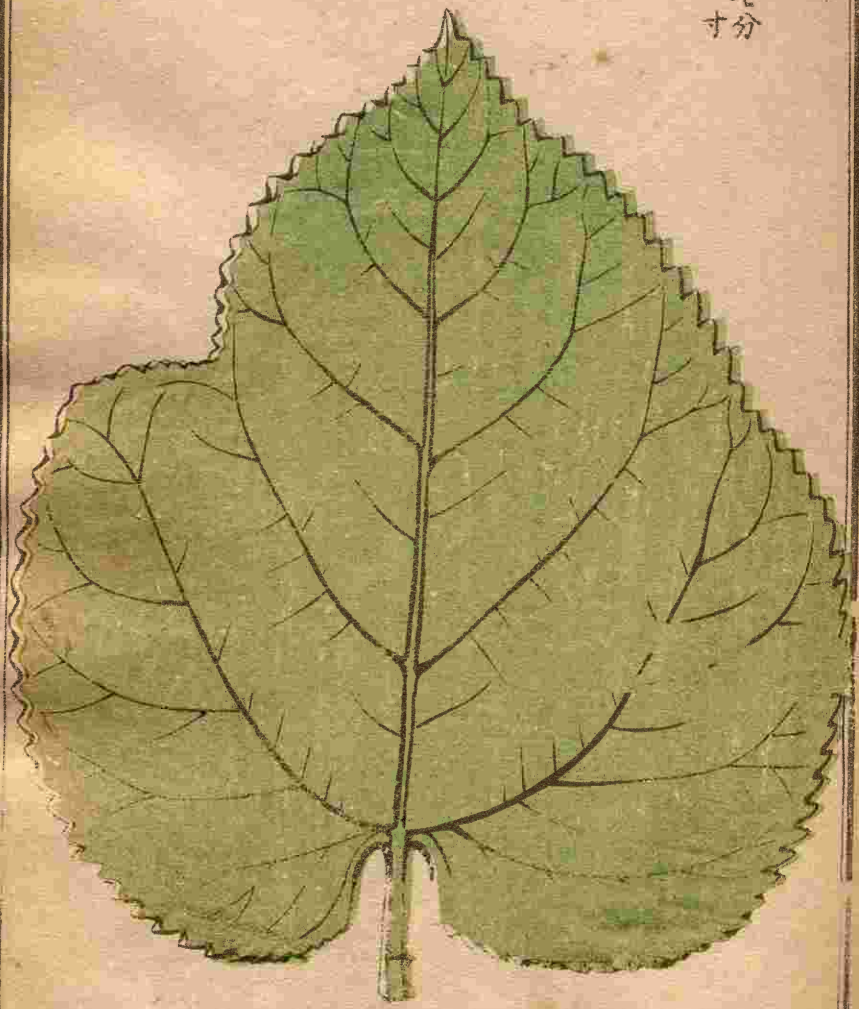
丸葉魯桑  
豎八寸六分  
橫七寸九分

第拾三圖



第拾四圖

大桑  
豎八寸七分  
橫七寸





大菊葉

堅九寸八分  
橫八寸六分

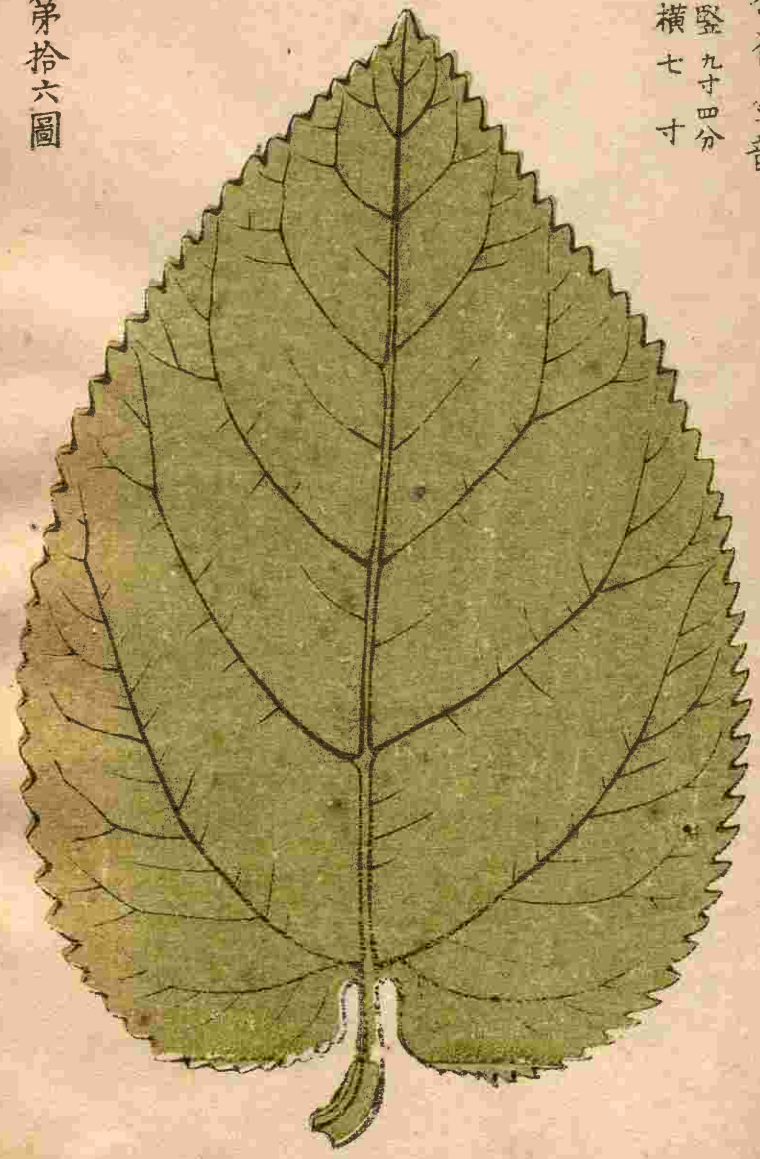


第拾五圖

孔雀金龍

豎九寸四分  
横七寸

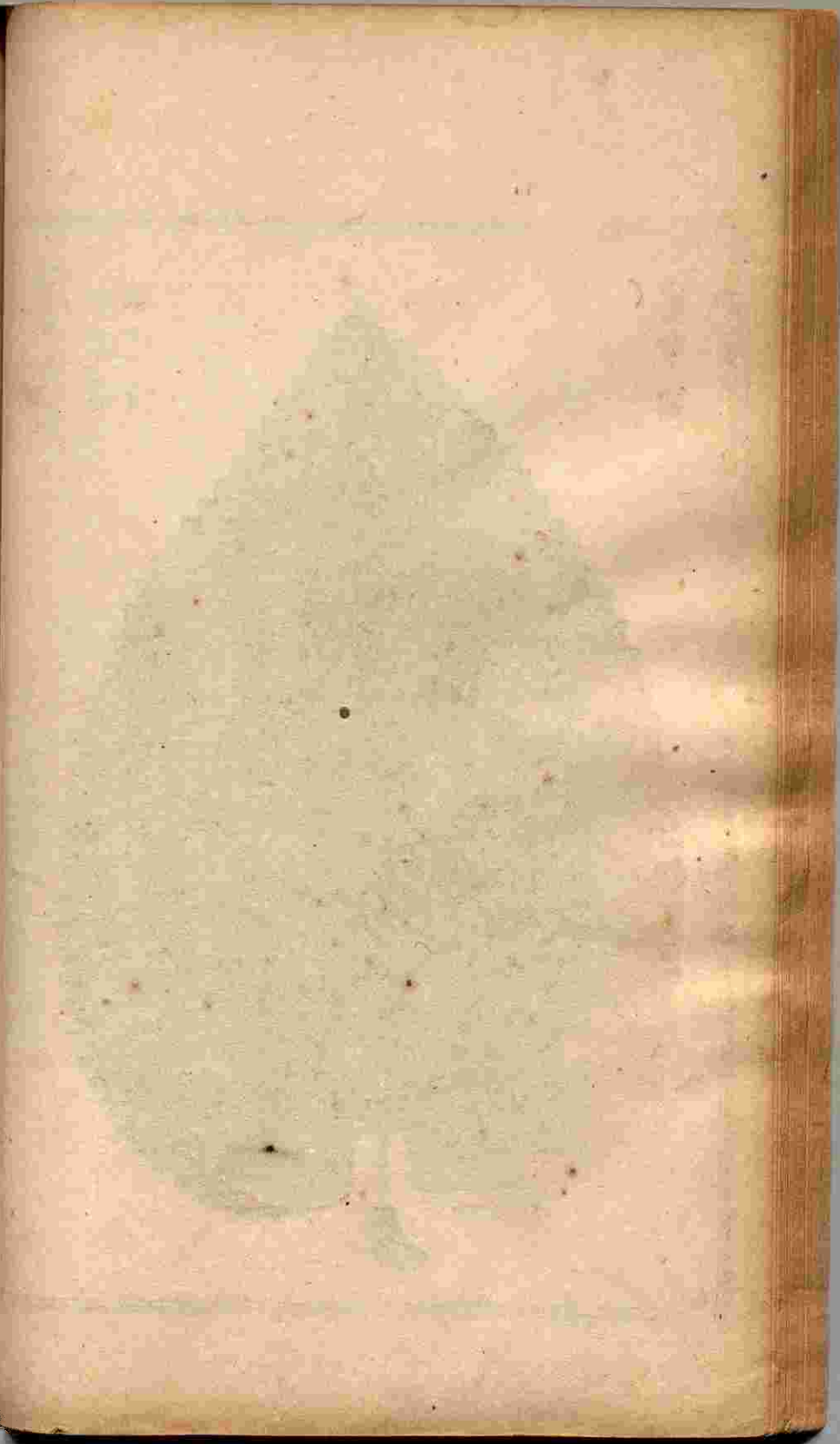
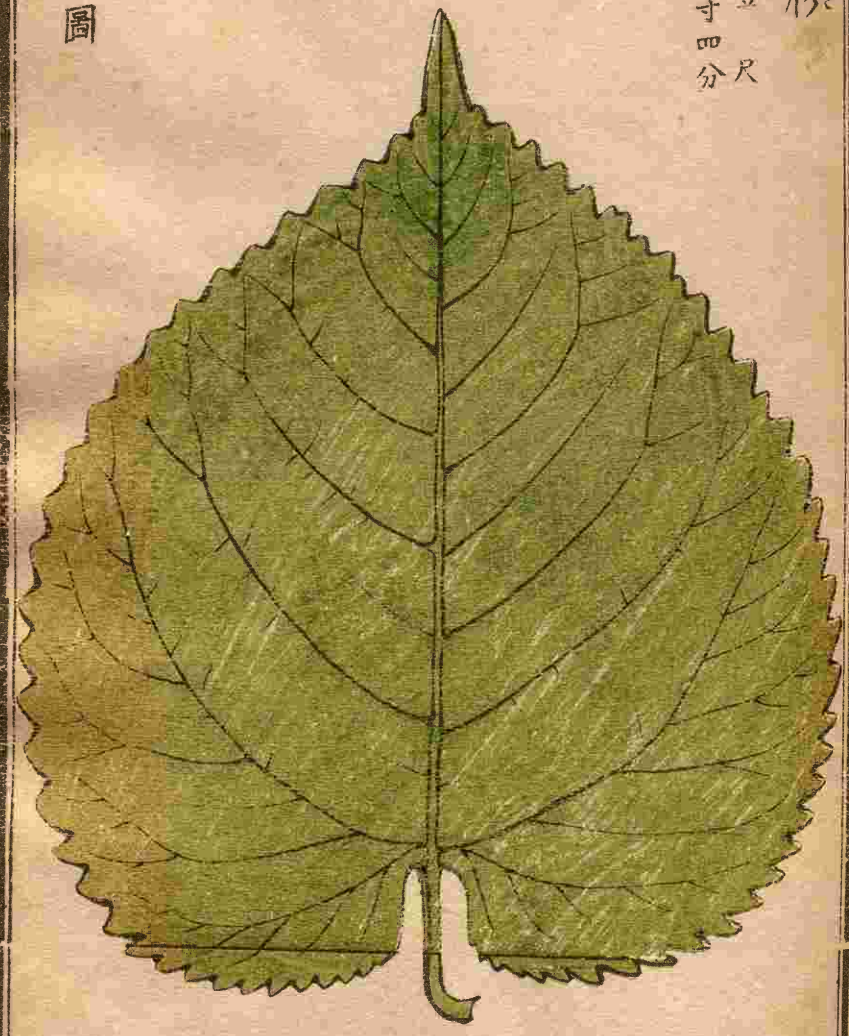
第拾六圖





第拾七圖

紫  
形  
橫 壹 尺  
豎 八 寸 四 分



大廣葉

あはひろは  
縦九寸七分  
横七寸三分

第拾八圖

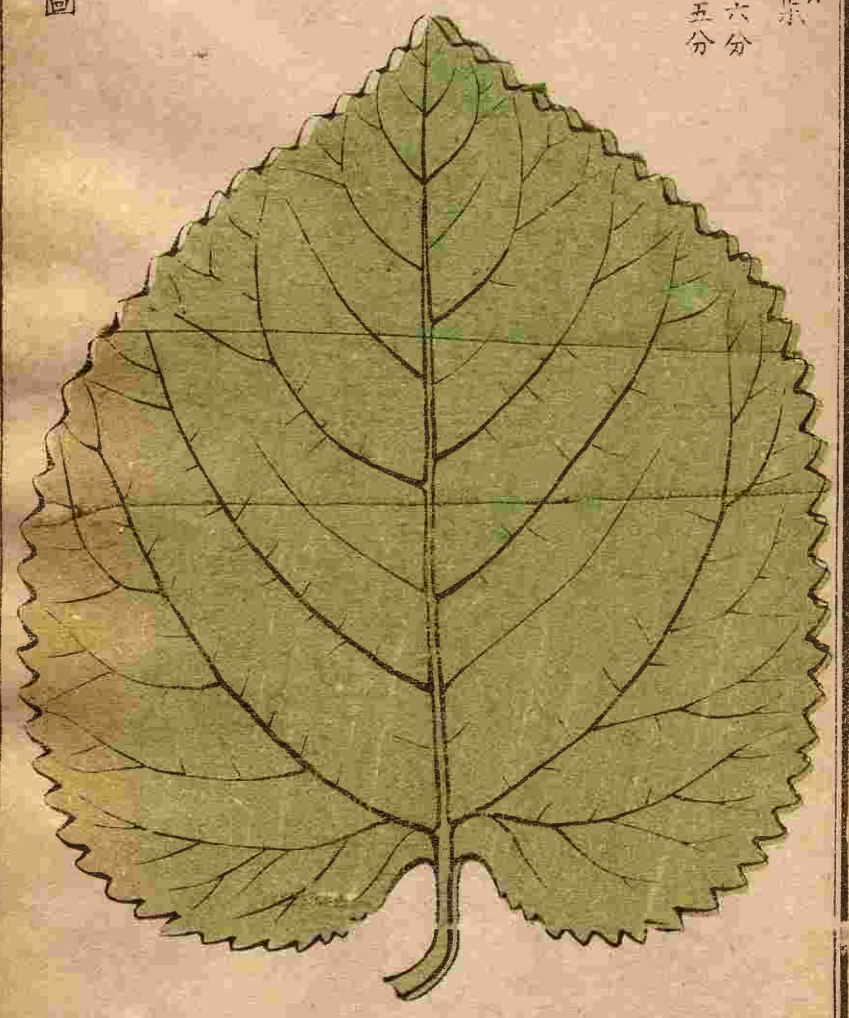




志保葉

堅八寸六分  
橫七寸五分

第拾九圖



大明丸

豎九寸三分  
橫七寸八分

第一拾圖

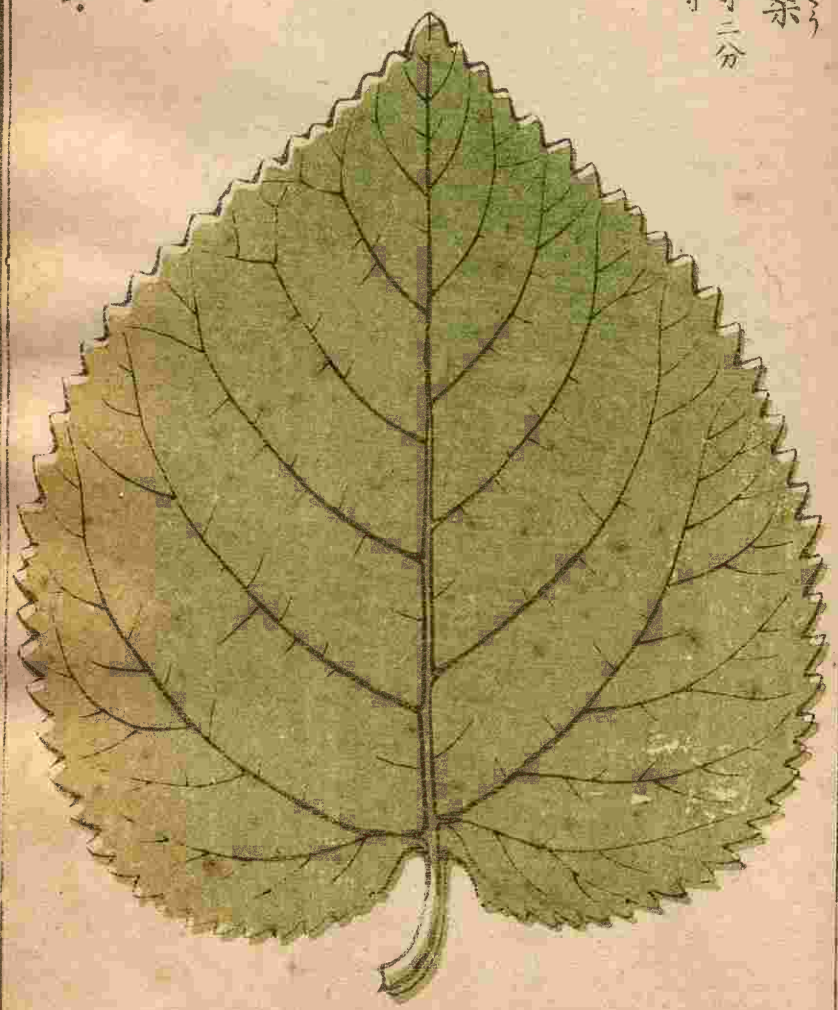




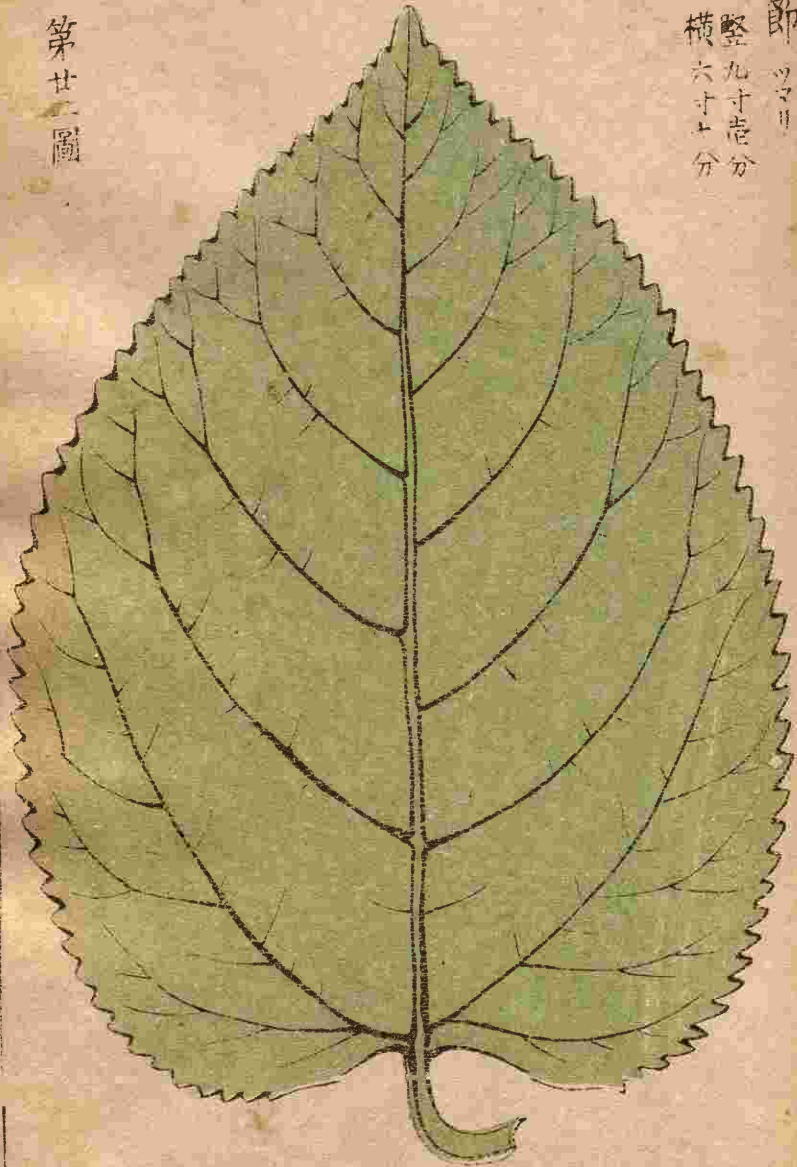
蓮光桑

豎九寸二分  
橫八寸

第廿壹圖



第廿二圖



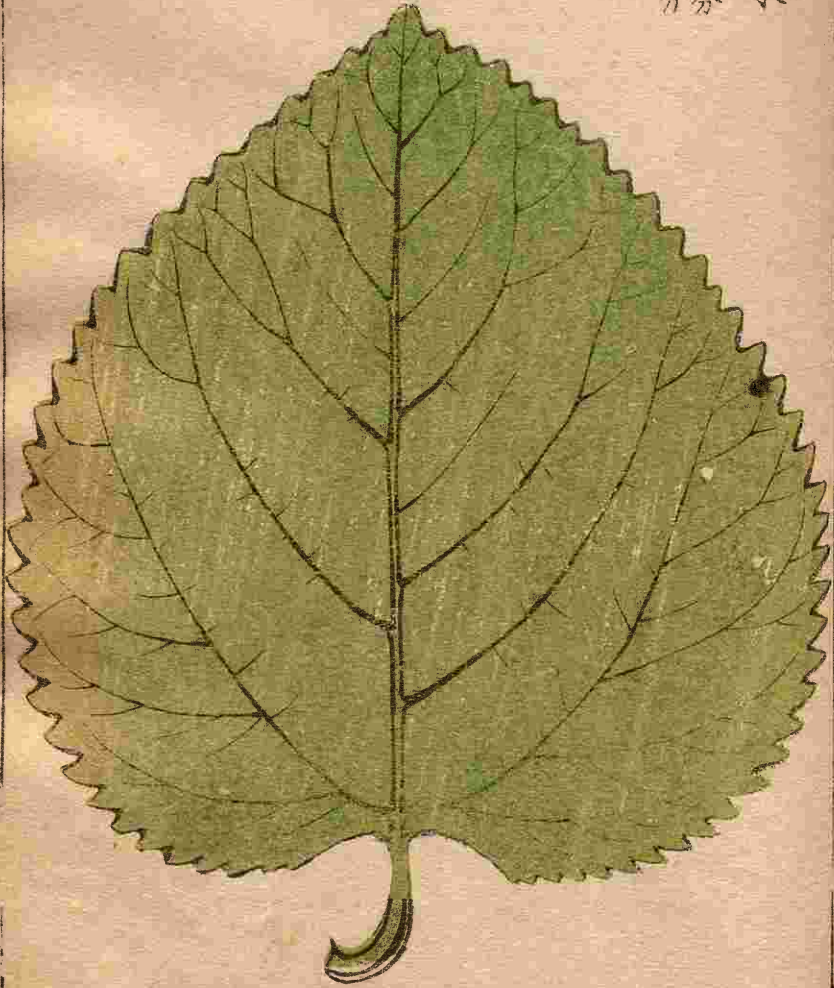
節ツマリ  
堅九寸七分  
横六寸七分



伊達赤木

縦 八寸六分  
横 八寸七分

第廿三圖



三角桑葉

豎七寸二分  
橫六寸

第廿四圖

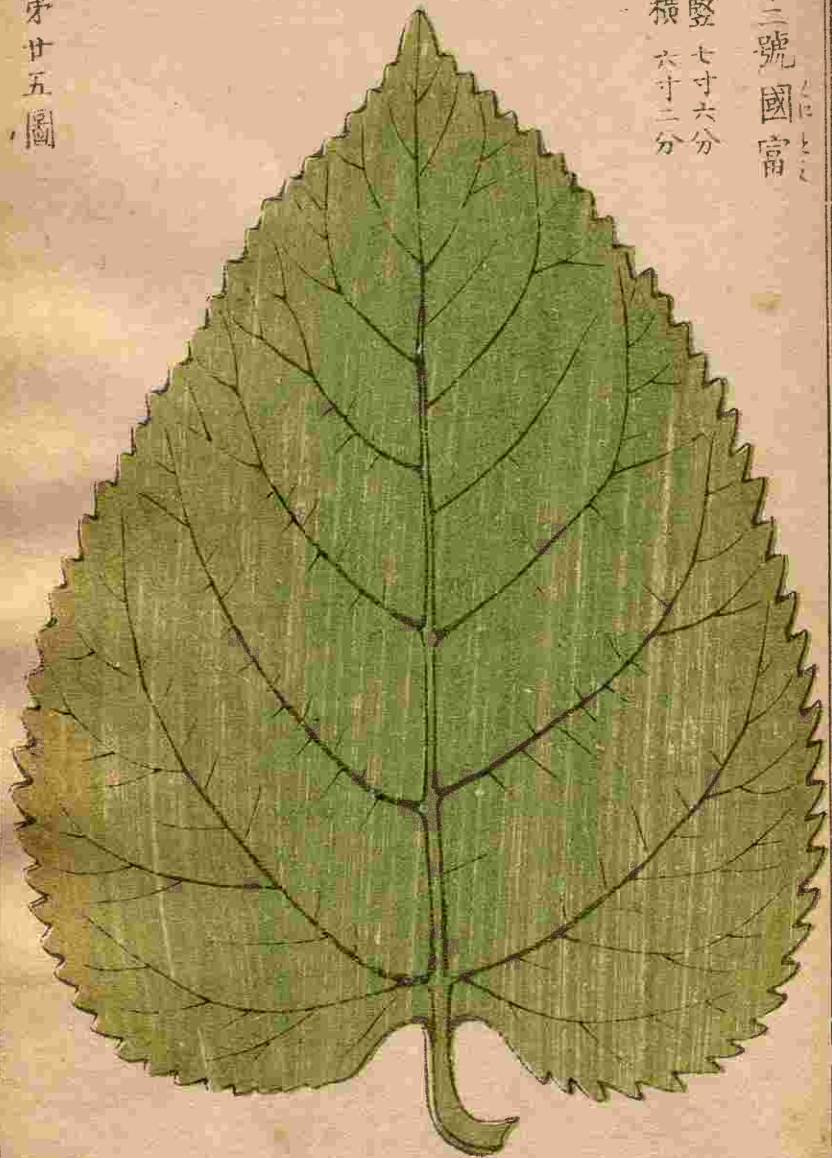




第三號國富

豎 七寸六分  
橫 六寸二分

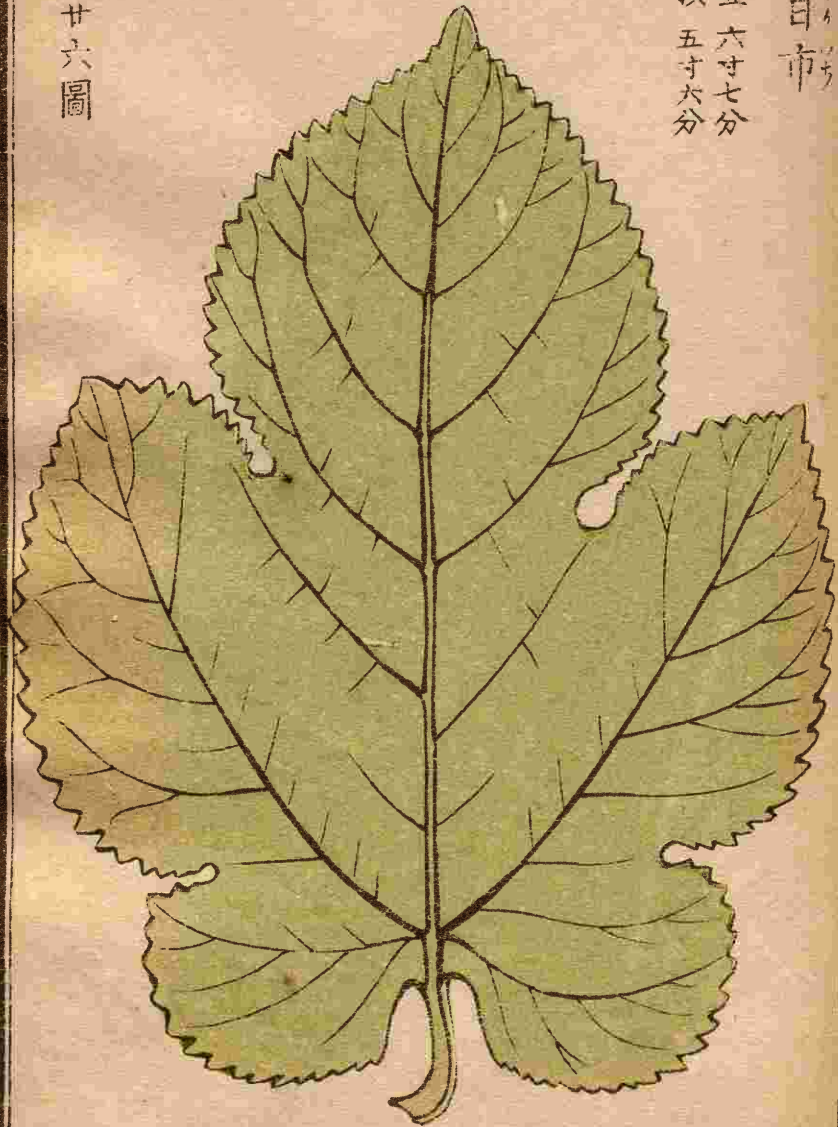
第廿五圖



八日市

豎六寸七分  
橫五寸六分

第廿六圖

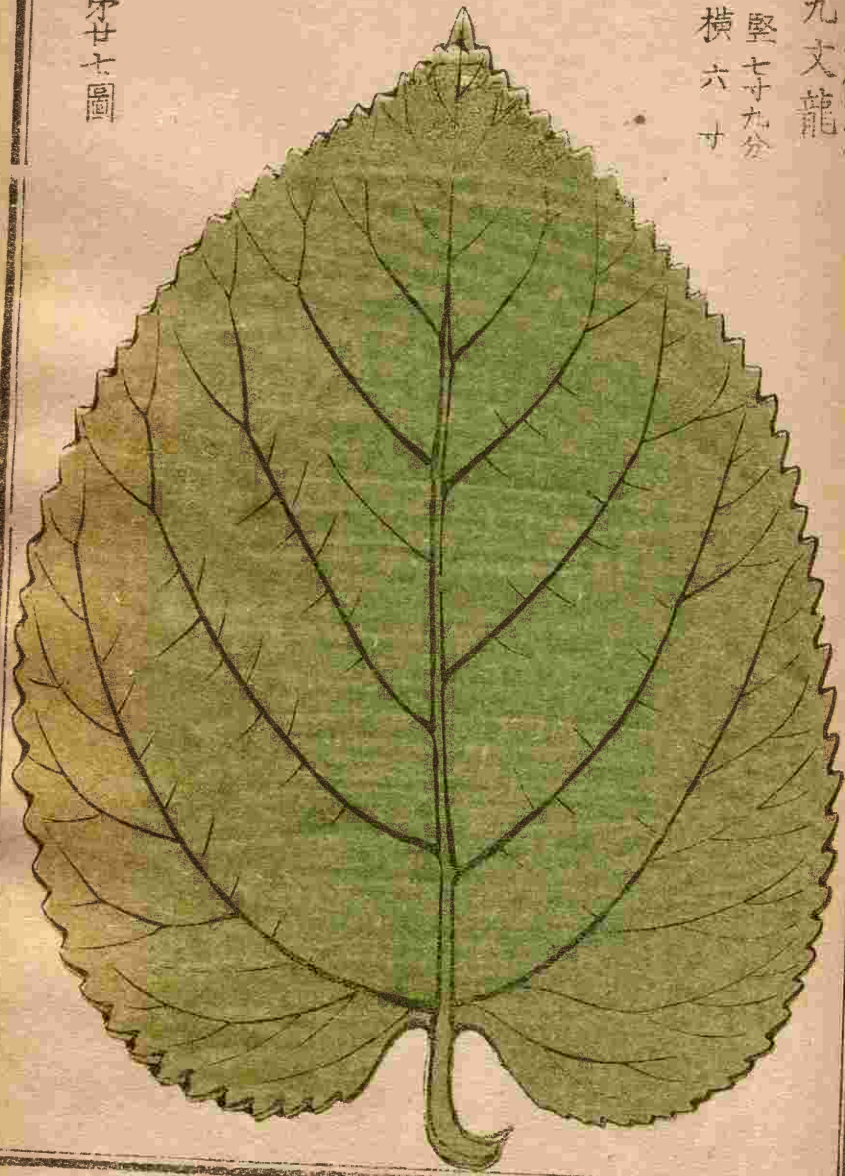




九文龍

堅七寸九分  
橫六寸

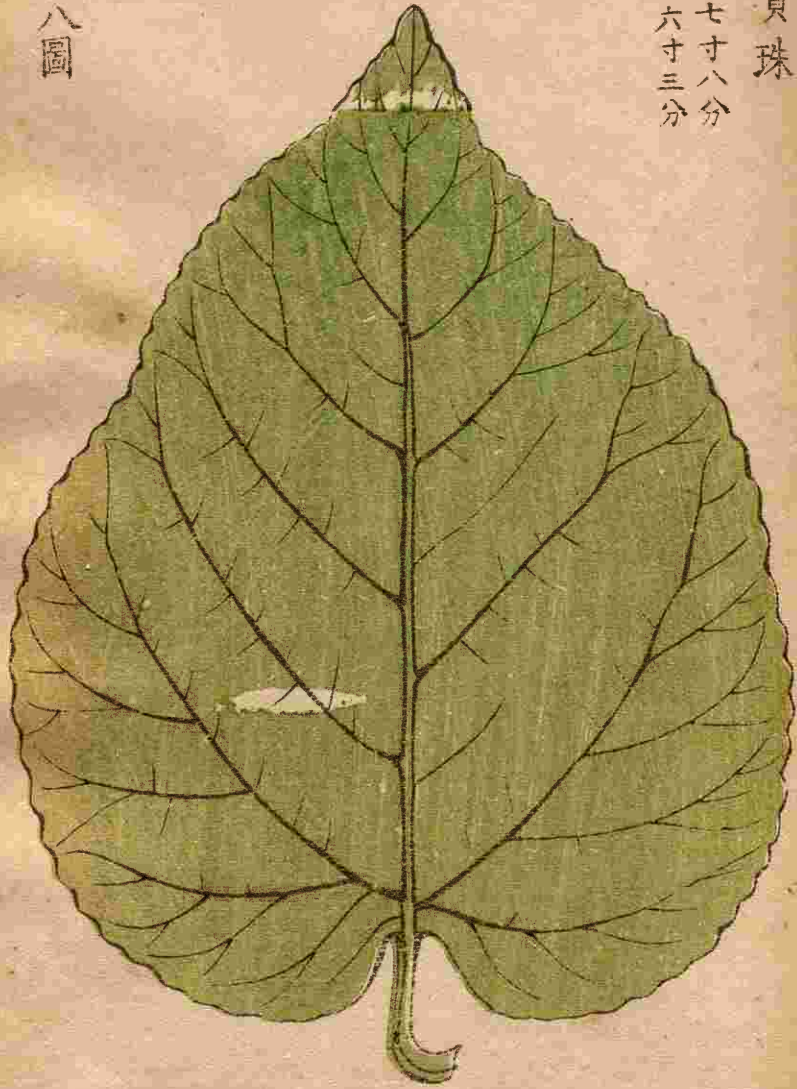
第七圖



大寶珠

豎七寸八分  
橫六寸三分

第廿八圖





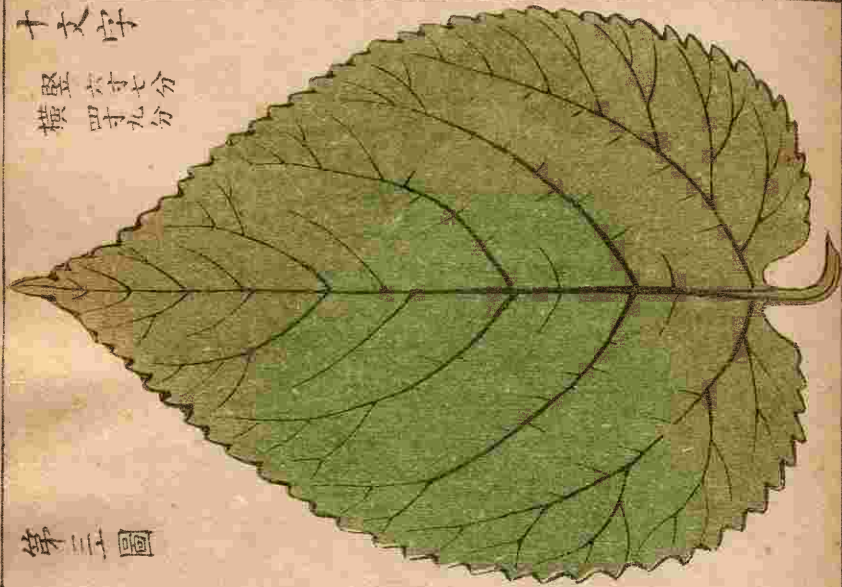
第廿九圖



小幡 おぼろ  
豎 七寸五分  
横 六寸二分

十文字

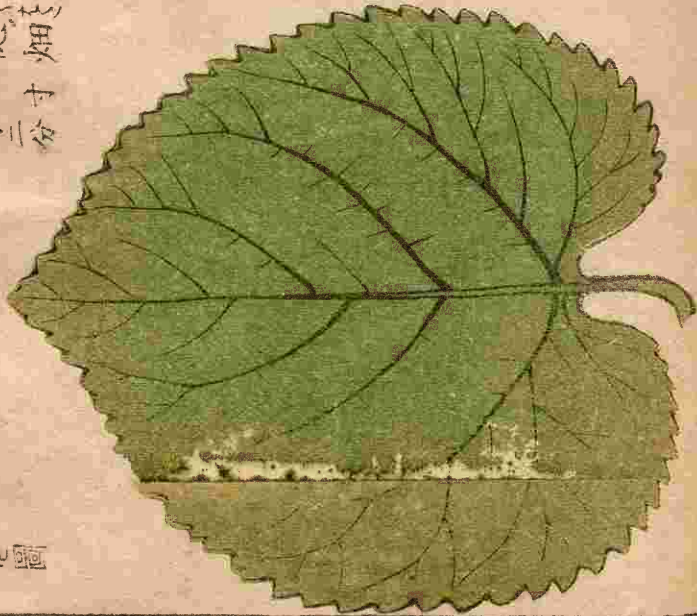
堅六寸七分  
橫四寸九分



第三圖

上州德烟

堅七寸  
橫七寸二分

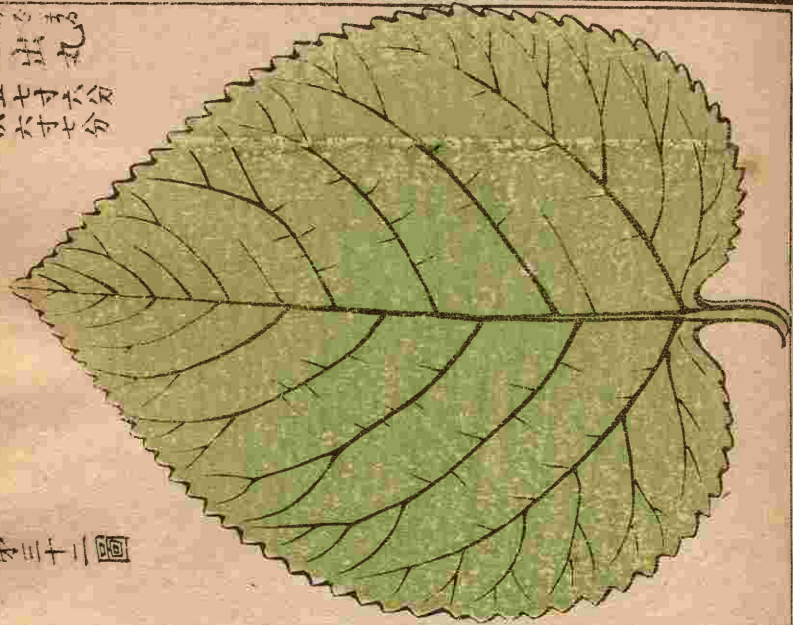


第三十圖



ひのきま  
白出丸

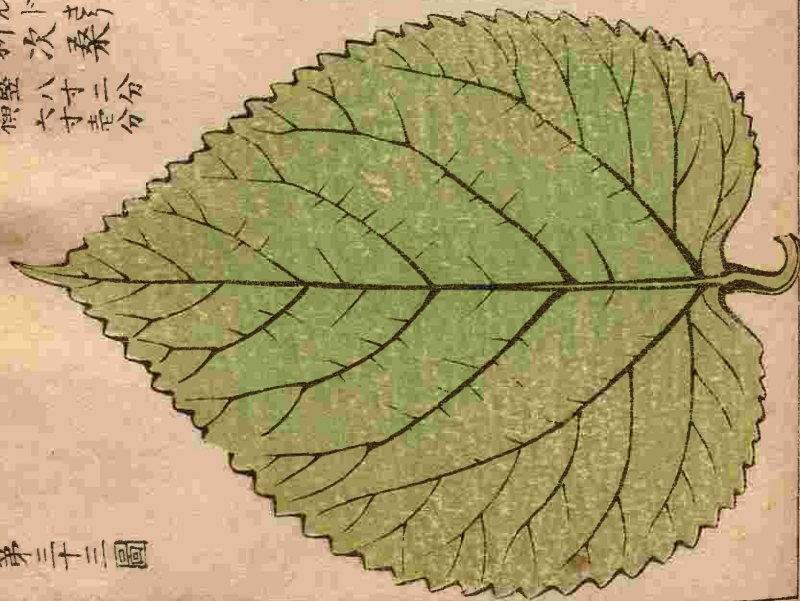
横 七寸六分  
縦 六寸七分



第三十二圖

しんじょう  
新次桑

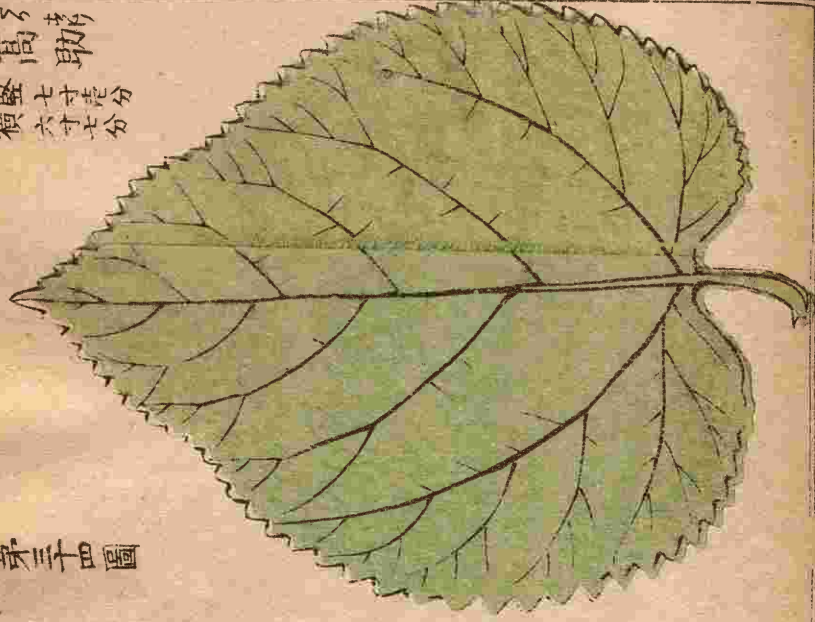
横 八寸二分  
縦 六寸七分



第三十三圖

高助

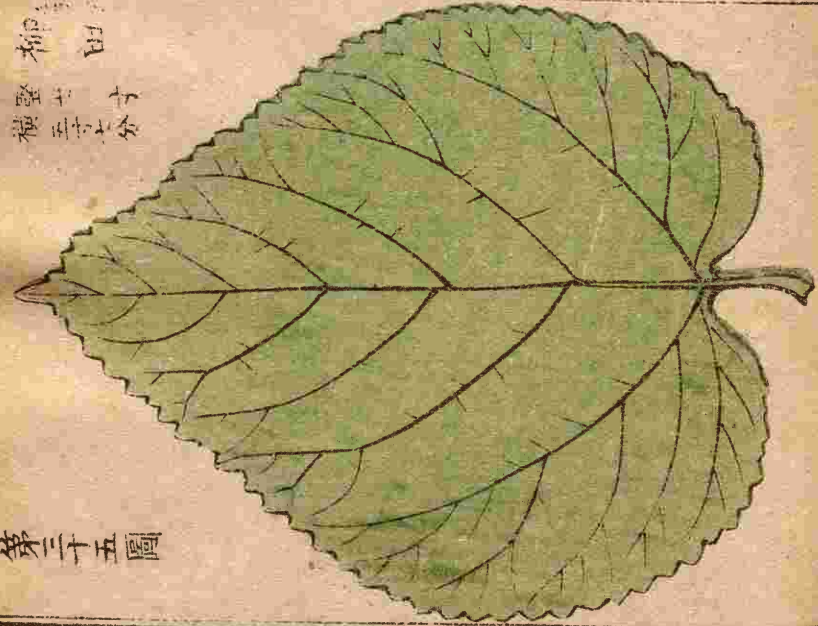
豎七寸七分  
橫六寸七分



第三十四圖

柳田

豎六寸  
橫五寸七分



第三十五圖



了  
振袖

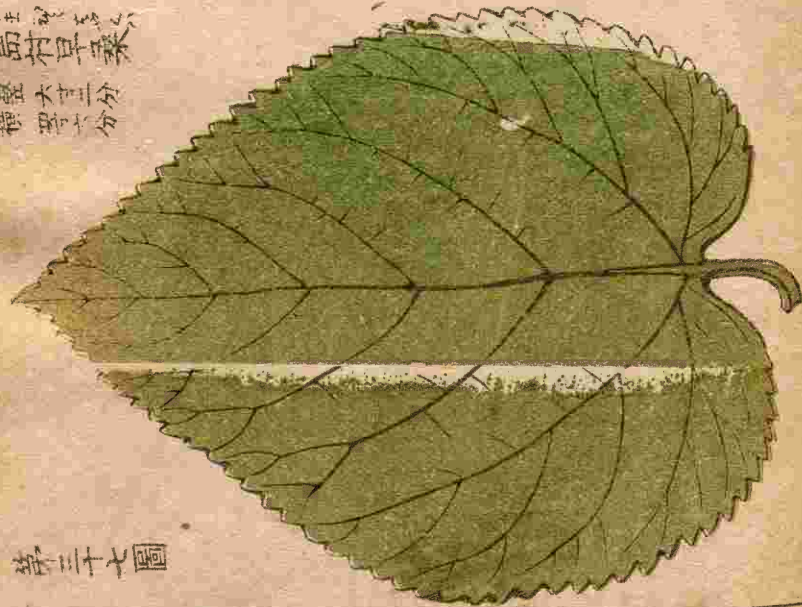
豎六寸四分  
横五寸六分



第三十六圖

了  
島村早桑

豎六寸三分  
横四寸二分



第三十七圖

葉（是は小牧派和雨振種片振種元、城下、代下、上田、しのぶ此桑良桑なれども楚の末へ放り元あかるさなり）

一犬 子（是は唐桑人參桑金子三名あり良種の種類なり）

一市 兵衛（是は早稻桑の極めて良品にして昔市兵衛と云人植始めし故其人の名議を桑へ名付唱ふるものなり奥州市兵衛元祖なり）

一柳 田（是は伊達郡に柳田村あり其落より産する故柳田桑といふ）

一多湖 早桑（是は黄金、群馬早桑、黒熊早桑、白石早桑明治數名あり新地は植て繁茂する良桑なり）

一川 尻（是は大きくして葉あつし葉面に光澤あり極めて良桑なる故諸多く好み植ゆなり）

右の如く各處（おのづか）に於て最初（さいしょ）發明（はつめい）せし人の名を桑に唱へ且地名其木の景形を以て名に唱へる故名を以て證とする事能はゞ餘は名義而已書載せるなり

◎從來の部

- 里 桑 黒こぼれ 吟 呂 島 の 内
- 無双早桑 銀 鬮 佐位 一 四方 丸
- 奥州白木 大 萬 代 肥土早桑 筋 桑



蒲原早桑	神座小あじろ	五明桑	二明桑	青木大葉	八寸桑	山中高助	川口早桑	屋いんだ	玉川早桑	大葉	多胡赤木	理兵衛桑
加納桑	若みとり	加ゆづり桑	島赤木	大和魯桑	彦次郎	近	芽	黒庄土	小	六益桑	眞物早桑	しると早桑
あさか坂東	江伊	細	青木早葉	目くろ大桑	本大和	昔大和	昔大和	鑄川とぼれ	源	小	雄	赤芽九紋龍
高木大桑	大	江伊	蛙	青木	権	群馬赤木	権	権	藏	椿	島	茂平とぼれ
	大	伊	葉	木	八	木	七	七	別種黒とぼれ	元右衛門	あせだとし	

近來流行の部

洋桑二號	青柳大和	中	谷	關	野	小	白	万	青	傳	葉
鬼縮	和	さ	桑	桑	田	林	早	年	とぼれ	藏	ひ
緋	蓼	わ	島	山	裏	う	裂	早桑とぼれ	奥州桑	華早桑	は
白銀桑	桑	たしやうと	市	と	早桑	ら	葉	同	高橋一號	神田桑	谷中桑
虎斑早桑	眞柳	砂川しだれ	ねぎし	青	同五號	同四號	同三號	同二號	大縮緬	相州桑野芽	早州桑の芽
		太郎	早桑十文字	丸	福	宮	寶玉早桑	野			

縮	緬	桑	銀	桑	赤	魯	大	洋
清	國	荊	桑	大	筋	曲	り	鱈
米	國	中	桑	ち	や	ぼ	魯	桑
芽	近	魯	桑	與	兵	衛	大	吟
清	國	野	桑	洋	種	壹	號	八
園			錦	同	三	號	九	屋
金	魯	桑	白	伊	太	利	亞	榛
柘		樹	こ	も	ち	早	桑	田
福		六	三	德	里	見	桑	小
青	ち	ゞ	み	田	中	大	妙	莊
ひ	かん	こ	ぼ	れ	西	戸	青	こ
大	和	早	桑	大	葉	早	桑	門
清	早	桑	七	日	早	や	相	州

別	德	田	大	い	醫	者	桑	篇	こ	ぼ	れ
魁		桑	根	紫	里	山	六	郎	桑		
白	は	右	衛	門	駒	ぐ	わ	二	の	宮	桑
か	に	め	奇	山	桑	赤	枝	豐	年	桑	
尾		上	大	伴	壹	丈	桑	奇	妙	桑	
生	利	桑	坂	東	清	水	池	田	大	桑	
釣		竿	陳	塲	蓮	華	翻	吟		葉	
初		出	川	岸	桑	赤	庄	土	相	州	早
く	ろ	き	命	し	ら	長	葉	く	ろ	わ	せ
家		桑	三	寶	桑	丹	治	桑	片	山	こ
奥	州	別	種	今	奥	州	野	州	中	桑	
矢	吹	桑	早	州	桑	八	平	治			

○新種類大葉の部



清良芽 白波瀨 辨慶 鬼ヶ城 鬼桑  
 豐國 瑞穂 仙松 布袋  
 多能桑 豐富 九十九桑 大繁

○同中葉の部

小櫻丸 葉中磨木丸 葉縮葵桑  
 の森國千保鎖貫長軸 上林赤木

丸葉國富 大江丸

右の如く桑の名議實に多し是に書漏たる桑名數百種ありて悉く書盡しかたき故爰に略す桑の性質は大葉中葉小葉と雖ども地質と耕作者の手に據るものにして余が正葉を寫生なしたるよりも大きくもなり又小さくもなるべし大葉の種類を小葉に作りて蠶に與へるは宜しからざ故に勉強して小葉の種類と雖とも大葉に作る様よ作るへとも桑は蠶業の元本なる故奮勵して大葉の種類を

撰て仕立べし小葉の鹿桑を畑ニ反歩仕立るより大葉の種類を畑壹反歩仕立る方が遙か勝るべし扱大葉の類を作らんと欲する者は先上畑を撰み桑植方の如く肥培をなして植べし植込て後加急に大木にせんとて根近へ強き肥をなす時は却て成長を妨る故肥をなすには肥仕方の如く桑の根へ東西南北と肥を與へる數度方向をかへて薄肥を數々致すべし蠶を春と夏秋と三度養ふには春と夏秋と桑を二つに分て爲べし春蠶へ楚を切採て與へ新楚の葉を摘とりて夏蠶與へ又秋蠶へも摘採りければ桑の性氣自然衰へ翌年の春蠶のために宜しむらざ故に夏秋の桑は夏秋蠶の桑と定め夏秋葉を摘採り天葉を少し殘置是を年々春彼岸中に楚切捨べし如斯まなす時は惣方の爲に至極宜しきなり桑の壽命は植方にあり極深く植たるは繁茂遅けれども壽命長く繁茂保續せるなりあさ植になしたるは繁茂早けれども壽命極短し又濕氣地にハ深



く植難き故あき植にかして臺を高くすべからず根刈同様に仕立  
べし如斯仕立てれば桑に痛つかず又風雨の爲に害を受せ同濕氣  
地にては水の流に據るなり急流の地は高臺になすも妨なし  
桑を採り入るに幽谷地濕地の桑を採り入るには夕刻になすべし  
朝露のある時採り入るれば水分桑葉へ充滿してある故蠶大いに  
濕氣を受け虚弱になすなり乾燥の地は朝露のあるうちにとりい  
れべし乾燥の地は水分うすきゆへ夕に採り入るれば桑葉はやく  
乾くゆへ朝採り入るなり

(五) 桑苗の形採り方の事

桑苗の採方も名國に於て異同あり先武州甲州相模にては苗の採  
方は多く(かま)此苗の採方は壹坪を一ト苗場と定め坪の正中へ深  
さ三尺位に丸く穴を掘り底へ厩肥培をいれ其上は土を凡壹尺五  
六寸厚みに入是を能踏つけ又深さ壹尺掘是は宜敷苗と三本つ

植根を堅く踐付地より上は芽を二つ三つ置其餘楚切取るべし此  
年若芽能く延ぶを見定め一株へ若芽三本つゝ立其餘の芽を闕取  
るべし楚成長するにしたがい添木をなし大切に育てべし其年土  
用の頃葉間だより己に枝となるべき芽をいたす是を悉く摘とり  
眞壹本に立べし此年十月頃には楚四五尺にも至る是を翌年春彼  
岸の頃芽を二ツ三ツ置其餘楚をきり捨株のまわりを窪くして是  
へ米泔水風呂水厨溝水を用ゆれば芽生長する事夥し此年若芽能  
延ぶを一株へ六本たて其餘闕きとるべし楚凡壹尺八九寸に延ぬ  
れば晴天の節苗にふせるなり本窪きを埋め又あらたに株のまは  
りを掘是へ馬糞下肥をしき其上へ土を入圖の如く葉を闕とり鎌  
形になる様にまげてふせるなりまげべき處へ少しく爪みて皮へ  
疵を付少しぬじる氣味合を以て曲て埋め堅く踏付置べし此年十  
頃月までには疵を付て埋めし處より根を多く出る事夥し亦疵を



つけず其儘埋める時は根の出ること少なし是苗を採る祕事あり  
桑苗植込に洪水場は秋桑葉の少く黄色になりたる時植べし出水  
のうれひなき地方は春彼岸の頃植へべし

但し第一か植て二年目の新楚を立葉を闕とりたる圖第二の苗  
をふせる圖第三の苗を掘採る圖第四の堀とりたる圖第五の苗  
を植る時の圖第五の圖の如く根の毛を二寸五分位に切て植る  
なり

(六) ぶつかき苗採方の事

此ぶつかき苗採り方は信州地方にて多く採る苗なり此苗の採方  
は四尺四方を苗場壹箇所と定め植方は右鎌形植方と同様に肥培  
を用て壹箇處へ苗三本つゝ植べしぶつかき苗の採り方は極手數  
を省く採方にあれども根の出る事を鎌形よりも遙か劣るなれど  
も如圖く一年假植し置ければかゝる形の一年苗より餘程勝る苗と

なるなり且植込て成長早きなり先二年目よりは一株にて苗六本  
位とるべし餘り多く採はよろしからず苗の採方は圖に據るべし  
なり

但し第一か二年目の新楚立て本の葉をかきとりたる圖第二の  
土をよりかけたる圖如斯土をよりかけたたく押つけ置べし成  
長なすに随い添木を立古繩よて結へるなりかま形苗も如斯な  
すべし土用の頃に已に枝となるべき芽を生ずる是を摘とり眞  
一本へ勢氣をもたすべし尤も肥培不足なれば枝となるべき芽  
出ず第三の苗採りに來りたる圖第四の掘採りたる圖第五の植  
る時の圖にして根の毛を貳寸位に切て植べし  
右の如く各處とも苗の採方種々工夫ありて六ヶ敷ものなり植物  
ハ繁茂せるとせざるとの理を考究して根の多く生ずるを專一と  
すべし

(七) 地景と地味に應じて桑を仕立方の事

一 平地にて空気流通よき砂地なれば根刈桑に仕立べし此地へ根刈に仕立れば成長早し亦桑枯る事尠くなし繁茂夥しきなり

一 土地燥よき砂地と雖も幽谷にて空気流通せざる土地にては根刈に仕立べからず此地へ根刈に仕立てれば桑葉弱かにして蠶の腹に満ず亦葉へ赤き星生じ此葉蠶に悪し、依て此地へ高木に仕立べし高木に仕立つれば空気流通能き故性悪せることなし

一 幽谷平地にかきらず真土地にては高木に仕立べし此地へ高木に仕立つれば空気流通よき故桑葉の實入能くして亦た雨天の節土桑にならざるなり

一 凹凸の地景なれば極朝日をれそくうける處へ早稻桑を仕立其次へ中手桑を仕立晩桑は日うけよき場處へ仕立べし如何となれば日向よき地へ早稻桑を仕立てればおそ霜に桑葉大いにいため損じる事まゝあり日のれそくあたるときは自然に霜とけ桑にさわらざれを霜の豫防法なり是等の事を皆諸人の知るなれと養蠶家に於は尤も肝要の事なり

(八) 根刈桑仕立方の事

夫れ彼の適當の地味へ春彼岸の頃良桑の苗を撰み地をなる丈穴を深く掘り植るなり穴を掘るに繩を張り正真に見通りよき様にすべし凡穴の深さ三尺巾貳尺に掘り其底へ厩糞をしき其上へほりあきし土を底へ貳尺厚みにいれよく踐付距離三尺つゝにして深さ壹尺五寸の穴を穿壹ヶ處へ貳本つゝ植此根まはり堅く踏付地より芽を二つ三つ出し置其餘楚を切捨べし此年若芽延始めたる節真の能く立を見定め一株へ新芽二本つゝ置其餘の芽を悉く闕とるべし後にすくれて生長せむに忘たかひ添木を立て藁に



てゆるく結ふへしゆはへざる時は風雨の節痛損する事有依て其  
 ゆはは方は楚へわらを壹つからみ結ふへしるらまざればぬくる  
 事あり此年土用の頃葉の間へすでに枝となるべき芽生ざるを悉  
 く摘とり眞一本大切にすへし

植込方は圖の如く五の目に植べし植たる年に一株へ楚二本立たるを  
 翌年春彼岸中に圖の如く楚切捨二年目には一株へ新芽四本立其餘  
 の芽を關探べし三年目の春より楚切探り蠶へ與へ始るなり楚を  
 切探るに本葉に土つかざる時は根際より切探り本葉に土つきし  
 時は土のつかざる處より切探り土葉の處は別に切分土を能く洗  
 ひて蠶に與へべし年々株へ出る芽を残す立べからず多く立る時  
 は楚の成長宜きからず地質と肥培のなし加減に依て多少を定め  
 能延る様注意すべし能く延る時は空氣の流通宜敷故桑葉の實入  
 至てよるし多く楚を立る時は細き楚多く出るなり其細楚は土桑

に多くなる太き楚而已仕立ければ土葉少なし何れも養蠶中は多  
 忙なる故凡に切探たる時ハ枝際の芽二つ三つ殘切下べし此切直  
 し早き程宜し後れて芽の延始て切直す時は後楚の成長宜しから  
 ざる也植込て四年目楚を切探りて新芽の延ざる内へ耕易き時な  
 り此時株と株の間を掘わり浮根を切るへし浮根を切らざれば浮  
 根満て地勢大いに衰へて繁茂悪敷なるべし故右植たる時より一  
 層深く掘て肥培を敷込べし肥培を地底へ敷込時ハ根を自然地底  
 へはるなり根を十分地底はり込時は風雨の節健固にして繁茂保  
 べし毎年秋分桑葉の黄色になりかゝりたるを見て樹を結立べし  
 結へるに蔓古繩にてゆるく二三ヶ處結へおき翌年春新芽のふく  
 れ始めざる内に結へたる處を切ほどすへし餘りかたく結へけれ  
 ば翌年結へたる處より芽を出さず又ゆるく結へたるも芽の開き  
 始めて切ほとす時は芽を大いにいためるなり



(九) 高木桑仕立方の事

高木桑仕立方は右根刈り仕立方と同様にして穴を成丈深く掘り植ゆへし尤も石の多き地處は掘りたき其處はてきゞになし掘安き地なれば深さ三尺巾貳尺に掘り底へ馬の踐草又は塵芥の類を敷込此うへ掘揚たる土を壹尺五六寸厚みに入是を能く踏付亦深壹尺の穴を掘桑苗壹本宛植根まはり堅く踏付芽を三つ四つ置其餘楚を切捨此年若芽能く延る芽を貳本づゝ立圖のごとく楚へ添木を立藁古繩を以て結べし畑壹反歩地價金拾五圓位の畑なれば臺高貳尺位にし地價金貳拾圓以上の畑へは高さ三尺位地價金三拾圓以上の畑へは四尺位の高さに定むべし畑のまはり麥作の中へ植るには麥作のさわりなき様てきゞに掘植るなり極深く植れば成長たそけれとのちに大木になるなりあさく植れえ生長早けれと早くつきるなり

桑苗植方は圖の如く五の目になる様に植べし四ツ目に植れば繁茂したる時枝と枝が重り又あき地か出来る故五の目に植れば惣方平均に茂るなり楚の立方は植込たる年より圖の如く年々楚を増加すべし植込てより三ヶ年の間は春彼岸中に冬折と唱へ楚切捨るか本法なれども中には三ヶ年を扱置二ヶ年も待兼植て翌年より蠶へ興る者多けれと中以下の地にては三ヶ年の間冬折せざれば根ふとらぞ且成長宜しからず尤冬折をなしては楚延過て風雨の節保ざる地は蠶養なひ始めに楚切採り蠶へ興べし今圖に顯はしたる處ハ三ヶ年間冬折をなしたる圖なり彌々四年目より楚切採り蠶に興へ始むるなり年々楚切方は枝際より切とるなり此年若芽延ざるうち株と株の間を巾壹尺五寸位に深さは本苗を植たるよりなるべく深く掘りうは根を切べし此時肥を十分に入埋めべし根を地底へはらせり様注意なす時は浮根はる事なし風雨



のためにもよる地を荒す事なく繁茂夥しき此掘あけたる穴は  
なるべく馬の踏藁草塵芥の類にて埋めべし肥はなる丈ケ多量に  
用ひて繁茂の期をいそぐべし繁茂なすにしたがい心を用ひて樹  
に手當なす時は良き葉を生ずるなり葉は外の潤ひの氣を幹の中  
へ吸こむものよして樹の生育はこれに依るものなれば大切なり  
故に未だ繁茂せざる時葉を摘ては樹爲に宜しからば摘とるとき  
は木の繁茂を妨たけ春蠶の爲にも悪き也  
但し掘わりて強き人糞をなすべからず

(十) 桑樹へ肥培に用ゆべき品々の事

一 燒酎粕

是は春肥培に用ゆべきなり

一 米糠

是は實にきゝ方よるしきもの故一株へ一合ツ、用ゆべし

一 人糞汁

多く用ゆれば強過る故心すべし此肥培は冬の内用ゆべし

一 油糟

是は能く腐し置寒中用ゆべし

一 魚腐水

是は春用ひてよろしき肥培なり

一 米泔水

一 風呂水

一 厨溜水

此三種は常にれこたりなく用ゆべし

右の肥培用方は壹尺めくり長さ四尺位の杭を拵へ是を貳尺位  
うちこみぬきたる穴へ肥培を分量して入べし今年東の方へ用ゐ

れば其次は西の方へ用又南北と四方交番に用ゆ可し

(十一) 蠶室建築の事

蠶室設け方は各圖に於て異同ありと雖共室中空氣掩滞なき様に心を用ゆるを以て第一の目途とすべし先蠶室を造營せむには圖の如く高樓を建築し屋根は瓦とし棟を通じて空氣流動のためには屋上の棟を一重高く抜氣窓を仕付室の四面へ窓を穿何れ戸障子の開閉自由にすべし元來夜中は四方の陽氣醒て午前九時頃迄は至極涼しきも此なり午前十時ころより午後四時頃まで天氣の節は蒸々とほめくなり西日の日氣に蠶を痛め大ひに腐敗せるとまゝあり西日つよき家敷にてハ西のかたへ樹木を植て西日の除防なすべし

但棟上の空氣拔窓は寒暖適度の節は風の入らざる方或は日光の入らざる方の窓を終日開き置可し吹れる風入れざる注意

蠶室の圖

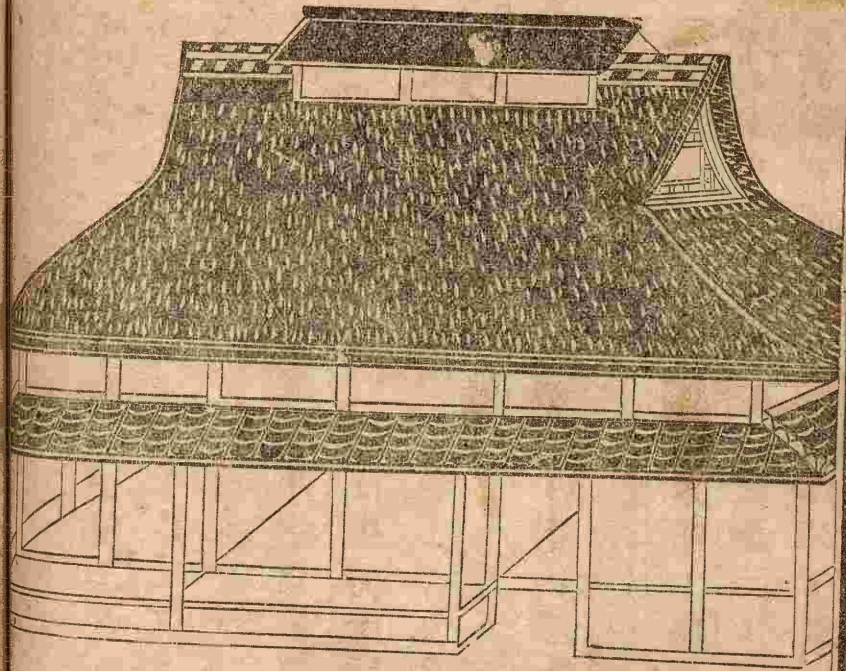
西日除防の爲に樹木を立置く景



第廿圖



居宅蠶室兩用の圖



第廿壹圖

すべし

蠶室の天上拵方ハ二階三階とも下より空氣流通よきやうに注意して拵へべしはりつめの二階上にて蠶を飼ふ時は下より空氣流通せざる故蠶尻大いにかむるゝ事あり又蠶は種々の病害發するなり板屋根にて蠶を飼には屋根へ木の青葉青松葉を多く揚て日光の除防すべし總てうすき屋根にて飼ふには午前十時頃より午後四時すき迄日光請る處へ日よけなすべし日よけなざる室よりは黒散する事まゝあり

(十二) 養蠶は家屋と人員と適當の量を定むるを肝要とすべき事

養蠶を業とせる者ハ先蠶室と器械と人員と蠶種と此四種の分量を定むるを第一の目途とすべきなり是は養蠶而已にあらず活物を養ひ且物品を製すると雖ども本を立る事なれば最も心を用ゆ



べき事なり假令は農業をなすに畑壹町歩を耕作なすに假に二人を適當と定むる時一人にては十分の收納を得難し又壹反歩の畑へは壹反歩の種と肥と適宜なる時は相應の收納もなすべきに壹反歩の畑へ壹反五畝歩の種を蒔付肥糞を十分なすと雖ども壹反五畝歩丈の收納得難し殊に豊凶の多き養蠶なれば最も量を能く定むる事肝要なり

蠶室は桁行七間半に梁間三間是を一棟となし此室を三ツに仕切をなすべし如斯なせば一室ハ貳間半に三間なり此一室にて蠶種原紙二枚を養ふべし  
此紙二枚よ付蠶飼箱八拾枚敷物ハ箱に應ず原紙二枚を養ふ人数は五人を上等とし四人ハ中等三人は下等なり亦二人より以下なれば精良の品を製する事難し  
但し一室へ圖の如くの蠶棚を一側へ三組つゝ並べ左右合せて

六組なり

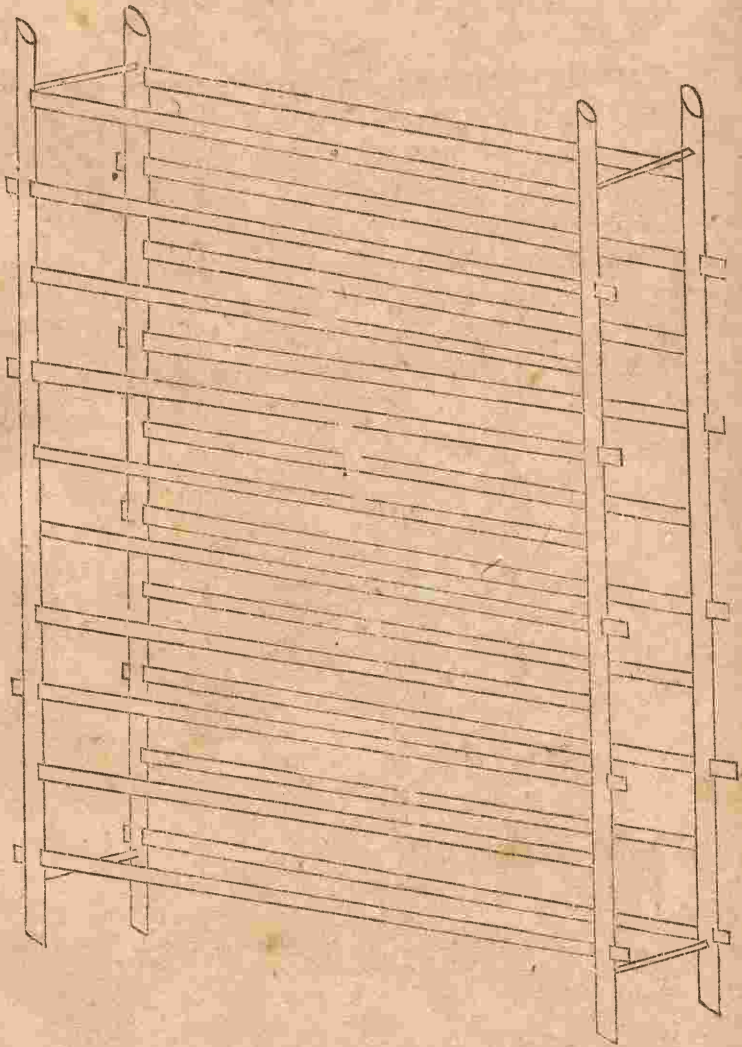
(十三) 養蠶諸道具の事

養蠶諸道具は各國皆異同あり先其地の宜しきに隨ふべし寒國にてハ藁だ箱の類にて養ふかり寒國にて藁だ或は箱にて飼揚て上作得たりとて暖國にて藁だ箱を求めて蠶飼をなす時は蠶黒散すべし又蠶籠が至極宜しゐるとて寒國にて用ればとて唯宜しゐ而已を聞て眞似とすべからず他の眞似をなすには其地の寒暖と我が地方の氣候等とを能く考へてなすべき事なり余を從來蠶籠にて養ないし處籠の縁低き故縁の蠶へ十分桑を與へ難し縁へ十分桑を與へければ追々蠶縁へ出る故桑を與へる毎に縁の蠶を中へ入また蠶尻を去數度にも中に居る蠶は縁へ出し縁なる蠶を中へ入養に手数を加さむ故籠を改良し圖の如く縁を箱になし底は籠より一層目をあらくして空氣の流通に注意し且敷物は餘國にて絲



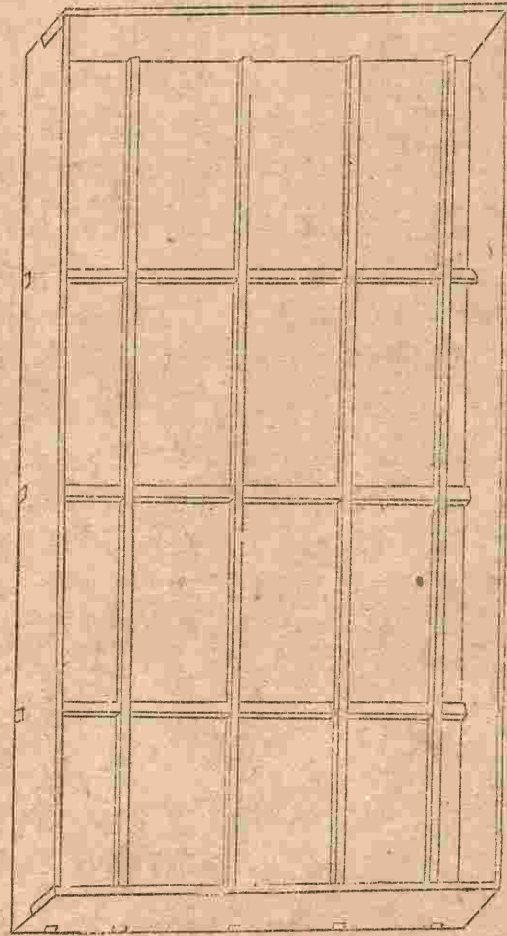
第廿三圖

蚕棚の圖



第廿四圖

横中二尺八寸



豎四尺八寸

蠶籠改良

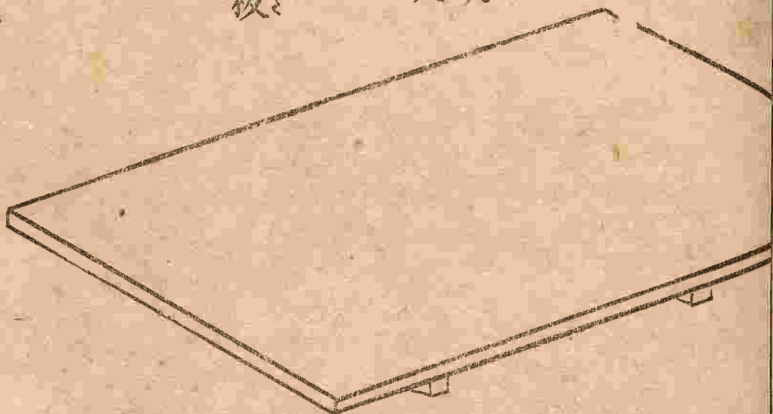
蚕飼箱の圖

深二寸五分

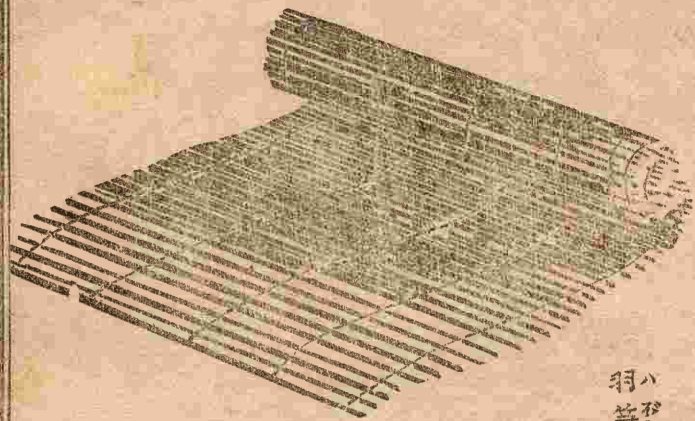
第廿五圖

桑切板

立四尺  
横三尺



桑簀

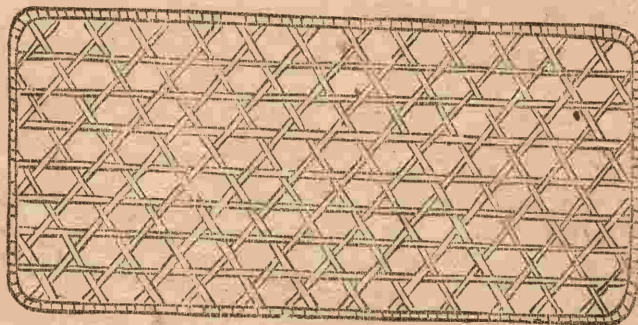


羽簾

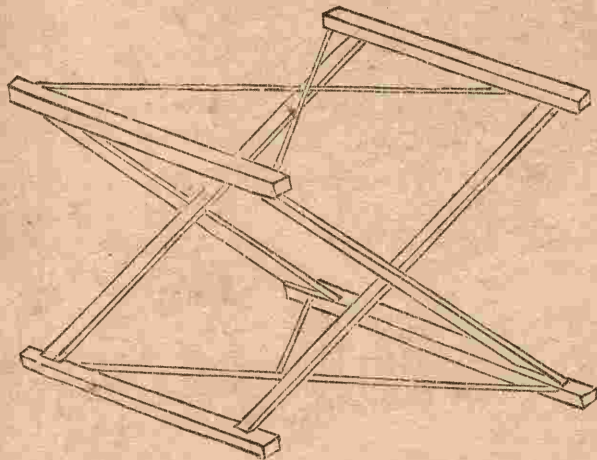


第廿四圖

蚕篋



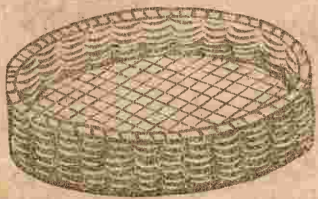
籠置臺



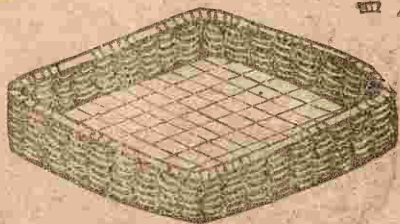


第廿七圖

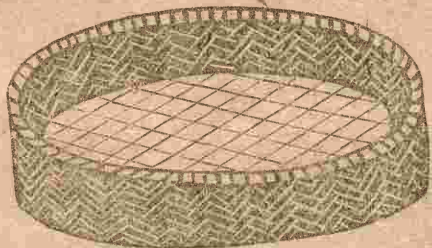
鷹起微塵  
篩一分五厘  
厚四方目



獅起微塵  
篩二分四厘  
方目



鷹起微塵  
篩二分五厘  
四方目



丁庖切菜



第廿六圖

薦

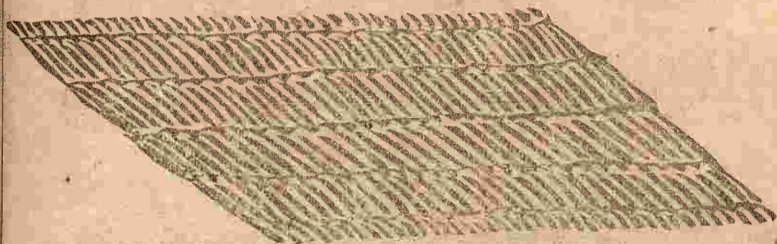


丁庖

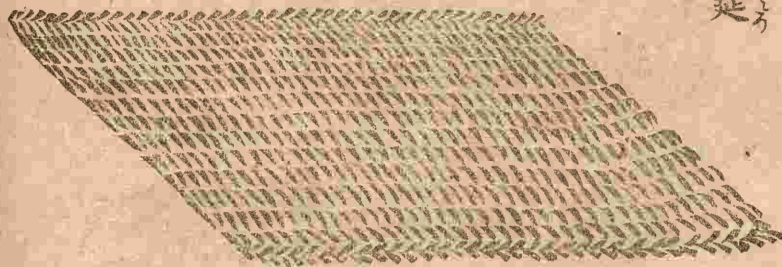
同



同



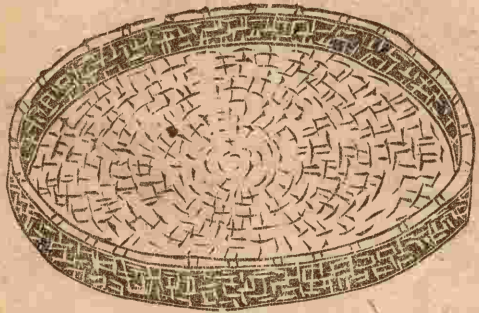
筵





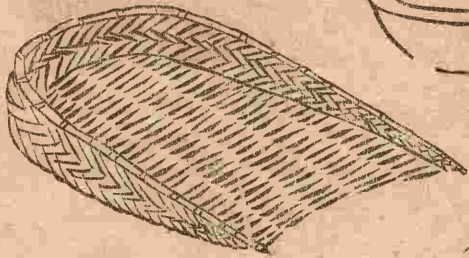
第廿九圖

藁丸



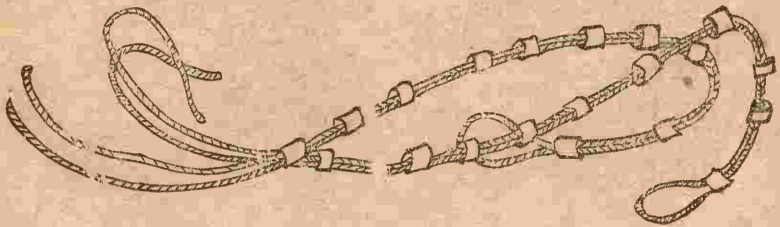
寒暖計

真



木鉢

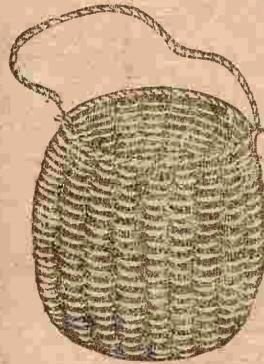
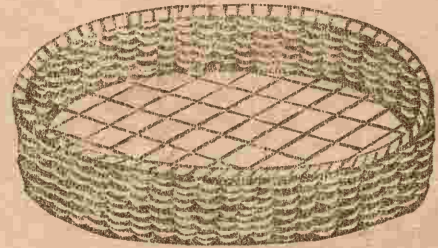
棚繩



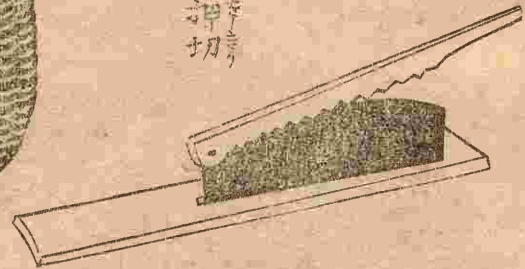
第廿八圖

大節  
節五箇  
にて微塵  
ふり桑  
と目  
ふり合  
世用巾

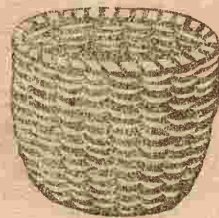
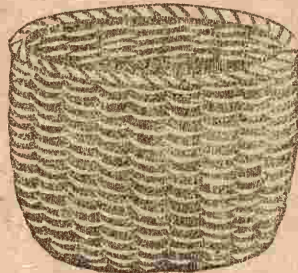
桑採籠



神切

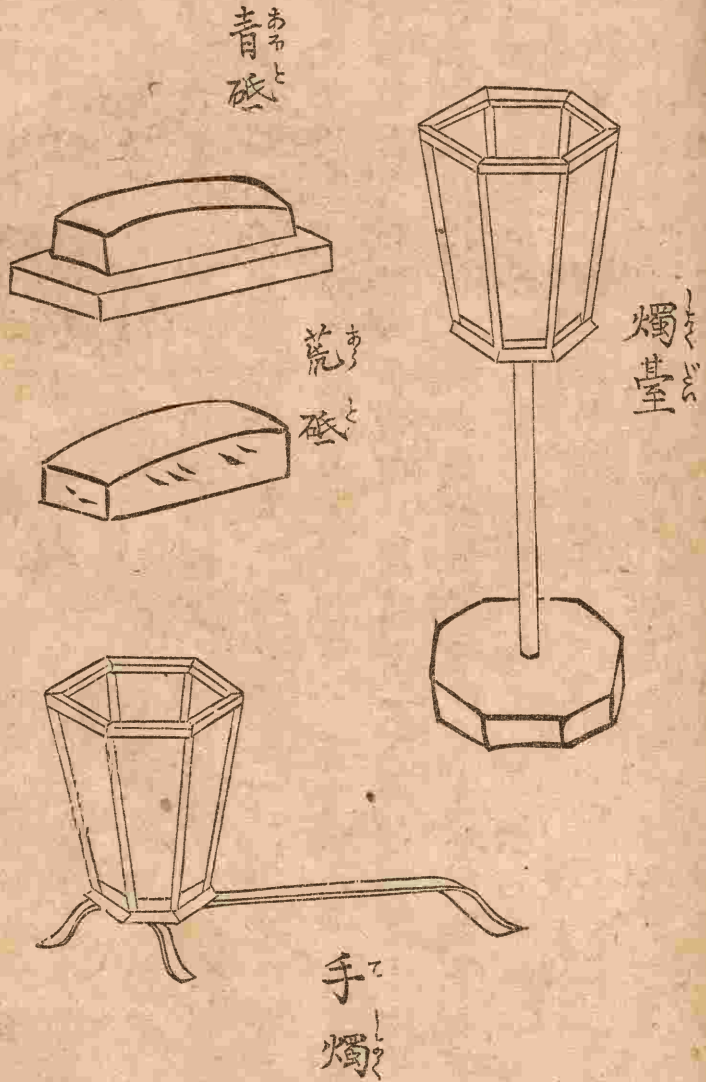


大節籠

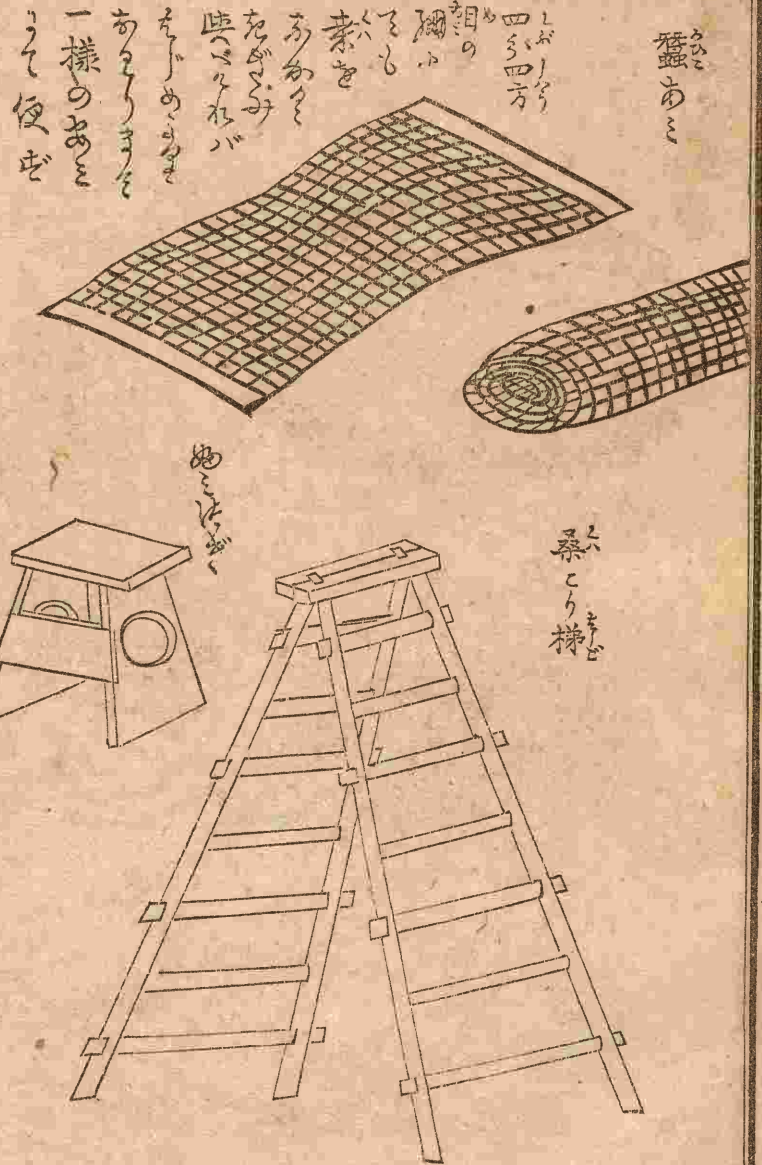




第三十壹圖



第三拾圖



立と云敷物を用す其絲立の織方は淺絲の極細きを豎になし横は  
藁壹本並べに織たる物なり是を蠶飼箱の大きさに縁を切り底へ  
敷込なり此蠶飼箱にて養ふ處籠より手かゝる且縁の蠶へ桑を與へ  
安し席を省き籠より蠶を多量に飼れるなり圖は顯したる蠶飼箱  
は貳間半に三間の室にて養ふ分量は造りたるなり貳間四方の室  
にて養ふには豎三尺八寸横貳尺八寸に造るべし養蠶に用ゆる諸  
道具ハ悉く冬の内は用意すべし又繭作らせる時につかふ藁の類  
總て簇に拵るものは寒中の内に用意して濕氣なき様乾燥し置べ  
し菜種壳を簇に用ゆる者あれども菜種壳も濕氣を多く含みあ  
る故實によろしからず

(十四) 蠶種求め方の事

蠶を養ふにはまづ蠶卵を撰む事肝要なり蠶卵購求なすには我  
地方より寒國よて本場の種を求むべし種子の見様は随分揃よく  
面一様にして生氣強く卵の中少しくばみ種の地合能くままり蛾  
のはたらき卵のちらし能してあまきにはいなき又取扱に種こほ  
れざるを最上の蠶卵と知るべし

(十五) 蠶種購求して扱方の事

九月頃蠶卵紙求めて原紙壹枚宛紙の袋に入れて空氣流通よき室を  
撰み鈎置べし蠶種を蚊帳帷子に包事あしき又壁きわにかくべか  
らず行燈ランプの上につり置べからず油氣鹽氣多葉粉鉄樟腦大  
毒也日光のあたる處焼火の近所へかけ置べからず寒あけると同  
時に地方よ於て極清涼場處にて極古き土藏へ桐の箱に入れて貯へ  
置べし春分は俄に南陽氣よなる事度々あるべし若し南陽氣の節  
華氏六十度以上の陽氣よ蠶卵をあつれば何分か發生を催ふして  
性惡なす故ふじの温度をあてざる様注意すべし鼠は蠶卵を好む  
のなり上中下の三種置時は上の種子へ鼠つくものなり油斷して



鼠につかるゝ者まゝあり依て能豫防なすべし

(十六) 蠶種を寒水に浸べき事

世の説を聞に蠶卵を寒水に浸すは無益といへる人あり又寒水に浸せば虚弱なる卵は死に強き蠶のみ發生なす故飼安きなと云ふ者あり是に反對者は虚弱は卵が死ぬ故壯健なる種も何分其害をうける故寒水に漬可らずとも言ふ種々の説を立けれと余の経験には寒水浸は益ある也如何となれば寒中は土へも火の焼つくほと嚴敷乾く故蠶卵の内部甚だかわきすくす故寒水に浸し水分を與へければ發生のために至極よろしきゆへ益あるなり寒水に浸には寒に入れて七八日目頃極寒き朝六時頃水漉にて水を二度漉して清潔なる盥へ水を移し種を入三時間浸し置毛の柔かなる刷毛にて卵面に付着せし蛾の尿其他汚物を洗ひ又漉水にて二再びそゝき竿にかけ日陰よて乾かし一日に二度つゝ上下かけかへべ



第三十三圖

蠶卵を  
寒水に  
浸す圖





第三十三圖

寒水に漬たる  
蠶卵をかあけ  
る圖

しむけかへざる時は上は早く乾き下は久しくかわかざる故發生  
期に至りて早く乾きし方は早く發生す又遅くかわきし方をおそ  
く發生なす故能注意して上下かけかへべし

但し蠶卵を寒水に浸す前に計にかけ重量を覚え置本目に復  
迄釣置本目に復忘れければ本の通り貯置なり

附

世の説に蠶種を寒水に浸すは無効なりといへるに付經驗の  
ために寒中雪三尺餘り降積りたる節日陰の雪を二尺掘て蠶  
卵紙を埋めおきしところ又雪五六寸餘り降積り都合三尺五  
寸餘り積りし雪厳しく氷りたる故日數四十日餘に及て漸く  
雪解て蠶紙見える様になり是を探り揚て日陰へ釣をき能く  
乾きて貯へ置き期節に發生おたせける處蠶卵一粒たりと  
も發生せざるはなし殊に其蠶兒飼易く熟蠶にいたり良繭を



結びける依て寒中水の中へ十日や廿日蠶卵紙を漬置とも決て虚弱なる蠶卵にても死すものにあらず亦寒水浴をなすに水一斗へ鹽五合入て蠶卵紙を十五日間浸おきし處少しも障なく豊熟す是に據て疑いなく寒水浴をなすべし

## (十七)

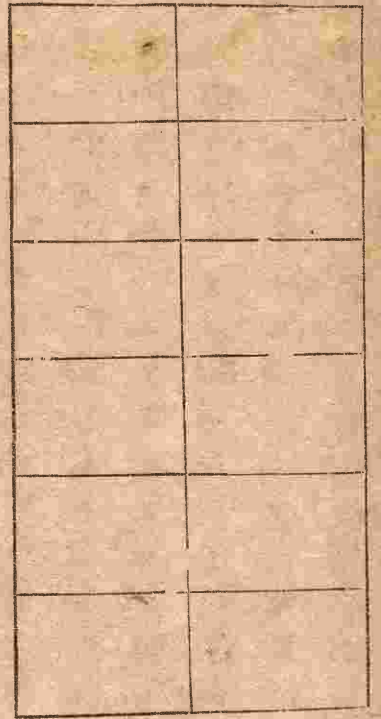
蠶卵貯へ置し處より取出して發生期に至る迄の保護方の事

先蠶卵發生期に至る迄の保護なすには第一桑葉の景況を能く考へ今より何日間過て發生すれば桑葉の都合極宜しあ否を考十五日間過て發生なせば都合宜敷と見認めれば蠶卵を貯へ置し處より取出して空氣流通よき室の眞中の蠶籠差入置棚の如くにして蠶紙を載せれば棚を平に造り板敷より壹尺五寸上て棚を造り夫より四寸宛あけて十三階に造るべし此高さ六尺七寸なり貯へ置し處華氏の五十五六度位の處より取出したるなれば六十度

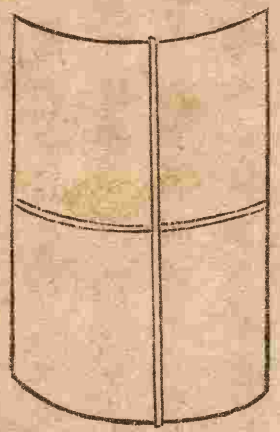
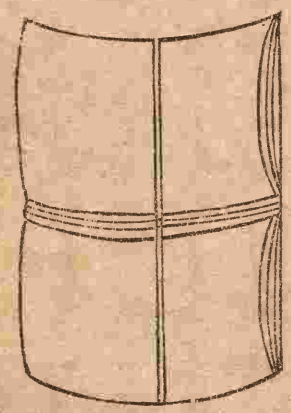
位室に移し初日は壹番下棚へ載せ夫より毎日一階宛登せ十三日間にあて登せつめるなり六十度より一日に一度宛進むれば十五日間に發生を催す又十日乃至十一日目に發生せしめんと思はゞ一日に一度半宛進むれば豫定の日には發生す亦七日半目位にて發生せしめんと欲せば一日に三度宛進むれば豫定の日には發生す火力を以て何に程自由自在にならんとて餘り温度進めければ乾過て卵中に於て蠶体の形を造るに大いに苦む甚だしきに至りてハ蠶体の形を造れども卵中の水分蒸發して水氣をとるへしも心づかず居ければ外殻を破事能はず死事あり乾燥過る時は室内へ時々水を吹くべし又蠶種を載せ置棚より一階於て下棚へ藁薦へ水を吹差入置か桑の芽あれば桑の芽を採り手にてやえらかにもみ一分四方目の篩にて篩い粒になしたるを蠶卵の上へまづかにむろび二時間位をき濕氣を與へべし發生保護中は別て乾濕によ

六十一  
 り注意すべし火力を以て温度を保續せしむるにも毎日二三度位  
 は戸障子をひらき空氣をいれべし蠶卵は釣れいて發生まで保護  
 方は蠶種紙の上下へひきかけをつけ置空氣流動よき室の天上裏  
 へつりおき毎日一度づゝ上下廻轉すべし廻轉なきるときは紙  
 半分先に發生を催すゆへ廻轉して平均を計るべし甚だしき發生  
 保護なす者ハ發生遅過るとして日の照るとあるにれき或は夜具蒲  
 團につゝみ焼火の近處にれき急に暖め無理發生せしむるときは  
 蠶虛弱になるなり今發生しては早過るとして發生催したる蠶卵を  
 小豆の中に入れて遅刻せしむるときは發生催したるまゝにて發生  
 せざるなり室に釣おいて火力をもちいず發生期迄保護なると雖  
 ども六十度以下の節は火力を以て六十三四度位に加減すべし一  
 日六十度以上の氣候にあわせて俄かに六十度以下の氣候にあつ  
 れば大いに性悪せしむるなり前日より一度或は一度半位宛度數

蠶卵を包む  
 紙を懸たる圖  
 半紙十二枚



蠶種を包む  
 みくら裏



同面

第三十四圖





第三十五圖

すゝむるを至極よろしければ退度は甚だよろしからず七十度以上  
上の節は戸障子を閉き風を入べし南風をよろしからず蠶卵すて  
に發生せんと思はゞ圖の如く紙に包べし

(十八) 寒暖計にて蠶陽氣を計る事

夫れ蠶を飼ふにハ蠶室の氣候を蠶の適度に加減せる事肝要なり  
舊習は我が體にて蠶陽氣を加減せしか我が體にては大いに不動  
ありてたふかならず近世は蠶の陽氣を寒暖計にて計る事實に明  
なり先華氏の寒暖計六十八度より七十度迄ハ掃立より獅子休ま  
ての適度なり獅子起より鷹休迄ハ七十一度を適度とす鷹起より  
船休迄ハ七十二度を適度とす船起より庭休迄ハ七十三度を適度  
とす庭起より繭になる迄ハ七十四五度を適度とす定度より寒き  
時は火力を用ゆべし火力にて定度を保續して室中一圓定度に加  
減せる事肝要なり定度以上の時は少し火を焼べからず居室にて



蠶業なすには炊事場を別ニ設け置べし定度より度數追々進みければ戸障子をも追々に開くべし定度より進むに随ひ桑葉に露をうすく吹き養ふべし八十度に進みたれば露を少し強く吹與へるなり夜中にても晝と別なき時は晝夜の差別なく養ふべし亦陽氣醒るにしたがい戸障子を追々少し宛閉桑へ露をうつのも段々うすくうつべし

養蠶中世間に早魃の節屋根乾きたるとして屋根へ日中水をうつ者ありけれと甚だ惡敷なり屋根へ水うちければ焼石を水に入るが如くにして蒸き内にこもりてよろしからず

(十九) 蠶掃落し仕方の事

蠶をもく發生始め原紙壹枚へ蠶十四五頭發生したるを掃落し別に養ふべし蠶七分生出せし時掃落べし椶を以て掃落す時は椶を採り能く露を乾し手を清潔に洗手にて椶をやはらるにもみ壺

分四方目位の篩にてふるい籠へ蠶飼箱上へ糸立の薄き藎を敷々物の上へ萩糠を薄く平にふり此上へ包置たる蠶種をひろけ蠶出たる上へ粟のすり糖を薄く平にふり此上へ拵へたる椶を紙壹枚へ椶凡四合靜かに振りかけ時計凡十四五分間蠶椶へあがりたるを見て種紙の裏なる紐をとり圖の如く裏より細き箸にてたゞき落し種紙の裏に付たる蠶を羽箒にて掃落紙の四方貳寸五分ツ、あけ圖の如く四方を折立箱のよふにし其内中へ平にむらなく尻頭あたらざる様にひろげべし一日椶五度與へ椶は精々一二日に限るべし桑葉に移す時ハ弱なる桑を採りよく露を乾し桑巾六厘長さ壹寸に刻み蠶の上へ粟のすり糠を薄平にふり網をかけ其上へ拵へたる桑をむらなく與へ三四度與へて蠶を移すべき藎の上へ萩ぬめをふり其上へ網のまゝ靜に採り置べし蠶尻かへて後は桑巾六厘に長さ八分にきざみ與へべし一日の養度數は検査表を



見るべし黒蠶の内の養育は實に六ヶ敷故氣候をよく加減し一日  
置に居尻を去るべし

(三十) 桑葉刻方の事

桑葉の刻方は養蠶中最も大切の業なり故に能く注意して大小な  
き様に刻むべし大小の刻方なす時ハ蠶平均ニ喰盡さず依て平均  
に喰い盡す様注意して刻むべし微塵ふり桑の外は篩にかけずと  
も能く揃ふ様に刻むべし篩にてふるいとふと時を桑もめて早く  
乾く故なるべく篩すべからず桑の割方は流儀によりて其四角に  
刻む者あり又少くなかめに刻む者あり余の考へは長きに利あ  
り如何となれば眞四角に刻みたる葉を與へければ皆平らに落附  
故空氣の流通宜しからず極長めの桑を與へければ皆凸凹になり  
て蠶喰易く且空氣の流動も宜しきなり故に養ひ始めより終り迄  
微塵なり外は總て長めに刻むべし刻方左の如し



第三十六圖

桑の葉を切る圖  
桑の葉を切らばハさきより  
りて揃りたる葉へ芽が  
きたり芽消し姉さんち  
母さんかおの雨かふうそ  
うだらふさまも姉さん  
のゆてなる処へ行きて  
桑の芽を汲山掃てお出  
とよききりたかふあとよ  
り揃りふきまきしと姉  
「よくあまへお出だね  
あまへ木へのちるのの上  
まなかから上へをうつち  
くれ上にはよしのが濕  
さん取りまは





茶の芽を蒸すに  
出さるる  
図

第三六圖



茶の芽を  
蒸すに  
出さるる  
図

第三七圖



第四十圖

蚕の網を  
かさい  
来を  
與へる  
圖



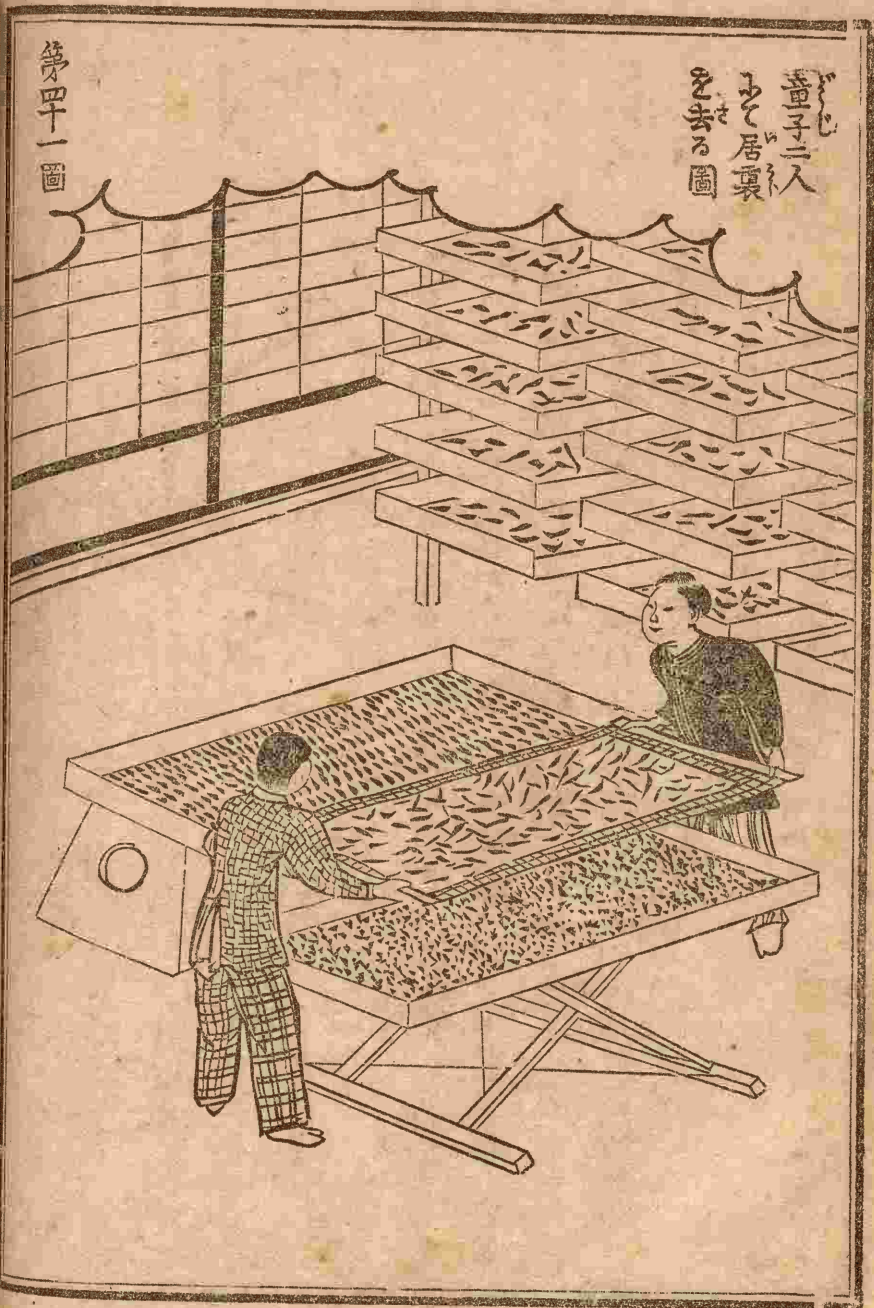
第三十九圖

蚕の  
おろし  
の  
圖





童子三人  
居裏  
を去る圖



第十一圖

蠶掃落より獅子眠迄桑葉刻方

掃落の刻方は前記の如く煙草の荒切の如く切はなし掃落して後は桑巾右同長さ壹寸に刻み是を一日與へ二日目より桑巾一分に長さ右同三日目より桑巾一分五厘に長さ右同是を獅子眠座になす迄與へふり桑刻方は桑笠改良の説に演たる如くは刻むべし

獅子起より鷹眠に越く迄の桑葉刻方

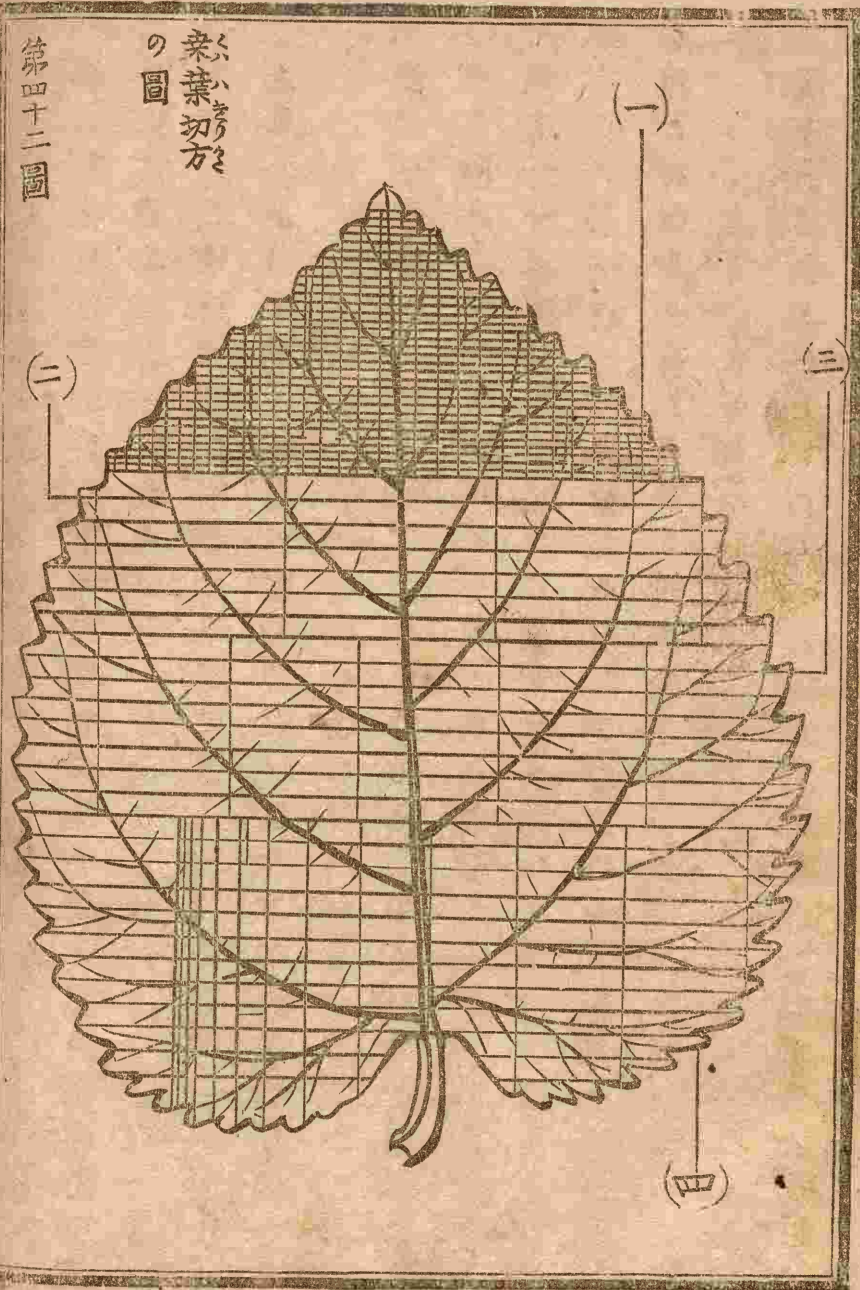
微塵の刻方は圖の如く(一)の如くなり微塵分量は春蠶と同様になすべし圖の(二)は桑付(三)は喰盛り(四)はふり桑なり獅子起桑付刻方は桑巾一分五厘長さ壹寸八分是を三度與へて居尻を去り次には桑巾右同長さは壹寸五分是を二日與へ次には桑巾貳分五厘長さ壹寸三分是を鷹座になすまで與へるなり

鷹起より船眠迄桑葉刻方

鷹起桑附刻方は桑巾貳分に長貳寸是を三度與へ居尻を去り次は



桑葉切方の圖



第四十二圖

桑巾右同長さ壹寸六分是を二日與へ又次には桑巾三分五厘に長さ壹寸五分是を船眠座になす迄與へ眠座になしければ桑巾右同長さ壹寸是よりふり桑なり

船起ふねおこより庭眠趣迄の桑葉刻方

船起桑附刻方は桑巾貳分五厘長さ貳寸是を三度與へて居裏を去り次には桑巾右同長さ壹寸七分是を一日與へ次には桑巾三分長さ壹寸五分是を二日與へ次には桑巾三分五厘是を一日與へ次には桑巾四分に長さは右同是を庭の眠座になす迄與へ眠座になしければ桑巾右同長さ壹寸餘はふり桑なり

庭起にわおこより熟蠶じゆくせんに至る迄の桑葉割方

庭起桑附割方は桑巾三分五厘に長さ貳寸五分是を三度與へて居裏を去り次には桑巾右同長さ貳寸是を一日與へ次には桑巾四分五厘長さ右同是を一日與へ次には桑巾六分に長さ三寸是を熟

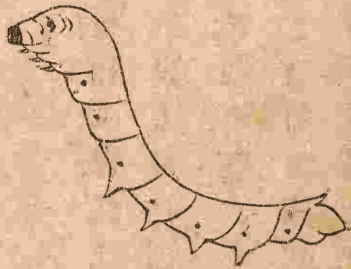


蠶にいたる迄與へし

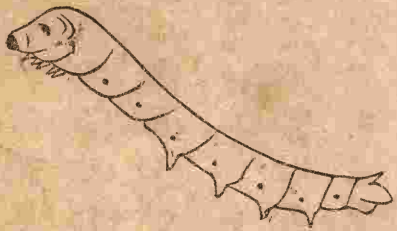
(廿一) 蠶眠の善惡見様の事

蠶眠につく時は養育中最も肝要の處なり眠につく時の桑をふり桑と云此桑十分を喰ふたるは第一圖甲の如く頭を十分にあげて眠居なり第二圖乙はふり桑八分喰して眠につきたる故甲より頭のあげかた少し低し第三圖丙の如きは眠桑七分喰して眠につきたる故頭少しくあげて眠居るなり第四圖丁の如きは六分喰して四分不足あるゆへ頭を少しあげずに眠居るなり桑不足にて眠につくを不思議の様に思ふべきか蠶は素より氣候の温冷に隨て發育すハ天然の理にして氣候と喰量とは陰陽にて合体せざれば眼前より以下の如く著しく顯故寸時も由斷なく養ふべし頭をあげずに眠よつくは前に記載の如く桑不足故腹中飢て頭をあげる氣力なく唯頭を垂て眠につくなり悪しく眠たるは脱皮にくるし

第一 甲の眠りの形

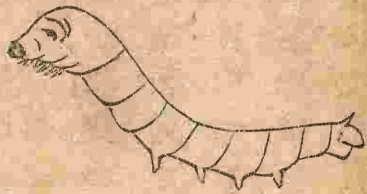


第三 丙の眠りの形



第四十三圖

第二 乙の眠りの形



第四 丁の眠りの形





み且桑附に極柔かなる桑にて桑附ざれば桑つかず一度仕損じた  
 るは始終くるしみあるゆへ仕損ぜぬよふ注意すべき事也

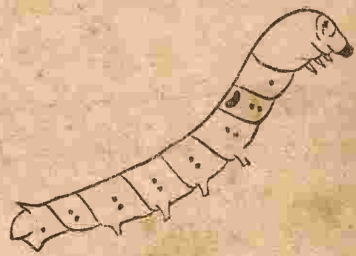
一頭透蠶病

此病に罹りたる景形は第一圖の如く蠶の頭少しく大きくなり  
 体中水晶の如くに透き赤色に化して我が居る席を去り縁へ出  
 て頭をあげて居るなり大患至りたるは桑を喰せざる故忽ち黒  
 散す

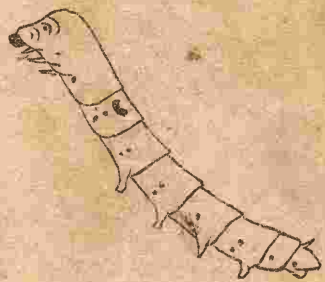
(廿二) 蠶病の景形并原因治療法の事

一原因ハ第一養度の不足より發病せるなり且十分に與へると雖  
 ども適當の桑にても發病す獅子鷹の頃強過る桑を與へるは赤  
 子に強飯を喰せせるか如く喰せざる桑を多量に與へるは反つ  
 て與へざるより劣る如何となれば喰せざる桑葉のために濕氣  
 をうけて大いに虚弱になすなり故に青葉の中にてても發病なす

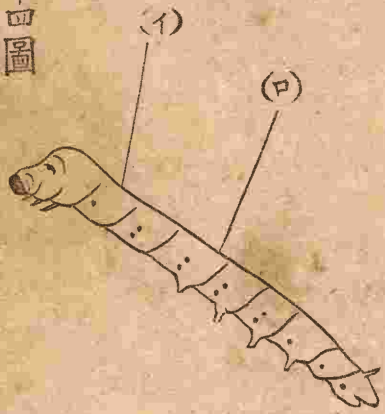
第一 頭透病



第二 節高病



第三 白塊病

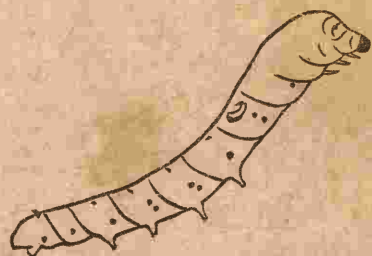


第四 上全  
 白く塊  
 たる姿



第四十四圖

第五 大頭病



第六 縮病



第七 健方儘死病



第八 黒散病



第四十五圖

事あり又船よりさきに至りて喰盛へ餘り柔過る桑を與へる時  
 は壯年の人に粥食にて非常の運動をさせると如く忽飢て性力  
 衰へて發病す又適當の桑にて壹度(且)百夕與へべき處へ八十目  
 與へ又次にも八十夕與へければ二度の内でさへ四十夕の不足  
 眼前に顯る如斯なる養育なす時は自然に病を招くなり此病に  
 罹ると桑の不適養度の不足故氣候に劣て發病なす依て是を豫  
 防なすには何に程大暑にても喰口に休みなき様に適當の桑を  
 與へければ氣候に劣る事なし譬へ少量に與へると雖ども喰盡  
 すと待居て與へければ決て發病する事なし世の説を聞に俄に  
 大病に罹りたるといへる者未だ少なからず大患に至るまでは  
 前々より養育者の自病を拵へ來るといふも可なり最初より健  
 固に養育なしたる蚕を俄に病にせんとて寸時の間になるものに  
 あらざ大患に及迄は色三扁の變化あり最初水青に透次に黄



色をおびしめて彌々赤色に變化して水晶の如くに透くなり  
 一此病を治療なすには水青かおそくも少しく黄色に趣きしとき  
 心付少しく弱かなる桑をうすく重々與へ居裏を度々去り氣候  
 を適度に加減なす時は忍本復すべし彌々彼の水晶の如くにな  
 りたるは極柔かなる桑を採り極きれる剃刀の如くなる庖丁よ  
 てきざみければ桑葉の切はだより濕氣出る此露にて蠶口中を  
 しめし喰付なり此時喰付ても直にはなれる故せめかけ與へけ  
 れば最初一口喰したる蠶二度目にも二口次には三口喰し桑に  
 なじむ迄ハ由斷なく桑を與へ居尻は一日に二度ツ。去り氣候  
 は尤も適度に加減すべし大患に罹りたる蠶は桑を一口喰して  
 直に去くしきたる桑をば喰せど桑をしくの厭はず與へる時  
 は本復すべし一口も喰せざるは全快せざるなり  
 一節高蠶病

此景形は第二圖の如く節々高くなり体中へ白水滿て少し障り  
 ても白水を發してたちまち消死す

一此原因は第一桑を多量に與へ過しより發病おすなり故に桑を  
 一度多く與へる時は喰盡さず喰残りの桑能く乾燥く時は其憂  
 なし能く乾燥かざる時は濕氣をうけて虚弱なり桑を喰殘く  
 せる故に居尻厚くなりければ忽熱氣を催すなり濕氣を受けて又熱  
 氣に蒸されて發する病にて發したる蠶には治療なし唯豫防な  
 すより外なし

一此病の豫防方を原因濕氣と熱氣との兩害より發したる病依て  
 獅子蠶驚蠶に發したる時は叔糠を少しく細にして其糠を蠶へ  
 平に居尻の少しく見へぬほとふりかけて桑を二度與へ居尻を  
 除去し養量は前より少しく薄く與へ喰盡を待居て與へ毎日一  
 度宛居裏を除去なむ時ハ獅子蠶に起て二三日目に此病見へた



るは鷹蠶起よは止停鷹蠶起二三日目に發したるは船蠶起にも  
 留る船蠶起より發したるは庭蠶の起に至りても止まらず又卵  
 種の悪きより發したるは餘程注意して養育せざれば獅子蠶よ  
 り壯蠶に至る迄連續す獅子蠶より船蠶の眠前迄の間蠶千頭の  
 中に一二頭位發したるは少しく居尻に注意して前與へたる如  
 くは桑を十分與へければ却て豊作す此病を傳染病と唱ふる者  
 をあれども傳染病にあらず蠶卵種數万粒の内には何分か虚弱  
 なる卵種もあるべしさすれば虚弱の卵種より發生したる蠶の  
 み先に害を受て發病なす故注意して養ふ時は前の如く止停原  
 因發病させたる如くに始終養育なす時は性質健固なる蠶も追  
 々害をうけて傳染病の如く蔓延して一体に虚弱なすなり壯健  
 の蠶と性悪なしたる蠶と交合して置ても居尻を重々去り且空  
 氣の流通を能くし氣候を適度に加減なす時は壯健の蠶は壯健  
 に成長す故に傳染病とは云がたし

一白塊蠶病 (此病名に蠶ホシイ共云又白僵蠶病共云)

此景形は第三圖の如く全身棒の如く曲らざる様になり故に桑  
 を喰するにも正直にて喰す(イ)と(ロ)の間壯健の蠶より少しく長  
 くなり且同處を指にてやはらかにさくり見ければ塊あり是病  
 毒胃中に滯淹たるなり大患に至りければ第四圖の如く白く塊  
 て倒るゝなり

二此原因は第一空氣の滯淹と濕氣を受又居尻の熱氣に蒸し此三  
 害を受たるより發病せる也毛蠶の時より壯蠶に至る間其三  
 害を一度受たるを受てより七日以上經過せざれば白く塊まり  
 て顯ぞ故に船蠶起桑附てより庭蠶起桑附の間に該害を受たる  
 に熟蠶に至り繭を造り始めて白く塊まるもあり又ハ繭造り終  
 りて繭の中に白く塊まるもあり如斯日數を経て顯はれる故養



育主任者は日々能く蠶の景形を見廻るべし虚實のために此病  
を見と欲せばはりつめの天上うへえじかに菴を志き其上へ蠶  
を置四度の眠起の内一眠起爰に置いて養ふ中三害を受ければ豫定  
の日頃には顯はれるなり

二右病治療なすには(イ)と(ロ)の間少しく延且同處少しくかたまり  
たる節刻みたる桑へ中等の酢壹升へ水貳升わりて吹かけ與へ  
た桑を八分通り喰したる時居尻を去るべし次には能く乾燥さ  
たる桑を與へるなり居尻を一日に二度宛去り空氣の流通を能  
くし氣候を適度に計るべし前の酢桑にて蠶の身体自由になり  
ければ本復す酢桑を與へてよりを始終粗練の上にて養ふべし

附

此白塊蠶病發る室には年々歲々發する故室くせとか或は其  
病毒室内に潜伏してある故連年發すること云又始めて發

したるハ隣家の蠶室より衣につき來るか或は野外の虫類中に  
此病に罹りありて夫より傳染せしなと云いへる者あれども決  
して前年の病毒發するにあらざ又室外より傳染せしものにあ  
らず全く養方の悪敷より發する病なり

一大頭蠶病

此病の景形は第五圖の如く頭大きくなり且尻より半身赤色を  
れび桑を喰らふまづ

一此原因は第一寒さにあたりたるより發病す此病に罹り安きハ  
眠圖の乙以下の蠶桑附て二三日の間華氏寒暖五十度位の節火  
力を用ゐざれば發病せるあり又壯健なる蠶桑附と雖とも桑附  
より霖雨二三日降續き寒暖五十二三度の節能く乾燥がざる桑  
を與へければ忽發病せるなり  
一此病治療なすには室内の氣候を適度に加減し柔かなる桑を能

く露を乾燥して薄く與へ喰盡を待居て又與へ如斯重々與へ居尻を毎日一度宛去り手厚養ふ時は忽快復す

一 縮れ蠶病

此病の景形は第六圖の如く全身縮れ頭を震

一 原因は眠圖の乙以下の如眠りたる蠶起始めより桑附一日寒暖八十度以上の節桑附桑の強か又は適當の桑と雖とも養度の不足より發病せるなり

一 此病治療法は室内の氣候を適度に計り與桑の極柔かなる桑を剃刀の如くきれる庖丁にて常より少しく細かに刻み與へ又喰盡さざるに與へ如斯に養い一日二度宛居尻を去るべし桑に喰なじみければ縮れ自然に延て本復すべし少しく疎畧有ては平愈せざるなり

一 健儘死蠶

此景形は第七圖の如く無事なる儘死にたをれるなり

一 此原因は居裏厚くなりて熱氣あるを知らず其日午後九時頃十時頃翌朝迄の喰食一度に少しく露ある桑を多量に與へたる故居尻の熱氣に蒸され上より露桑の濕氣にとさへられ蠶此中間に有て大いに苦み俄に死すなり

一 此病豫防なすにハ獅子蠶鷹蠶の間は必ら居尻を厚くせぬ様注意して濕氣なき桑を與へべし船蠶より先に至りて霖雨降續き桑を能く乾燥す事な難き時は桑を與へる數度糊糠を少しづゝふりかけべし尤も居尻は度々除去し且室内の氣候を適度に加減すべし壯蠶に至りて若し手まはりかねて居尻去るべき處去られざる時は糊糠を蠶裏の見へぬ程平ふりかけて乾きたる桑を與へべし霖雨にて能く乾きたる桑なきときは極薄く度々與へべし



一 黒散蠶病

此景形は熟蠶に至り簇へ登せて第八圖の如く蠶腐敗して黒く解るなり

一 原因は初めの眠起より終りの眠起に至る迄なり桑と桑附の養量八分位與へざる故肝腎の糸を貯へど今一層桑不足なれば熟蠶に至る迄保續せざるなり

附

此黒散蠶病を世の説ふ熟蠶迄は何の憂いなき蠶を簇に登せられたれども何のわけか黒散とたと憂いる者あれども決して壯蠶に至りて此病に罹りたるにあらざ養育者か日頃病を造りたるも同様と云はざるをゑん

一 此病豫防法は第一桑の適當否を考へ眠起には別して桑を薄く烈敷與へべし譬へ寒暖八十度以上と雖ども居尻を少しもためざる様注意して蠶を青葉の中へとく様にせず時は南風烈敷吹とも又雷鳴恐ろしきとも決して恐るゝ事なし又寒き時は火力を以て室内一圓適度に加減し濕氣あき桑を與へ如斯漏なく注意を盡きて養育なす時は此病に限らず他病も招く事なし南陽氣や雷鳴の時驚者あれども却て喜び勇て養育すべし如何となれば此時の陽氣位に火力を以てなすには炭真木を餘程費ざれば此度に進まざるなり若し此度に火力にてなすと雖とも室内一圓に平均計難し天然の氣候なれば一圓に満るなり此温度の時は涼敷日の一培も成長なす故望て養ふべし

一 逃走蠶病

此景形は病名の如く蠶逃走るなり蠶の足樺色になりて大いに足弱し故に這歩て高き處より落るなり

一 此原因は蠶尻を角力の土俵の如くなしとる故蠶尻の熱氣に蒸

れて行儀正なき蠶なれども足を煮湯の中へ入置如くにて據なく逃出すなり逃出ても足を焼たる故歩行叶はず故に高き處よりたつるなり蠶尻を土俵の如くになして無事な飼揚ると雖ども糸採る時に糸鍋醬油の如く隨て糸に光澤なし

一此豫防法は前に記載の如く蠶尻を數度去り空氣の流通を能く加減し蠶も少しも苦しみなき様注意なしければ良繭を得且糸の光澤宜なきなり

(廿三) 獅子蠶眠起の事

蠶掃立てより六七日目に初眠に趣く時ハ色少しく白く頭ふとくなる是獅子の居休に趣く形故此時早く培席すべし明日午前七時頃培席せんと思はば前日夜桑與へる時粟糠を薄く平にふり桑巾一分に長さ一寸五分にきざみて與へべし三度目の桑喰盡さばうち本莖壹枚を貳枚に培席べしひろけてのちは桑をば壹分に長さ壹寸に刻初眠始れば桑刻み長を壹度與る毎に短くきざみ追々薄與へ養度烈しく與へ眠り蠶を桑にて埋めざる様桑の不足なき様注意すべし眠し蠶桑不足なるは眠圖乙以下の如くなる惡き眠をなす故能念入責桑すべし壹枚の莖に起蠶一二頭見ゆれば桑を止べし桑止て若し眠らざる蠶ある時ハ箸にて拾ひとるべし

中桑改良の事

舊習は蠶七分起の節中桑を與へ(是を中ざし)てより半日或は一日過て桑附をなせしる此中桑を段々試験せし處蠶眠中は我が病氣同様にして一日桑止りしは我れ十日以上も食せざる同理にして我れ十日以上食せず居りし時俄に強き飯を一度喰して一日過て喰する節を身躰いかなるや大いに害するなり故に最初粥食にて腹中をたきない然る後に弱かなる飯を喰し十分力つきし時強き飯を喰する時を追々本復すべし依て蠶も食す



る同理も同一ツに思ふべし中桑壹度に與へべき桑を極こまかに刻み庖丁にてよくたゞき壹分四方目の篩にてふるい與へるなり此こまかに割細みつなる故微塵桑と名付是すなわち粥食同様の桑にして最初桑附まへに用ゆる也

但し微塵に刻む桑は極弱かなるにすべし

先蠶八分起に微塵一度與へ九分起に一度十分起に一度都合三度の微塵にて白粉をふきし如に見へ体のしわ能くのひしハ微塵適度とするなり微塵不十分なる時は少しく赤色をねびしわ十分のひざるなり此微塵の養量は一度に蕈壹枚へ最初三合二度目に四合三度目に五合壹割つゝ増し與べし微塵三度與へ次に桑附る也此桑附には奥桑を採り露を乾し置巾壹寸五厘に長さ貳寸に刻蠶の上へ粟糠を薄く平らにふり其上へ網をかけ直に拵へたる桑を與へ又喰あつくさざるうち與へ重々三度與へ移すべき蕈の上へ粟糠をふり此上へ網のまゝ採り置べし蠶尻去りて後は桑巾同じ長さ壹寸五分に刻與へるなり與手を桑附より二日與へ三日目より中手を二日與へ又三日目より早稻を與へるなり居尻は一日置に去るべし

但桑付翌日より四日の間毎日桑巾五厘づゝひろげきざみ與へるなり

(廿四) 鷹蠶眠起の事

蠶已に眠り前には頭少しく大きくなり全身ふとみじかに見ゆる蠶十分の一見へければ早く眠座にすべし本蕈壹枚を貳枚に培席すべし眠座になす毎に糲糠をまきものゝ上へふり其上にて休ませる時て蠶尻かむるゝ事なし眠り始めければ桑巾三分五厘長さ壹寸に刻壹度與へる毎に桑をこまかに刻みはけしく與へ壹枚の蕈に起蠶一ツ二ツ見へければ桑を止め此時眠らざる蠶若しあら

ば箸にて拾採るべし

但し蠶眠につく時の桑をばらくふりなから與へるゆへふり桑といふ又養度をはけしく與へる故責桑とも云休む時の桑故休み桑ともいふなり

前の如く蠶八分起より微塵與る也鷹の微塵ハ一分五厘四方目の篩にてふるい養量は最初蕤壹枚へ三合五勺次に四合五勺三度目に五合五勺都合三度與へ桑附る也桑付の割み方は巾二分に長さ貳寸なり桑附仕方は前の如し居尻は一日置にとりかへべし蠶尻を手にてとるにも又網にてとるにせよ蠶尻をかへる前に粗糠をふり桑を長く刻み三度與へてとるべし桑を長く刻ければ網より蠶をちる事なし又々手にてとるにもとり安きなり蠶尻かへる毎に端なる蠶を中に入中なる蠶を端に出すべし

但桑付翌日より四日の間毎日五厘づゝひるけ刻むべし

(廿五) 船蠶寢起の事

船座は鷹蕤壹枚を貳枚三分に培席けべし桑の方刻は巾四分に長さえ追々眠るに隨ひ短かく割むなり

桑笠改良の事

一桑笠改良せし原因は昔より氣候追々暖氣になりし故責桑にて蠶を埋め多れば眠中に蠶尻かむるゝ事あり暑き時は大いに堪へかねる蠶尻壹度かむれし事あり繭は糸に製し光澤よぬしからず喰せざる桑を多量と與へるは損失なり責桑にて埋めざる様に注意なす時は眠座かむるゝ事なし暑さしのき安き也責桑割方ハ先蠶十頭養ふとす一頭眠れば桑の長さ九分巾は蠶の小に應ず二頭眠に八分三頭眠に七分四頭眠に六分五頭眠に五分六頭眠に四分七頭眠に三分八頭眠に二分九頭眠に一分十頭眠りければ桑止めべし養量かくのこゝろ一割ツ、減し與へる



歌に

船休み雨濕よけて桑せめよ暑氣に火たくなはづせ戸障子  
 船の桑附も前の如く八分起より微塵與へ始めるなり微塵割方は  
 貳分四方目の篩にてふるい安きよふ刻むべし微塵の分量は莖壹  
 枚へ最初四合次に五合三度目に六合桑附の刻方は巾貳分五厘長  
 さはきりはなし外の仕方は前の如し

但し船の桑附翌日より二日の間桑巾壹分宛ひろけて刻み與へ  
 如斯刻ければ桑付より三日目にハ四分五厘となる四日目には  
 五厘増し五分に刻是を庭眠迄與ふべし

(廿五) 庭蠶眠起の事

庭座は船莖壹枚を貳枚半に培席べしふり桑は前の如くに與へべ  
 し此眠りは前の眠りより時間ながくかゝる故五分通り眠りたる

處へ粗糠を薄く平らにふるべし粗糠をふらざる時は蠶尻かむる  
 事有るべし庭の桑付も前の如く蠶八分起より微塵與へ始める  
 なり微塵刻方は二分五厘四方目の篩にてふるお莖壹枚へ最初五  
 合次に六合三度目に七合なり桑付の刻方は巾三分五厘長さえ切  
 はなし是を三度與て居尻を去り與へたる桑の喰残りのあるうち  
 又與へ如斯養ない居裏は毎日一度宛取去るべし居尻をかゑる數  
 度席少し宛ひろげ出すべし桑付翌日より桑巾壹分宛増刻むべし  
 但し微塵を八分起より與へ始めるは寒暖適度以下の氣候なり  
 適度より追々度數進むと思はゞ七分起より微塵與へ始むべし  
 南陽氣の節は眠し蠶思の外早く起る故由斷す可ら也又夜中俄  
 に南風吹起る事有り此時は晝と同様に養ふべし且桑付の時刻  
 か午後八時過に桑付の場合に至る事有り此時は二度與へて翌  
 朝迄置き翌朝壹番さきに與へべし



(廿七) 熟蠶適度を見る事

庭蠶の桑附より凡六日半或は七日なめきは八日目に入るなり上る前日より蠶の全身少しく細くなり蠶席も随て薄くなり且蠶へ少しく赤色を帯蠶皆左右へ輪形をつくるは繭の中に入れて全身自由自在になすために輪形を造るなり蠶の喉より腹へかけて透始め首節二節透尻に蠶糞四粒位あるを一ツ拾ひにして簇へ登せべし是は糸繭の適度なり種繭よなすには蠶糞二粒位を適度とすべし蠶糞出し終りければ繭を造り始めるなり蠶糞出し終りて簇に登せければ好場處をたづねる猶豫なき故ひくき所へ造或は不充分の場處へも造り中には繭を造りはじめるとまてにむだ糸を吐故繭を造りて皮薄の繭を造るなり能適度に見はづさぬ様に注意すべし糸繭は種繭より少し若き蠶を簇に登せ繭を造らずれば糸に製して光澤よろし且屑糸少し透過ぎければ糸に製して光澤悪

破風を簇る圖

第卅六圖



裏

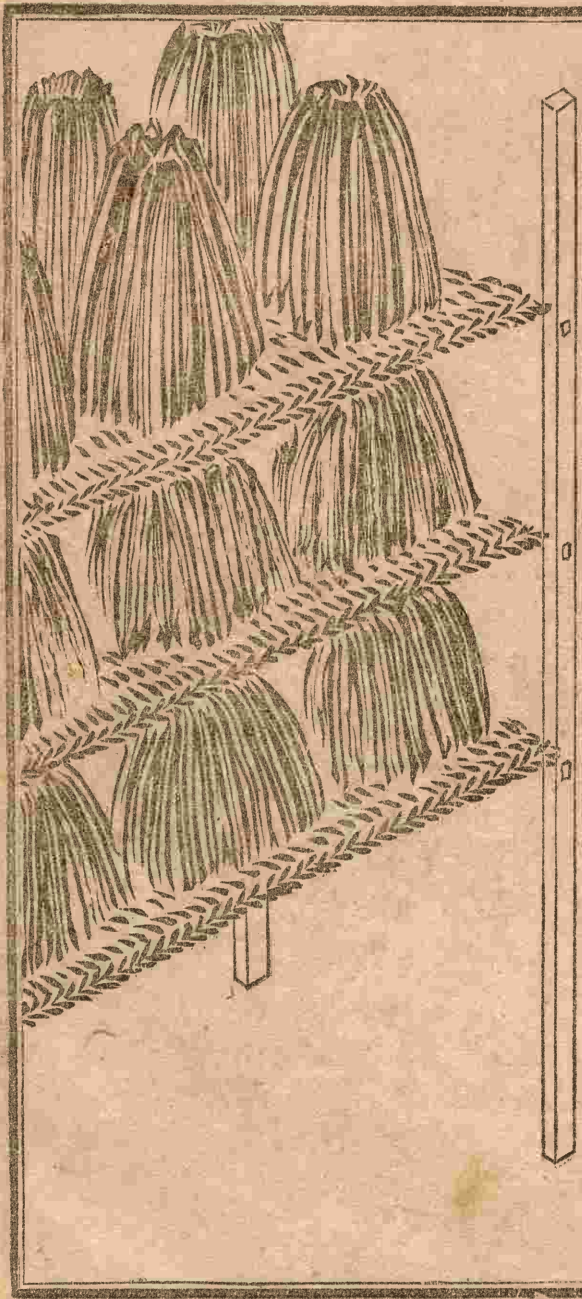


面



細木の枝の繁たるを寒中刈採り置き養蠶前小餘暇を見て圖の如く扱へるあり





第四十八圖

此揚方ハぼつちやといやうに仕方に  
 一振半位づ結へて圖の如くに拵へ蚕を  
 頭位づ丸く置きほつち一ツつ拵あくなり



第四十七圖

此揚方ハ一参やとい武ハあかおせ  
 又ハ破風やといと云ふ揚方は  
 極手早の揚方此揚方ハ毛蚕にハ  
 毛蚕の時より注意しと能く  
 蚕を拵へ置き揚る適度  
 至りければかど端より  
 ふは捨ひ第一圖の  
 如く二筋あ  
 らへるなり

第三の圖の如く機  
 かや第二の圖の如く破風  
 口へ葉を二つ折アあ  
 ておくなり



此批簇仕用方ハ揚り香を一つ  
宛拾ひて簇小入るあり

第九圖



敷して屑糸多し種に採る繭は糸繭より少しくよく透せるは繭に  
早く化させる故なり

簇まきに用ゆる物は藁粟わらあわ壳大豆壳からだい細かき木の枝を圖の如く造り用ゆ  
べし菜種壳は濕氣を含有故拵たくらによるしからず簇の拵方たくらかたは各國に  
於て種々拵方あれども第一目途となすは蠶の蟄すかき安くまた繭の  
乾きよき様蠶の尿繭にかゝらざる様注意して拵へる事肝要なり  
簇に用る諸品はよく乾し用ゆべし

(廿八) 蠶かいこを簇まきに登のぼせて繭造り終る迄の注意の事

蠶かいこ兒の繭をかけ居る間は尤も空氣の流通よくすべし蟄中すかちゆうと雖ど  
も發育の時とれなじ温度かんどが低ければ蟄すかくもまづかなり又温度が  
高ければ自然早く蟄すかく温度を保たもつれば蟄すかたりまた休やすみ居る  
故一定せず繭造終るまで氣候を適度に加減かへんすべし六十四度の  
温度にては四日間にて漸く一ツの繭を造り上る六十度以下にて



ハ逆も糸を吐く氣力なくなつたゞ動かす居る而已七十度なれば四十  
 八時間八十度にては二十四時間にて蟄をわゐる八十度の温度にて  
 は餘り早く蟄ゆへ一方は厚く一方ハ薄くといふ様な繭出來る良  
 繭を求むるには七十四五の温度にてを蟄始めより終るまで保續  
 すべし蟄中は火力を少も用いざる者あり又戸障子を密閉して室  
 を暗くなせば巢に早く入るとして空氣の流通を妨くるは甚だよろし  
 からざる蟄中といへども定度以下なれば火力をもつて適度になす  
 べしまた天然の氣候にて適度より度数進む時はすゝむにしたが  
 ゐ戸障子を開き空氣流通せしむべし蟄中は別して室内をよく乾  
 く様に注意すべし能く室をかわけせば繭に光澤あり糸も製すに  
 採り安き且糸の光澤最もよろしきなり簇の上に蠶あつまりりて蟄  
 處に苦む蠶あればまし席すべし是をせざれば席不足故席をさる  
 し歩む内ついに老蠶になりてよき繭を結ぶ事能はず故に巢に入  
 終る迄は度々見まはりて注意なすべし

(廿九) 繭のき落して扱方の事

蠶巢に入終りてより四日目には簇を採りはなして風にあてべし  
 六日目にき落し上の綿を能くとりて上繭薄まゆ玉繭三種に撰  
 分器へ一ツならべにして日南に干つけ中の蛹をいたぬ蛾蛆の出  
 ざる様にすべし蠶業を専おこのふ地方にては晴雨にゐゝわらず  
 焙爐へ鍋か釜へ水をふきこほれぬくらゐ入てかけ置炭火をおこ  
 し湯火にて繭を煎し蛹をいたぬ日陰へ廣げて能く乾すなり日南  
 にて干つけたるはかたひして少く糸に採りあしき且糸の光澤も  
 よろしからず湯火にて乾かしたるは糸に製して光澤あり且糸に  
 採り安きなり油斷して蛾蛆出す者まゝあり糸場にて蛾蛆出さけ  
 れば糸に製す事能は眞綿に製す而已まては莫大の損失成べし能  
 く注意すべき事なり



第五圖



右同左を  
風を入る圖

第六圖



右同左を  
造らせたる圖



破風簾やぶかざりを束たばたる図



第五十二圖

枕まくらを束たばたる図



第五十三圖



(卅) 蠶卵産せ方の事

蠶種をとるには繭を一ツならべにきてとくべし日數夏蠶ハ十日餘春蠶は十七八日目にして午前八時に繭の豎の方に潤りいで糸筋を喰破ることなくして廻りへひろけて口をあけ中より蛾いづるなり雄は羽を振ふて雌をたつねまはり雌に俯して靜なり蛾のいづる前日繭に紙を覆置べし紙の穴より蛭這上る雌を拾ひ分べし拾ひ分ざる時は雄が先に出雌をたつねまはる處へ雌が這上りたるばかりにて性氣滿ざらうち交合なすはよろしからず故に雄と雌を拾ひ分て別に一時間置て互の性氣十分滿せて交合なすべし交合なしたるを午後四時頃迄置ければ雌蛾へ十分實入尻を高くなす此時交合なしたるを引離して雄ハ捨雌は尿をさせて紙にのせ卵を産しめ種となす蛾一ツにて卵の數凡二百四五十粒うむなり

よき種を作るには蛾を紙にのせて卵をうましむる時雌蛾を紙にのせて紙の兩隅をとりぱたくとえたくなりかくの如くなしければ蛾尿をおす此時紙によくつきて居るはよきたね蛾なりはたく時落る蛾あれば分べし落るは弱くして性あしきゆへ別のかみへ分て産せべし落ざる蛾はよき卵を産よきたね蛾にても一盛産は休む休みければとりて別の紙へうますべし最初に産しは上種なり次に産しはよろしからず

(卅一) 蛾の卵を産付たての扱方の事

蛾の卵を産つけたばかりの時は色もなさず無色の者にて内の物もうすぐして且外殻もやわらかなる故此時の取扱いは餘程注意いたすべし忽に取扱時ハ卵を損て虚弱になす故卵の出來上りたるときはなるべく平らかなる處を撰み靜かに其上へ置べしかくのことくして四五日経れば漸々色を爲しまた卵中の水分も



蛾繭を穿ち  
方に出入とせ  
る圖

第五十四圖

雄蛾



雌蛾



蛾出たる圖



無病の蛹  
にて蛾  
化せ  
る  
蛾を出せし圖



蛹の小黒點あるハ  
蛾不化せし蛆とあ  
るあり

蛹出たる繭の圖

第五十五圖



蛹



雄雌二蛾  
交合せる  
圖

雄雌  
交合  
する  
圖



二つを箱へ納を一つあふへに  
 置き圖のこゝへ、蛾のまゝあが  
 くる位の火を紙へつけ、ま  
 まのよへ、煙あがきをたうり  
 蛾のまゝをたうり、交合  
 せざらうち一人の娘多  
 雄婚を拾ひ又一人の娘  
 ハ雄婚の這上るを拾  
 ひ雄婚を拾ひ、ま  
 おまゝに紙をたうり、交  
 合させらるり

第五十六圖



一人ハ雄婚乃  
 交合を離  
 て紙へ雄婚  
 を拾ひ、ま  
 能、振  
 て紙を  
 ませる  
 又一人ハ  
 雄婚を  
 多紙に  
 載せ、  
 卵を産せる  
 席を造る圖

第五十七圖





雌蛾を原紙へ載せ  
卵種を産せるの圖



第五十八圖

蒸發し外殻も固くなる是より適宜の處へつりとくべし

(卅三) 蠶卵種高下の事

手製の繭にて蠶卵を製造して養ふハ利得にあらず桑を多量に與へて其効少なと手掃の蠶卵を購求なすには自國より寒き國より求めたる蠶卵は飼易くかつ暖國の製種より桑少なし暖國の製種は寒國の製種より養量原紙壹枚に付桑把五六束多し糸に製して其量は同一なれども桑量の勝劣あるべし桑へ肥を餘り多量に用ひて製したる蠶卵はよろしからず

(卅三) 明治十八年第四月養蠶検査表

原紙六枚

内

信州白種二枚上州白種二枚野州白種二枚

石井永次郎

	三十日			二十九日				二十八日		
	半晴			快晴				快晴		
	六十六度 六十七度 六十九度			六十六度 六十八度 七十度				五十九度半 六十八度 六十七度		
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	一番 二番
七度	七度	七度	七度	七度	七度	七度	七度	七度	七度	七度
同	二番口居裏去ル	同	同	壹番口居裏去ル	野二番正午一時半 ニ桑葉與居尻去ル	桑葉與ハ居尻去ル	上二番正午二番ニ	信二番午後一時ヨ リ桑葉與居尻去ル	野一番午前十一時 ヨリ桑葉與ハ居尻 去ル	

	二十七日			二十六日		二十日	日誌
	夕朝ヨリ晴曇			半晴		快晴	晴雨
	六十六度 六十七度 六十八度			六十七度 六十七度 七十七度		六十七度 六十八度 六十七度	晝寒 夕暖
同	同	全	全	同	同	同	一番 二番
六度	七度	六度	七度	三度	六度	三度	三度
ル	葉ニウツス居尻去	上二番右同時ニ桑	ヨリ桑葉與ハ居尻 去ル	信一番正午十二時 ヨリ桑葉與ハ居尻 去ル	野二番正午二番ニ 後一時ニハキ立ル	上二番正午二番ニ 後一時ニハキ立ル	野二番正午二番ニ 後一時ニハキ立ル

人員  
桑量















	三十日			二十日				二十日												
	午後二時ヨ リ雷雨夕ニ 晴			晴				晴												
	八八七 十三十六二 度度度			七八七 十二十一度 度度半				七八七 十八十一度 度度度												
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
九度	八度	九度	八度	十度	九度	十度	九度	十度	八度	十度	八度	十度	八度	十度	八度	十度	八度	十度	八度	十度
トル	一番二番トモ居尻	同	同	同	同	同	同	トル	一番二番トモ居裏ト	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

	二十日			二十日				二十日												
	午前七時ヨ リ晴			雨				雨												
	八八七 十七十四度 度度度			七七六 十二十四六度 度度度				七七六 十三十七度 度度度												
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一度	七度	三度	一度	七度	三度	一度	七度	三度	一度	七度	三度	一度	七度	三度	一度	七度	三度	一度	七度	三度
同	一番居尻トル	同	同	二番四眠坐莖二十 枚ニヒロク	同	同	同	二番四眠坐莖三十 枚ニヒロク	同	同	同	同	二番四眠坐莖二十 枚ニヒロク	同	同	同	同	同	同	同

信州白種原紙貳枚

合計四十三日	六日	五日	四日	三日	
	晴	午後三時ヨ リハレル	終日雨	午前十時ヨ リ雨フル	
	七十七度 七十八度 七十二度	七十七度 七十七度 七十六度	七十七度 七十七度 七十四度	七十七度 七十七度 七十五度	
合計二百七十三度					同 同 五度
	野二番簇ヲハナス	野一番簇ヲハナス	信一番簇ヲハナス 上二番簇ヲハナス	野二番午後三時ニ 揚ケ終ル	

	二日		六月一日			三十日	
	晴		晴			晴	
	七十八度 七十九度	七十三度 七十三度	七十八度 七十四度			七十九度 七十六度	
同 同	同 同	二番 一番	同 同	同 同	同 同	同 同	同 同
四度	四度	八度 三度	八度 三度	八度 八度	八度 八度	八度 九度	八度
上二番午後一時ヨ リ揚ル	信二番午後一時ニ 揚ル	野一番午前十一時 ニ揚ル	上一番午前十時ニ 揚ル	信一番午前十一時 三十分揚ル	同	同	同



繭貳石八斗九升七合

内上繭二石六斗九升

玉繭 壹斗貳升五合

中繭 八升二合

但玉繭中繭系ニ製サス

上繭生糸三貫四百七拾六匁

此掛糸百六十八匁

上州白種貳枚

繭貳石九斗八升三合

内上繭二石七斗〇九合

玉繭 壹斗八升

中繭 壹斗八升四合

但シ此二品系ニ製サス

上繭生糸二貫六百七拾五匁

此掛糸三百六拾貳匁

野州白種原紙貳枚

繭二石九斗六升四合

内上繭二石六斗三升八合

玉繭 二斗二升

中繭 壹斗〇八合

但シ此二品系ニ製サス

上繭生糸二貫二百九拾壹匁

此桂糸四百拾五匁

上繭總計

八石〇三升七合

玉繭總計

五斗二升五合

中繭總計

三斗七升四合

上繭生系計

八貫四百四拾貳匁

桂糸總計

九百四拾五匁

(卅四) 夏蠶養育方の事

夏蠶卵發生保護方はなるべく空氣流通能くして清涼しき室を撰  
 み室の真中へ保護棚を置中階へ卵を上に向置天氣の節は戸障子  
 を不殘ハづし少しも空氣の淹滯なきよふ注意して發生期を待べ  
 し發生催ほす頃乾き過しければ卵面へ桑葉をのせて濕氣を與へ  
 べし發生始めければ奥の桑葉を摘取り來るべし畧五分位發生な  
 しければ桑を煙草の荒刻の如く割み種の上へじかに與へ桑へ這  
 上りければ直に先の細き箸にてしづかにいさみとるべし席は蠶

尻頭あたをらざる様ようすく平に置べし春蠶の養育中より温度高  
 き故夏蠶ハ春蠶より日數十日餘も早く上る故夜はたそくまで養  
 い朝は早く起て桑を與へべし夏蠶の養育中は非常に乾乾過る故  
 桑を與る數度へ少しつゝ露を吹き與へべし雨天のときは少し露  
 氣なき桑を與へ微塵桑付に用ゆる桑は奥桑を摘採り與へるなり  
 桑葉摘採るに日中ハ採り入べからば朝夕採り入て風にあて置時  
 はたちまち乾きくろくなる故空氣の入らざる箱の中へ水をふき  
 其中へ桑葉を貯へ置べし夏蠶の臥起は一日の中よもなす故油斷  
 なく養ふべし少しの油斷といへとも蠶に害の顯るは實は大ぬな  
 り能く注意して養ふ事肝要なり桑の刻方ハ左の説明と圖の如く  
 寒暖に應じ養ふ度數居裏の採り去り四度の寐起の培席等は檢査  
 表を見るべし

東京府北豊島郡根葉村



明治二十一年七月 (卅五) 夏蠶七千頭試驗表

七日	六日	七月五日	日誌
全	全	快晴	晴雨
七 十 九	七 十 六	七 十 八	午前六時 正午十二時 午後六時 全日十時
七 十 三 度	七 十 六 度	七 十 七 度	寒暖
午前四度	午後七度	午前三度	養度數
午前十一時ニ獅子 眠座ニナス	居裏ヲトル	午前十時掃落シ	眠起
二百九十匁	二百八十二匁	二百〇七匁	桑分量

十一日	十日	九日	八日
朝クモリ七時 ヨリ細雨	曇	朝曇十時ヨリ ハレル正午十 二時ヨリ南風 少シツヨシ	全
七 十 三 度	七 十 四 度	七 十 三 度	七 十 四 度
午後七度	午前五度	午後八度	午前六度
午後六時鷹座ニナ ス	午後一時ニ居尻ヲ トル	午後二時ニ居尻ヲ トル	午前十一時ニ獅子 眠座ニナス
五百目	三百六十六匁	三百四十二匁	二百七十匁

十二日	朝時雨八時三十分頃ヨリ晴	七十二度	午前	午前十時ニ桑止メ	四百七十五匁
十三日	快晴	七十七度	午後	午後二時ヨリミシヨチ始メ六時スキヨリ桑付	七百五十五匁
十四日	全	七十四度	午前	午前休ミ裏トル	七百五十五匁
十五日	全	七十三度	午後	午前六時ニ居尻ヲトル	壹貫五百二十匁
十六日	朝時正午十二時半コロヨリ雷鳴五	七十九度	午前	午前九時ニ桑止メ	壹貫五百二十匁

十七日	朝晴午前十一時ヨリクモリ	七十七度	午後	午後二時ヨリミジシヲ與ヘ五時二十分ヨリクハツケ	二貫三百六十匁
十八日	晴	七十八度	午後	午前五時ニ休ミ裏トル	三貫〇五十匁
十九日	半晴	七十三度	午前	午前居裏ヲトル	
二十日	全	七十四度	午後	午前六時庭座ニナス	貳貫七百九十五匁



廿一日	廿二日	廿三日	廿四日	廿五日
快晴	アサクモリ午 前十一時ヨリ 晴南風少シ吹 ク	晴南風強シ	午前晴午後五 時ヨリ雷鳴ア リ	午前晴午後一 時ヨリ雷鳴大 雨
七十三度	七十四度	七十六度	七十七度	七十八度
七十七度半	七十四度	七十八度	八十三度	八十六度
午前 三 度	午後 八 度	午前 四 度	午後 七 度	午前 四 度
午前七時ヨリミジ ン與へ始メル	午後十二時ニ桑付午 後三時半ニ休ミ裏 トル	午前六時ニ居裏ナ トル	午後四時ニ居裏ナ トル	午後六時ニ居裏ナ トル
五貫百目	七貫二百目	八貫五百十目		

二十七日	二十八日	二十九日	
全	全	半曇	
七十九度	七十五度	七十四度	七十六度
七十九度	七十五度	七十四度	七十六度
午前 三 度			午後 六 度
午前六時ヨリ熱 拾ヒ始メ十時迄ニ 不殘篋ニ入ル	蠶悉繭ニ入		午後三時ニ居裏ナ トル
五貫目			十一貫五百目

三十日	快晴	七十五度	午前十時ニ後三時ニハナシキトル
合計		七十八度	
二十六日		七十六度	
合計	二百卅九度		
			合計六十五貫九百卅二匁

右蠶七千頭繭數

玉繭 二百六十四粒

但し蠶二頭つゝ入て造

屑繭 四十二粒

蠶損傷 三十二頭

総引精良繭

六千三百八十粒

(卅六) 秋蠶異名并四化生の事

相模武藏其他暖國にて秋蠶と唱ふるは寒國の夏蠶なり又信州の風穴へ春養ふべき蠶卵を貯へ置て秋分採出して秋蠶と名附養ふもあり春蠶を秋分養ふハ六ヶ敷事なれども能く養へば春に劣らざる良品を得るなり四化生蠶は四度發生して四度繭を結ぶなり春夏秋迄は飼安きけれども冬分に至りては追々生長なすにしたがい寒さに趣故發育と氣候とは行違になる故火力をもつて適度の温度を保續すべし温度を加減せざれば發育を妨るゆへ性悪すべし

(卅七) 風穴に貯へ置たる春蠶卵を秋分養育の事

信州に風穴と云ふ穴あり此穴は暑中でも華氏の五十度以上上る事なし此穴へ寒明ると同時に貯へ置時は夏に至りても發生期を催さざるなり風穴へ貯へ置たる蠶卵を嚴暑中採り出して發生保護なすには空氣の流通よき室にてなるべく日光をうけざる清



涼しき處を撰み室の真中へ保護柵を置此柵の中階へのせ置天氣の節は午前十一時に午後二時と二回蠶卵紙の裏より刷毛にて水とひき水分を與ふべし水分を與へざる時は蠶躰の形を造るに苦しむまた發生なると雖とも後に虛弱になる故能く注意して保護なすべし不殘發生なす迄なくべからず原紙壹枚を三度に掃落すべし三分の一發生なしければ柔なる桑葉を摘採りて夏蠶の掃立へ與へたる如くにきざみ種の上へじかに與へ蠶桑葉へはいあかりければ直に先の細き箸にてやわらかにはきみ敷物の上へ移すべし敷物はなるべく薄薦か糸立其他薄きしきものゝ上にて養ふべし居席は蠶の尻頭あたらざるよふむらなく平らかに置蠶に適宜の桑を撰み與へ喰終ると同時に又與へ少し蠶の口の休みなき様に手厚注意して養育すべし天氣の節は午前十時より午後四時までは桑へうす露をふき與へるなり又雨天の節は桑に露を能く

乾かし與へべし雷雨ふり來る時は急き戸を閉べし養度數居裏の除去等は検査表を見るべし

東京府北豊島郡根葉村  
第九百四十六番地

明治二十一年八月 石井 與右衛門

(卅八) 風穴へ貯置たる春蠶卵試験表

日誌	時雨	寒	暖	養度數	手入	蠶飼箱數
八月十日	午前十時迄雨 晴十一時ヨリ	午前 六時七十五度 正午十二時七十八度 午後六時 七十六度	全十時 七十五度	一番六度	蠶種用紙壹枚五分 養生午前十時ニ掃 ナトス	箱壹枚
十一日	晴	全 七十九度 全 七十七度 全 七十六度	全 七十四度 全 七十五度	一番十三度	二番午前九時ニ掃 ナトス	箱壹枚
				二番六度	一番居裏ナトル	





二十五日	二十四日	二十三日	二十二日	二十一日
午前十時ヨリ アフリハジ メ夜入テ大雨	全	全	全	全
全	全	全	全	全
七十九度	八十一度	八十二度	七十四度	七十三度
一番九度	二番十一度	一番十度	一番 ミジン一度	一番 フリ桑七度
一番午後四時三十分 四眠座ニナス	二番居裏ヲトル	一番居裏ヲトル	一番休裏ヲトル	一番午前十一時ニ 桑トメル午後七時 半カミジン
箱十七枚				箱八枚

二十九日	二十八日	二十七日	二十六日	二十五日
全	全	快晴	午後二時ヨリ ハレル	午前十時ヨリ アフリハジ メ夜入テ大雨
全	全	全	全	全
八十二度	八十五度	七十七度	七十九度	七十五度
一番十度	一番十一度	二番 フリ桑 十二度	一番 フリ桑 十二度	一番九度
午前壹度午後壹度 居裏トル	一番午後居裏トル	二番午後六時四十分 ニ桑トメル	一番午後六時半ニ 桑トメル	一番午後四時三十分 四眠座ニナス
箱十八枚			箱十七枚	





原紙壹枚ノ精良繭數

壹石四斗三升九合

玉繭 壹斗壹升七合

屑繭 六升三合

右試験せし如く温度に隨て養育をなし發育の妨なき様注意なす時は世に遍く違作あるべからざ

(卅九) 生糸製造の事

生糸製造方は各國に於て異同あり其地の宜しきに隨ふべし圖に顯はしたるは坐繰採りに箱採りといふ二種なり箱採りと云ふ器械にて製したる糸名は提糸と稱すなり坐繰といふ器械にて製したる糸名は志間多糸と唱へるなり此志間多糸と名付たるは娘の髪しまだの如くよ拵へる故しまだ糸と名付唱なり此坐繰器械にて採方は繭壹升位鍋の湯の煮へあかりたる處へ繭を入平杓子に

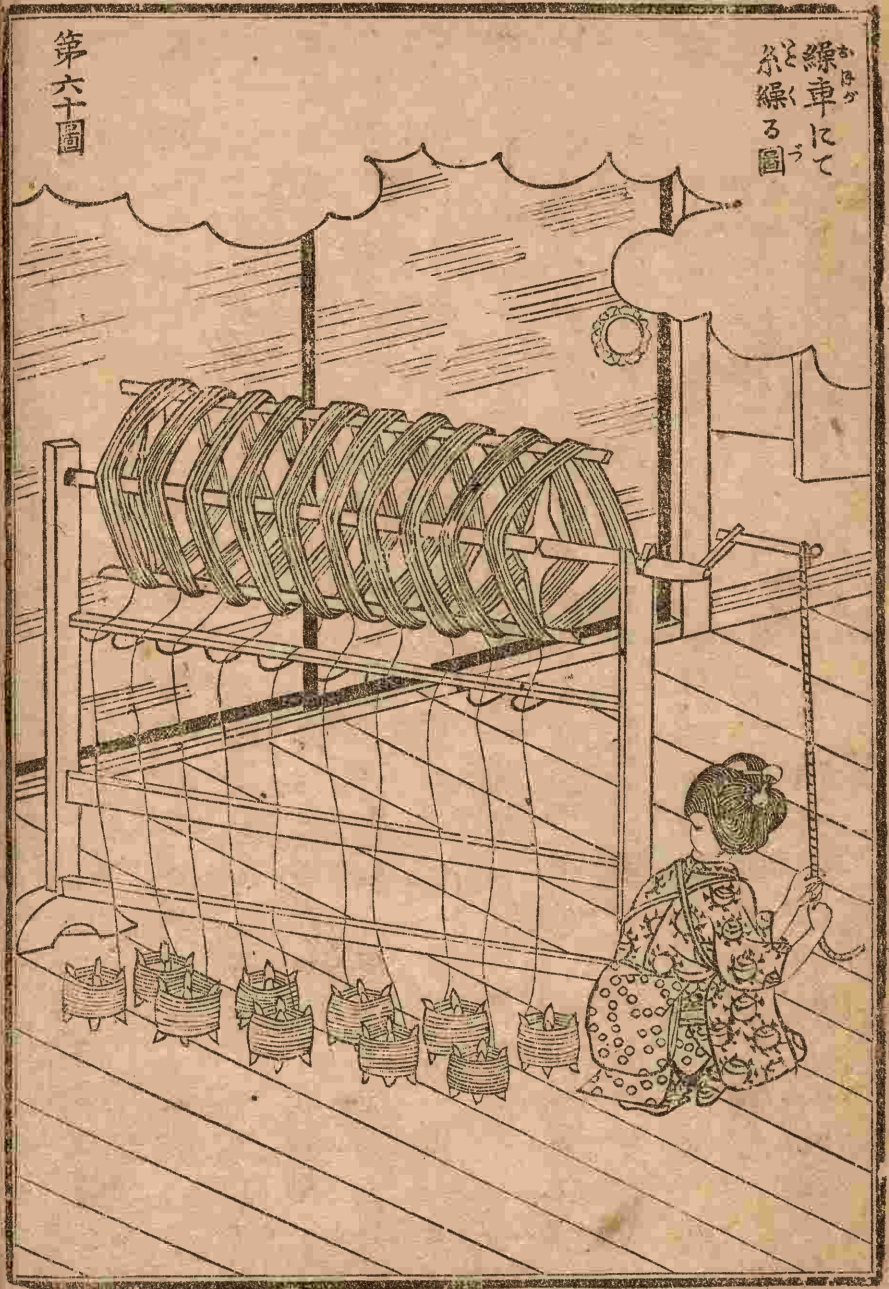
さんくう  
をことん  
二様の糸  
とる圖



策  
五九圖



繅車にて  
糸を繰る圖



第六十圖

て煮あがる數度上なる繭を中へ入平均に煮へる様押付べし加減  
能く煮たる時箸をもつてかきまぜ糸口を悉くとり半分斗傍に置  
能き程もち圖の娘の仕方の様に箸さきへ糸口をはさみ屑糸を延  
ばしよき糸口を鍋のりうづへからみ置是を適宜にとりつけ圖の  
如くに左手の指にて糸へよりをかけるなり箱探りと云器械にて  
糸を製すえ圖の如く器械を左へ置今圖の如く最初屑糸を右なる  
杵へ巻つけしめて後上糸をとるなり手ふりの下なる木へ女の  
髪を毛を三十本斗わに結つけ其輪へ糸をとふし手ふりへる杵  
へ付左手にて杵をまはし繭煮たては二ツ宛たへぬ様注意し右手  
にて糸口を追々と添へべし一升煮たる繭の已に終りきはわ糸  
細くなる故糸口を増し三ツにし又次には四ツになし是より多く  
つくへからず最初二ツ次に三ツ終りきは四ツ此位に製したる提  
糸は最も上等なり提糸しました糸此二種小杵より大杵へ繰返すに



第十六圖

真綿  
糸小  
干たろ  
不きみ  
圖

むろえ  
庭の上へ  
真綿を  
干たろ  
圖



真綿  
かける  
圖



は大棒へ移す前へに小棒を水に侵し置能くしめず也提糸を大棒へ繰返すにハ坐繰器械にて能く水をきりて大棒へうつすなり此水をきるには坐繰へ小棒を付けて加急よまはず時は水能くきれるなりしまた糸ハしめしたる儘大棒へ繰返すべし此大棒へ繰返す時糸を千鳥に棒へまきつく様注意すべし千鳥に棒へまきつかざれば絹を織る時繰返すに大いに困難す何國へ糸を賣ても糸平にて能く繰返されよば糸を遣者皆喜こふ糸製造人ハ譽となり製造人の譽一國中の名譽となるべし海外へ輸出なす糸ハ猶更極精良の品物を製して輸出なす時は大皇國の生糸を西洋諸國にて争ひ求めんと欲るなり横濱に於て貿易の始めに粗惡の品物を製して輸出なしたる故大皇國の名譽を大いに害せしなり上下の勉勵に依て當時え汚名を洒き名譽を高くかかげるなり名譽を汚すは一時洒ぐは數年奮勵せざれば名譽を赫やかせ難し依て粗惡に流れざる様注意爲す事肝要なり

(四十) 眞綿かけ方の事

眞綿製造を業となすには金繭蠶と稱する蠶を養ふべし此金繭蠶と稱ふる蠶は養法至極易し此蠶眠起に群聚しまた繭を結ぶせつは蠶十頭乃至十六七頭より二十頭位あつまりて一ツの繭を結ぶなり此繭は絲にとりかたし綿繭而已に養い眞綿を製すには至極宜しきものなり又上繭のうちより絲に採りおたき惡しき繭を撰出し上灰汁にて能く煮夫より水に漬さらし灰汁を出し圖の如く指にて引延し引盤に掛るなり掛たるを清水に漬さらして引延し圖の如く莖をききて干か繩を張りてつり干させるなり

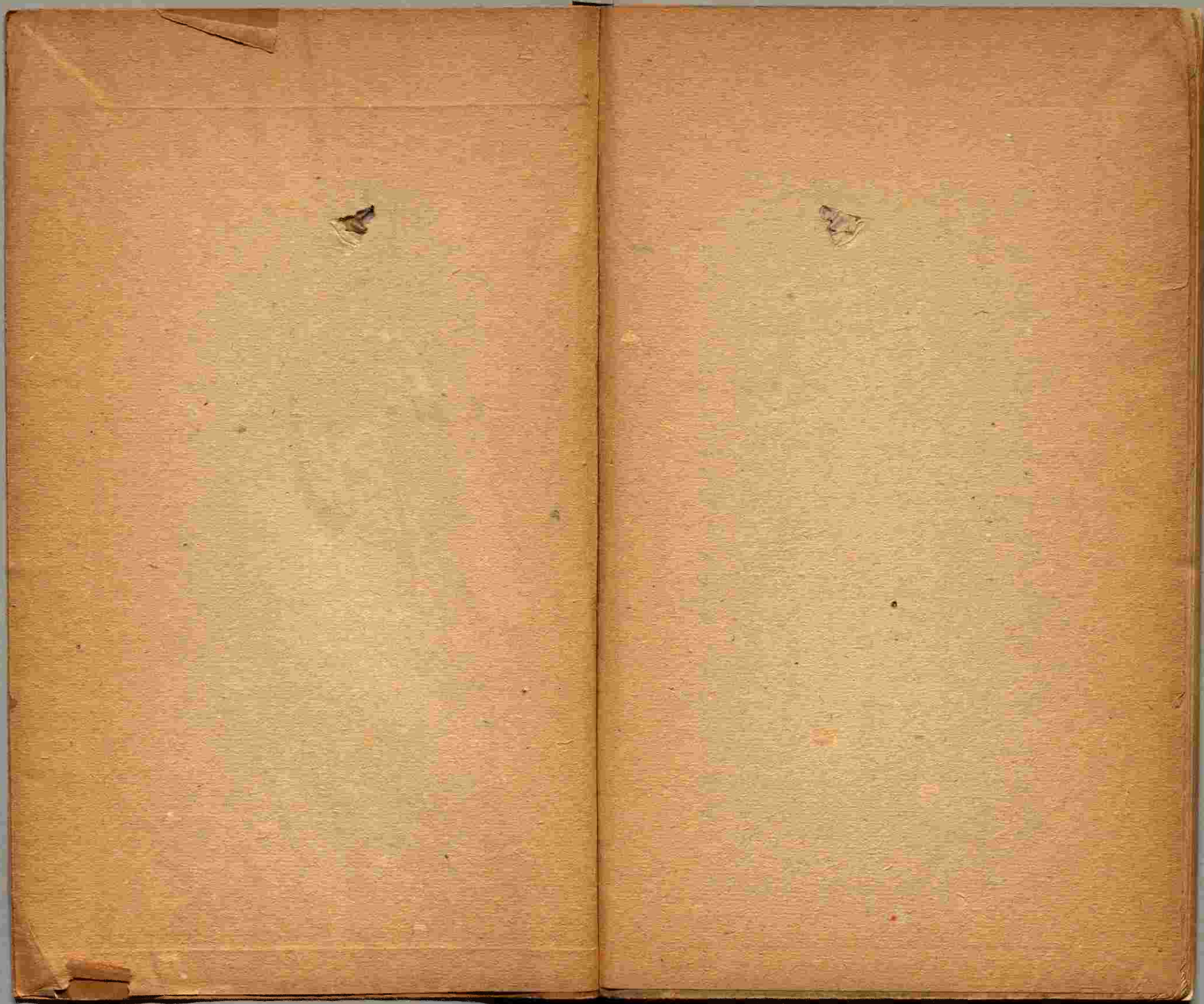
(四十一) 蠶性質健不健の事

蠶の性質健固なるは野蠶なり野蠶の健固なるは常に新鮮の空氣而已吸ゆへ健固になりて風雨又は日光に照され種々艱難なすと



雖ども決して虚弱に至らざる也。都て疎畧に仕込たる蠶は皆健固なり。家に有て性質健固なるは金繭蠶に夏蠶なり。此蠶は年々粗悪の繭を結ぶ。故養方も隨て粗畧に飼るゝゆへ粗畧に自然馴て健固になるなり。良繭を結ぶ蠶は年々大切な飼ひ透間の風も厭様な養ないて新鮮の空氣を吸ざる。故自然虚弱になすなり。白繭蠶黄繭蠶此良繭を結ぶ蠶にても掃立より寒暖に應じて一日に二三回つゝ戸障子を開きて新鮮の空氣を入べし。如斯なす時は自然蠶風も馴て風を恐れず健固になるなり。又寒暖に隨て日中二三回つゝ桑へ露を吹き與ふべし。如斯なすときは蠶露に馴て霖雨の節少く露ありてもねまれず。都て初めの仕込か肝心なり。蠶に良藥は新鮮の空氣なり。此良藥を毛蠶の内より日々に與ふる時は自然健固になりて病の憂なし。

新撰 養蠶獨案内 終  
 實用





群馬県立図書館



0499537-9